

人か喰種か両方か

札幌ポテト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何かの間違いで0番隊に入ってしまった少年
幸か不幸か、何かが変わる物語。

目次

潜伏編

1話

2話

3話

4話

5話

6話

7話

8話

9話

芳村エト

10話

11話

12話

逃亡編

13話

14話

15話

16話

ラボ襲撃編

17話

18話

19話

20話

1

8

14

19

25

31

38

43

50

56

62

70

75

80

85

92

98

104

108

113

121

エピソード

4
2
話

4
1
話

4
0
話

3
9
話

3
8
話

3
7
話

3
6
話

3
5
話

決戦編

3
4
話

3
3
話

3
2
話

3
1
話

3
0
話

2
9
話

2
8
話

2
7
話

2
6
話

2
5
話

2
4
話
+
紹介文

竜戦編

2
3
話

2
2
話

2
1
話

245 240 233 226 219 212 206 201

192 187 181 175 170 165 161 156 151 146 141

137 132 127

\sqrt{E} \sqrt{A}



258 251

潜伏編

1話

パサパサと、ページを捲る音だけが広大な空間に響いている。

読んでいる男の名は和修常吉、CCGの総議長である。

その手にある書類はとある事件のレポートだ。

と言っても強力なグールが出てきたわけではない、それも解決済みであるのだが内容の方が問題なのだろう。

「……これが、やったのか？」

写真に写っているのは年端も行かない少年だ、資料によると身長155cmの14歳らしい。

だがその隣にある資料の写真には、とても言い表せないような惨殺現場がそこにあった。

「間違いありません、証言もあり、付近の監視カメラから確認が取れています」

書類を届けた男は確かな事実であると、答える。

虚偽の報告にしては些か突拍子もないものだろう、しかし総議長は別の疑念を述べた。

「喰種ではないのか？」

グール同士の殺し合い、それならば別に問題はない。

中学生であっても、その程度ならば起こってもおかしくはない。

ただ中学生の方も始末してしまえば終わりなのだ。

「血液検査の結果としては、そうではないかと」

しかし、現実としては違った。

検査結果も付属しているようで、それを見れば違和感を覚える点は見当たらない。

つまり、ただの中学生がグールを倒したのだという事が事実であると証明されてしまうのだ。

それも、一方的な惨殺という形で。

「御一考を、お願いします」

これを世に放つというのは危険だ、むしろ保護した方が利になる。そう言っているのだろう、事実ここまで行つた少年を解放するとう考えは元から無いだろう。

幸いにも、孤児院で過ごしていたようで話は簡単につく。

「……いいだろう」

少しの静寂の後、重圧感のある声が響いた。

なりりようたろう
「成遼太郎、彼の0番隊への編入を許可する」

これから世界に幸か不幸か、影響を与える存在、その名が今初めて、世界へ認知されたのであつた。

☆

おつす、オラの名前は成遼太郎！

突然襲つてきたグールをぶつ殺しちやつた14歳だよ!!

待て、変な目で見ないで欲しい。

違うんだ、色々違うんだ。

確かにわたしの身体能力はズバ抜けている、ただそうは言つても同年代の中学生を封殺できる程度であり、正直グールとほぼ同じ動きが出来た時は鍛冶場の馬鹿力が発動しただけだと思うけど違うんだ。

偶々グールから出た羽と似た尻尾みたいなのが背中から出たけど人間なんだ、少なくとも血液検査では大丈夫だった。

両親は病弱のせいで実質居ないけど多分人間なのだ、だから私も人間だと思いがヤバイんだ。

何がやばいって、捜査官にならないかってスカウトされたんだ。

しかもほぼ強制的にである、ふざけてるのだ。

← 偶々出てきたグールを近くに落ちてた鉄パイプで殺る

← くそ長い事情聴取後に捜査官からスカウトされる

← 孤児院まで根回しを済ませている上に卒業勧告がされる

← よく分からない部隊へ編入された

← ここまでの流れをざっくりと纏めたが、どう見てもおかしいのだ。

幸いというか尻尾が出た時はテンパリ過ぎて偶々弾丸みたいに飛んできた羽を弾けた後に消えて、監視カメラも狩りの為か元から壊されてたのでバレていない。

おかしい、色々おかしい。

私の身体もたぶんやばいが、命がそこらのゴキブリと同等に感じる捜査官へなれというのがかなりやばい。

しかも孤児院からお別れという名の退去宣告もされており、両親の医療費を稼ぐという意味では「良かったわね」とまで言われた。

まあ孤児院という慈善事業は大人になるまで面倒を見るのではなく、生きていけるまで面倒を見る場所だ。

金稼げるようならば出ていけと言われるのも仕方ない。

というわけで、これからやばい人生を送る事になるのだ。

泣きそうである、というか泣いた。

とても14歳が背負って良い仕事ではないと思う。

ただ決まってしまったのでどうしようもない、1日1日を噛み締め生きていくために、日記をつけようと思う。

遺書代わりにもなるだろうし、出来る限り命を大切にしていきたい。

☆

○月×日

連れてこられたのは私の編入する部隊、0番隊である。

中を見てみれば殆ど自分と似たような所かそれ以下の年齢の者達で構成されている。

あ、なんだここは養成所か。0って言うのは1に至る為の訓練部隊って事ね、と納得した。

クインケというグールと戦う為の武器も貰えた、名前はユキムラで甲赫という部位を使用してるらしい。

少しだけ心の中にある厨二病が擽られたが、それは次の言葉で掻き消された。

「今から狩りに行くぞ」と。

○月a日

久しぶりに日記を書く、いやマジで大変だったんだ。

怠けていたとかではない、自分で生きるのに精一杯だったのだ。隊長+αでどこへ行くかと思いきや、地下に行ったのである。

それも、グールがいっぱいいる場所だ。

まさかのいきなり実戦投入である、と言っても私は他の支援がメインであまり戦っていないかったのだが四方八方からグールに襲い掛かられている状況が数日間も続けば精神は摩耗する。

皆の見えないところで何回か吐いた、見られた所でも2回吐いた。血飛沫が舞う戦場を見て何とも思わないほど心は強くない。

そして何より私よりも年下の少女とかがメインで殺してるのだから恐ろしい、使えないゴミ呼ばわりされたがイラツとして貧乳扱いしたのは今更であるが大人気ないと思う。

後で伊丙三等には謝ろうと思う、まだ12歳だけど頭を下げる事には特に忌避感はない。最年少なんだよね、やばいよね。

あの子強すぎでやばいね、しかも周りの子達も年は私と同じか少し上程度だがほぼ同格だ。

そしてなにより有馬貴将が無双しまくりであった、あの動きヤバすぎる。0番隊らしいが、あの動きは異次元である。

真似しようと思って地下脱出後に練習してみたが、ほぼ無理だった。

これが捜査官のベシツクならばかなりやばい組織だ、CCG。

とりあえず完全にお荷物状態であったので、邪魔にならない程度に知識や練習をしたいと思います。

○月b日

伊丙三等の小間使いになりました、成三等です。

呼び捨てされてます、クインケの使い方を教えてもらってますがこの子マジで強いのがわかります。

あれだ、人間の可動域とかを完璧に把握してるから動けるんだ。

なので無理矢理柔軟をされました、鳴っちゃいけない音が身体中からした時はケラケラと笑っていました。

いつか泣かせようと思います。

○月c日

以前、私から出た尻尾なのだがあれは尾赫というものらしい。ここ数日、映像データで確認したので間違いない。

深夜の森の中で試しに踏ん張ってみたら出てきた、ついでに甲赫も出てきた、私は人間じゃないかもしれない。

というかグールじゃないかと思いい目を見たがしつかりと片目が人ものじゃなかった、これバレたら殺されるやん。

まだ10日程度しか身を置いていないが、少なくともモルモットにされる未来しか見えない。

頑張つて隠し通したいが、もう少し自分についても調べる必要がありそうだ。

○月d日

調べるとどうやらRc細胞という物が必要であり、それは人間にも元々あるようなのだが私の嫌な事に気づいてしまった。

グールの武器である赫子、あれを暫く使うとRc値が著しく落ちるのだ。

自分の血を取って確かめたので間違いない。

たぶんそれで前回はバレなかったのだと思う、そして更に嫌な事に溜まる速度が成長してる、使えば使うほど筋肉みたいに増えてる。

筋トレしても中々筋肉痛にならないなと思っていたが、嫌な事を知ってしまった。

両親の家系図なんかをそれとなく聞いてみたが特に変な事はなかった、でも恐らく先祖返りなのだと思う。

グールとの間に子供が産まれるというのは知らなかったが、これからより一層気を引き締めなければならぬ。

というかこんな事書いてるの見られたら終わる、誰にも見せない理由が出来てしまった。

こつちも慎重にしよう、特に人との距離感を。

☆月x日曜

0番隊に編入されてから一ヶ月が経った。

早いものだと思うが、正直濃すぎた。

偶に顔を出しに来る有馬貴将の動きのヤバさを感じながら「バレたらこの人に殺されるなあ」と思いながら伊丙三等にボコされている。ただ気付いた、気づいてしまった。たぶん、この人は倒せる。

今程度であつてもグール特有の筋力と速度で圧殺する事は出来なくはない、有馬貴将の動きというだけで見れば同じパフォーマンスも不可能ではないかもしれない。

ただ動きに差があるのだ、反射やフェイントなどがわたしには全くできていない。

伊丙三等から雑魚呼ばわりされたのも慣れてきたが、正直これは好都合である。

強い者ほど、強い敵と戦う義務が出てきてしまう。

私は、強い存在になる必要はないのだ。

ただ自分がグールだとバレなければいい、それなら寧ろ戦果を出さない方がいい。

ただばれた時のために殺されないようにしなければならぬ、とりあえず伊丙三等の動きを真似しながらとりあえずそこそこ働きそこそこ戦果を出さないように頑張ろうと思う。

☆月 a 日

筋力がおかしい、片手でバーベルを上げれる。

そこそこ健康的な身体だね、と言われる程度の体でだ。

これがグールの力である、そりゃ人間程度簡単に捕食してしまうだろう。

そんな私であるが、未だに全力で動いた事がない。

いや一度グールを鉄パイプで殺した時はしたが、あの時よりも遙かに体は育っている。

適当なタイミングで、自分の限界というのを知っておくべきだろう。

☆月 b 日

来週、久しぶりに地下へ潜る事になった、と言っても前回よりも小規模で有馬さんはいない。

マッピングなどの作業を前はメインでしていたが、今回もさせてくれるあたりまだまだ弱い奴で生きていけそうだ。
このまま何の憂いもなく生きていきたい。

☆月c日

もう手足の感覚がない、お腹が空いた……最後ぐらいステーキでも食べたかった。

2話

地下、いつも通りにグールが多く出てきた。

まあそんなもんだらうと、0番隊の数名が随伴した林班の班長、林一等捜査官は感じていた。

10数名程度の小隊で各所のマッピングを行うのが基本となるこのモグラ叩きであるが、今回は先月と違い有馬貴将がいらないというだけで不安感がある。

有馬貴将は怪物だ、19歳にして梟を撃退した本物だ。

その時を実際に目の当たりにした、あれが人類の希望である。

対して梟も、人類の絶望であったがあれもやばい。

あれも地下で接敵したと聞く、このモグラ叩きもそういった物を排除するために行われているのかもしれない。

そして後ろからついてくるのが有馬貴将を排出した部隊、0番隊だ。

今回は作戦前に殉職した捜査官の補充として来ている、明らかに子供であるがその実力は有馬貴将で経験している、疑念はない。

だがそうだったからなのか、今日の異常さを気づいていなかった。

得体のしれなさが強い0番隊が随伴しているのを皆良く思っていなかったが、逆に高揚していた林は気づかなかった。

今日はいつもより、グールが散発的な遭遇に収まっていると。

それが近づいて来た時も、やっと出て来たかと2人が突撃した。

林班の突撃隊長のようなものである、二等であるがそれに似合わない実力を持っている。

その2人が、瞬殺された。

同時に今回の指揮官から撤退命令が下った。

無理もない、あれはやばい、そう林も感じ取れていた。

梟ほどではないにしろ、恐ろしい存在であると察する事が容易に出ていた。

だが、逃してくれるわけがない。

人間よりも走るのは当然、遥かに速い。だがこいつはもつと速いか

もしれない、つまり必要な存在がある。

囿だ、死ぬ事が分かっている生贄、殿である。

それは誰でもなく、林自身がやるべきなのを林はすぐに理解していた。

0番隊の少女は判断の遅かった林に対して舌打ちをしながらも突貫、数秒間で凄まじい戦闘が繰り広げられたが負けた。

致命傷は負わなかったが弾かされている。

あれ程の動きの出来る人間であっても、そうなるのだ。

ぶつかった壁は凹み、意識を失っている。

部下へ背負わせ、撤退命令を発した。

これから殿は私が勤める、未来の有馬をここで死なせるわけにはいかないのだ、そういう意思を持って残ろうとした時だ。

後ろから襲いかかって来た尾赫が弾かれた。

前にいるのは、もう1人の0番隊の少年だ。

まだ息子と変わらない程度の年の子である。

だがその目と行動を見て、すぐに察した。

『殿は自分がやる、彼女を頼む』と。

初めて、0番隊から人間としての熱さを感じた。

そしてあえて振り向かなかった、自身のクインケを落として後を任せた。

尾赫のクインケ、Aレート素材でできたものだ。

餞別である、自身の情けなさとしなされた責任を感じながら走ることにだけに集中した。

後ろから「え？」という言葉が聞こえた気もするが、気のせいだろう。振り向かず、前だけを見つづけた。

☆

☆月d日

喰ったら元気が出てきた。

え？何を喰ったて？そりゃグールしかないよね、襲いかかって来たグールを食べた。味は酷いなんてものじゃなかったが、食わなきゃ死んでいた。

落ち着いたので軽くまとめよう、頭の整理をするためにも。

地下へ来てやばいグールに当たったのだ、推定レートはS以上か。補充で入った班の2人が瞬殺、遅れて伊丙三等も突っ込んだが弾かれて意識を失った。

すぐ後に班長から撤退命令が出たが、その隙を狙って班長を潰そうとしてきたので仕方なくユキムラで弾いた。

頭を失えば班は混乱する、そうすれば死ぬ可能性が遥かに高くなる。

だが撤退するにも囷が必要だ、それを誰に任せるんだと目をやったが、そのまま私を置いて逃げていった。

思わず「え？」と言ってしまった。

私もすぐに逃げ出したかったが、簡単に逃してくれる相手ではなく戦闘は開始。

ユキムラが破壊され、班長が落としていったクインケでも戦ったが相手の硬さにもはや限界であった。

その後のことはよく覚えていない、誰の目もないので赫子を使った全力で戦った。

気付けば敵は死んでおり、自分はズダボロであった。

それと限界を超えて赫子を使ったせいかわ酷い空腹感が襲って来た、なので仕方なくグールを食べた。

焼くことも出来なかったので生でだ、死ぬ程嫌だったし今でも気持ち悪い。

それと身体のデカイ傷は治しておいたが、細かい傷はそのままにしておいた。

それに体力を回せるほど、余裕はない。

気付けばよくわからないところまで移動しているだろうし、時間感覚も狂ってる。

腕時計でもう3日経っていることしか分からない。

にしても恐ろしい敵だった、赫子が纏えるのは知らなかった。

自分の限界も知れたし、生きて帰れたら練習してみよう。

もう、疲れた。

☆月 f 日

生還した、結果としては1週間ほど地下にいた。

救助者を見てすぐ安心して気絶してしまったが、恐ろしいほど戦闘をした。

寝る事も出来ず、グールが溢れ出してくる。

全てを排除する余裕はなく、何体か倒しては逃げての繰り返し、食料なしでよく生き残れたと思う。

気づいたら病院にいた、お見舞いには隊長と補充で入った所の班長、伊丙三等が来てくれた。

林班長に対しては呪詛を吐きたくなかったが、今回は我慢した。運が良かったと言つてとりあえずしらを切っておくことにする。

それと今回出会ったグールは鎖蛇と命名され、レートはSSとなつたらしい。今後上昇するかもしれないから気を付けろと言われたので素直に「そうします」と答えた。

生身の人間が渡り合つていい存在じゃない、数秒とは言え渡り合つた伊丙三等がやばいのだ。

とりあえず運が良かったという事で落ち着いた、ちなみに血液検査はめちやくちや戦つたおかげで大丈夫だったらしい、あつぶね気をつけよ。

△月 g 日

あの忌々しい地下置いてけぼり事件から一年がたった。

その間にも色々な事があつたが、あれほどでは無い。

15歳となつて仕送りも安定して出せるようになってきたのだが、母親が亡くなった。

老衰らしいが、まだ40も超えていない筈だ。

父ももう長くないらしいが、キチンとした墓を建てると約束はして来た。

本当はまだまだ生きて欲しいのだが、現実には残念な程に見えてくる。

あと最後の言葉として母から「気を付けなさい、困った時は有馬を頼つて」と言われた。

有馬貴将の名前を出した記憶は……あー、手紙に書いていたな。凄い人がいると、簡単に死ぬような環境だし強い人に強くしてもらえつていうのは正しい形だろう。

一応確認として、自分は本当の息子なのかやんわりと確認した。血は繋がっているとハッキリと答えたのち、母は他界した。

△月h日

グールの事を調べていくうちに、奇妙な事を考え始めていく。

私はなぜ、人を食わずに生きていけているのか。

それについては簡単で、その運動量を補うだけのエネルギーを日常的に摂取しているからなのだが、それはなぜグールにも適用されないのか。

ただその答えもわかった。

私はRc細胞が勝手に増えていく特異体質なのだ、それ故にその補充の必要がない。

故にグールは人の中にあるRc細胞を取り込む事で生きているのだろう。まあ単純に血肉がエネルギーにも変わっているのだと思うが、必要要素なのだろう。

あと単純に人肉しか美味と感じないのも大きな要因か、そういった食料でもあれば少なくとも管理はしやすそうだ。

△月i日

伊丙三等が伊丙二等になった、もう15歳となっており気付けば私も17歳だ。

後輩も色々と出来た、全員相変わらず若いのだがこれだけの実力者達をどこから引っ張って来てるのかとたまに来る上官へやんわりと聞いてみるが教えてはくれなかった。

それとそんな話をしたのは関係ないとは思うが、2番隊の方へ飛ばされた。0番隊として戦果を出していなかったので当たり前と言えは当たり前だろう。

と言ってもやる事は変わらない、周りは0番隊から来たと察しているようで距離も取られているが気にせずゆらゆらと生きていきたいと思う。

階級は変わらず三等なのでパートナーとして真戸上等が割り当てられた、かなりの変人であり嫌な予感がする。気をつけよう。

ただ幸いなのはトリオな事か、亜門一等は良い人そうなのでうまく盾にしたい。

△月j日

本当に無茶苦茶する人だった、倫理観ぶっ壊れてんじやねーかなとおもう。

最初の任務でいきなり新人の自分を囮にして来た、Bレート程度なら0番隊の時でも狩っていたので問題無かったが静かにブチギレておいた。

ただ何を思ったのかそれから幾度となく無茶苦茶に付き合わされる事になった。

亜門一等をつれない時は100%無茶振りである。

そのせいで階級が一つ上がるほどで、普通に付き合いが長くなったなったせいか飯もたまに連れて行かれる。

そして口を開けば娘が可愛いと呟くか、隻眼の梟を必ず殺すという話だけをしていた。

この人、人間には良い人だけどグールだけは必ず殺すという一貫性がある人だ。

私の事がバレたらやばい、今までの付き合いとか関係なく殺しにくるだろう。

娘さん可愛いですねと煽てるつもりでいったら「やらんぞ」と静かに切れた、あの威圧感で襲いかかって来られるのは勘弁して欲しい。

3話

捜査官の中でも異端である人物がいる。

隻眼の鼻に妻を殺され、特等に至れる実力と実績を持ちながらも上等のままにいる男がいる。

真戸呉緒、それが彼の名だ。

今しがた片付けたグルルを前に、特に気にせず部位の良さを語ったりしながら世間話を始める程に倫理観がぶっ壊れている。

グルルは殺す、子供であろうと変わらない。

そしてそれに付き従っている青年の名は成遼太郎、二等捜査官だ。

世間話に付き合わされている。

一応は亜門一等を含めたトリオなのではあるが、今は2人だけだ。

「成くん、君は私を変人だと思っているね」

「私に限らないと思うんですが……」

死体を放置しておくほどやばい組織ではないので、片付けが来るまで待機している2人、一般人が見れば卒倒するだろうし、必要な仕事だ。

また、最初の頃とは違い気を使わないコミュニケーションが取れている。

「そして君も同様に扱われているんだが」

「え、そうなんですか!？」

「だがまあ、君は今のを聞いて気にしていないだろう?」

「まあ……そうですけど。何となく真戸さんとトリオになってから皆距離の取り方エグかったですし。亜門さん連れずに私だけ離れた時は大抵無茶振りですし……結構一緒にいた気がします。それでもまあ……何言われても気にはししないでですね」

「私もだ」

お前は気にしとけよという目で軽く睨む成二等、ただその目はまたこの人変な事を言い始めたよという若干の諦めの入った親愛のある目をしている。

「私には絶対的な自信と使命がある。それは君も同様だろう、そして

……それに裏付けられたものは、5年前にあった地下での生還かな？」

睨みつけていた成であるが、軽く目を逸らす。知られたくない何かへ迫っていたのだろう、何も言わず無言の時間ができてしまう。

だが、話し始めたのはそんな事を追及する為ではない。そんな事をするのが少なくとも、幸か不幸かこの真戸のパートナーとなった者へ与える試練ではない。

「こんな所で腐っているのはよしたまえ、良い上司を勧めよう」
ビクツと肩が揺れた。

以前はもつと素直に反応して面白かったのだが、大人へなるに連れて反応が薄くなって来た成の拒絶反応。

また見られたのは良かったが、それ相応の事をしてもらい続けて来た。

「……一応確認しますが、真戸さんよりマシですか？いや真戸さんじゃなければそうだと思いますけど」

「太々しくなったねえ、最初は必死に敬語で相手してくれたのに」
口を開いてくれたが、警戒心は解かれていない。

結局、彼の核心までは真戸でも知る事は出来なかったがそんな事はどうしても良いのだろう。

ただ、良い素質は良い形で終わらせたいのである。

「上等に振り回されてたらそうもなりません、何回囮にしたか覚えてますか？」

「10回を超えてからは気にしてないねえ」

「はは、娘さんに泣きつきますよ？」

娘に泣きつくと言っても歳はそう変わらないのだが、流石に愛する娘を盾にされては敵わない。

この歳でも亡き妻へ泣き付くだろう、それぐらい愛おしい。

だからこそ、この若者に真戸はその娘の未来が明るくなるような世界にして欲しいのだ。

もう喰種捜査官になる事を決めている娘を、この界限で任せられる少ない人間である。

「これからも、頑張りたまえ。ちょうどいいし、この前片した奴を持つていくといい。そろそろ出来上がる頃合いだ」

「あの、さらつとSレート羽赫渡さないで貰えませんか……？」

「あいにくと、私は羽赫をあまり使わないからね」

成遼太郎を見た真戸の評価であるが、ある程度のレートを単独で倒せるだけの實力はあると考えている。

特に、攻撃を避けるのが上手い。

この羽赫も彼がいたから容易に真戸はトドメをさせた、餞別としては申し分のない物だろう。

「ところで、どこの班へ？」

「そのうちわかるさ」

これからCCGに何かしら影響を与え、牽引していく者。

その途上者であると、この時から見抜かれていたのを成は知ることには無かった。

☆

○月k日

あの人ぶつ殺してやろうかな。

そう思うのも仕方ないと思うんだ。

黒磐特等の部隊へ編入させやがった、幸いなのはパートナーがいな
い事だけである。

案件が基本的にAレートを超えている、しかも捜査そのものは単独
でやらせようとしてくる。

出会ったら処理しろとでも？こちとらまだまだ人生走り始めた1
9歳やぞ、老い先短いあんたが勝手にやれやジジイ！とか心の中でク
ソほど思ったと言えるような立場でもメンタルでもない。

頑張つてバレない程度に戦うのをサボろうと思う。

○月l日

グールというのはマスクを被っている、面が割れない為だ。

そこから名称がつけられたりするのだが、最近とあるグールがこの
界限で有名になっている。隻眼の白虎、レートはSで白い虎のマスク
をしている。

身体能力、特に体術が凄まじく被害は確認されていないが相対した准特等と上等を素手で撃退したらしい。

またその赫眼は片目のみ、つまり隻眼であった事で不吉な存在としてレートはSで評価されたらしい。

事実、隻眼の喰種は不吉の象徴であるのだから妥当な判断だろう。

……うん、私だね。

いや違うんだ、違うないけど違うんだ。

マスクはグールとして試しているのが見られてもバレないようにするのと、グールそのものへの聞き込みが出来てどこにやばいグールがいるか調べるのに良かったのだ。

街中での移動練習にもなるし、そこは気にしなかった。

いつもの情報屋の所へ行ったら情報屋が殺されてその2人がいただけなのだ、断じて私は悪くない。

ぶっ飛ばしたが殺されそうになったんだから仕方ない、殺してないし怪我もそこまで大きくしないように心掛けた。

ただ被害なしでSにするのはヤバいな、これ特等動いてくるんじゃない。

朝一番で要注意グール扱いされたわ、しかも担当黒磐班ですけど。

しばらく、不用意な外出は控えよう。そうしよう。

○月n日

父が亡くなった、母と同様老衰だった。

しかし42歳である、若過ぎるがそういう家系なのだろう。

峠を迎える日、私は病院へ行った。

ぐったりとした様子で、もう私の顔も見えないだろう。

しかし雰囲気で分かったのか、父は私を呼ぶと耳元で呟いた。

和修に気をつける、それが父の最後の言葉であった。

×月m日

最近グール界隈が賑わっている。

いやもつと前から名前そのものは知られていたそうだが。

アオギリの樹、という組織が本格的に動き始めたらしい。

私にすら声がかかって来た、情報屋経由ではあるが断りを入れてお

いて貰った。

流石にやべー奴らには関わりたいくないのである。

4話

11月16日

真戸上等の告別式が行われた。

20区での出来事だ、超凶悪なグルルを相手したわけではないが殺されてしまった。

亜門一等からは頭を下げられてしまったが、これに関してはどうしようもない。

人の死ぬ日は、決まっている。それが真戸さんの場合は、その日だったという事だろう。

命を奪い続けていけば、報いを受ける。

いずれ私も、遅かれ早かれそうなる。

ただでさえ家系的に寿命は短そうなのだ、明日も生きらる保証はどこにもないのだと実感させられた日だった。

娘の暁さんにも会ったが、もうそろそろ彼女も捜査官になる。

こういった因果が回っていくのか、断ち切れないものなんだろう。

11月0日

真戸さんの事もあったので、グルルとして20区に潜入しにいった。

のだが、情報はあまりオープンではなかった。

分かったこととしては『あんていく』という名の店が捜査官へ目をつけられないようにグルルの支援をしていることぐらいだ。

私としてもあまり厄介方はごめん被りたかったので、噂話を聞く程度に収めた。

捜査官を殺した少女は直前に殺した親の子供、そのぐらいは資料でも知れていたが、やはり真戸さんは相当やっていた。

親の首を、鞆に詰めてプレゼントしたそうだ。

あの人の行動は全てグルルを潰す為だ、これは肉体的にも精神的にも殺す為に。

なので何度かこの手の手法を試そうとしてる時に関しては真つ先に私がトドメを刺していた。

なので私の経歴では子供や親といった者の討伐が多い。

不必要に痛ぶるのは気持ちのいいものではない、真戸さんとは最後まで分かり合えなかったところであるが、因果だろう。

タイミングがあれば戦うし殺すが、自ら出向いてまで殺そうとまでは思わない。

暁さんや亜門一等がこの巡りに巻き込まれているのは少し心苦しいが、私のやる仕事ではない。

そもそも目的は敵の存在と、何があったのかを知る為だ。

もう来ないだろう、そう思いながらこの日は20区を後にした。

12月p日

本格的にアオギリの樹が動いているらしい。

かなりまずい状況だ、私が駆り出される。

アオギリという組織に負けるとはカケラも思っていない、ただ相応の戦力のある場所なのは知っている。

そして私の所属するのは特等の部隊だ、1番強い人は当然1番強い敵と戦う。

よし、隙を見て逃げる言い訳を考えておこう。

12月19日

梟強い

12月q日

あれだ、この前の戦いは酷かった。

アオギリの樹の立てこもるアジトへCCGは襲撃した、その時に当然私はつれて行かれた。

遺書も書けと言われたが書く相手もないので白紙で出したものなんか言われて嫌な記憶ではあるが正直どうでもいい。

程々に出てくるグールと戦い、久しぶりに会った亜門一等なんかと行動していると、それは現れた。

隻眼の梟、SSSレートの現状最強のグールである。

立ち塞がる化け物、並の数は機能しないような存在だ。

そして当然、化け物と戦うのは殺されても大丈夫な人が対応できるような人である。

一応注意書きとして殺されても大丈夫な人というのは若さや家族の関係上、命の重さが比較的軽い人たちの事だ。

未来ある命を無益に散らさない、素晴らしい考え方である。

なので亜門一等なんかは追い出された。

ただ私も追い出されると思ったら首根っこ掴まれた。

亜門一等は追い出した癖に私は無理矢理残しやがったのである、おそらく過去に真戸上等とSレートの羽赫を倒した事があるせいだ。

梟は羽赫と甲赫を持つグールだ、ある程度の経験値の無いものが相手しても無惨に散る。

火力と経験が当然必要だ。

クインケとして過去に林一等がくれた物もあるが、選ばれたのは真戸さんのくれた物を持っていたせいもあるだろう。

普通に戦力として数えて来たのである。

一応この場で一番若いと軽く抗議したが、一番期待してると言われてしまい逃げるに逃げられない上に追い込まれた。

前を張りたくないのに張らされた、殆どの攻撃は紙一重で避けれたが気を抜けば簡単に殺されていただろう。

避けるのだけは上手いという評判が亡き真戸上等に広められたせいでこうなったのである、とりあえず地獄にいるであろうあの人は恨んでおく。

特等2人が凄いくインケを使っていたおかげで何とか戦いになりはしたが、回復力と耐久力が高過ぎたので勝負としては引き分けとなった。

ただ気分によっては全滅していただろう。

羽赫クインケ『大和』も然程効いていないように見えた、ああいった存在と戦うのはごめん被りたい。

それとグールの收容所『コクリア』が落とされた、同時並行でアオギリの樹がやった。

今後、忙しくなるだろうと特等から肩を叩かれた。

何がエースじゃ、ぶっ殺すぞ。

口に出せるようなメンタルはないけどな……。

1月1日

久しぶりに孤児院へ顔を出して来た。

育てのババア共には少なくないお年玉を渡して帰った、金は真戸さんの下にいたせいで少なくない量がある。

家を買えるほどではないが、今のボロアパートを出るには良い機会かもしれない。

ついでに0番隊の方にも顔を出してみた、いつの間にか女性になっている伊丙を見たが向こうは特に私を気にしている様子はなかった、ありがたい。

そういえばいつか泣かせるつもりだったのだが、さすがに17の少女と書いてバケモノと呼ぶ子にやるほど命知らずではないし、関わりたく無い。

なので嫌な記憶はさっさと忘れ、目的の後輩たちのところへ向かった。

後輩何人かそれはそれは良い子たちだったのでお年玉をあげた、正直私より稼いでそうだけどそこは気にしないでおいた。

☆

捜査官達の話題というのは基本的にどのグループが出たとか、討伐したとか、階級が上がっただとか、そのような話が多くなってくる。

仕事柄仕方ないとは思いますが、今の流行はやはりこの前現れた隻眼の梟の事である。

しかし、それを塗り潰す話題が今は多い。

「聞いたか、有馬の再来」

「ああ……梟相手に、1人で時間稼いだんだって?」

「元0番隊だってよ、そりややべえよ」

「二階級特進もあるんじゃないか」

「持つてるクインケも凄いらしいぞ」

局内を歩けばそんな話が無処からともなく聞こえてくる。

それだけ梟という存在はCCGの歴史の中でも大きな存在であり、それと渡り合うだけでもその捜査官の名が知れ渡るのだ。

そして今回渡り合った捜査官の名は成遼太郎、19歳の二等捜査官

だ。

ただそれだけならばここまで話は大きくなる。

この話題が広まった一つの理由、それは有馬貴将と同年齢同階級の偉業が影響している。

当時19歳、二等捜査官の有馬は梟の腕を奪って撃退している。

そして成は特等達の支援ありきではあるが、梟を結果として撃退している。その事実は大いに話題を盛り上がらせた。

そして、ここにはその反響に対して苛立ちを抑えている人間がいる。

「どうした入、目付きが悪いぞ」

0番隊の副隊長を務める宇井のパートナーでもある人物の名は伊丙入、二等捜査官だ。

記録上16歳での入局になっているがその才能を買われ12歳から活動し、今でもその化け物じみた殲滅力は0番隊でも随一である。

「郡先輩は嫌じゃないんですか、あの雑魚成が有馬さんみたいに持ち上げられて」

「雑魚成って、今はそうじゃないみたいだが」

そしてここまでつかかるのは、14歳で同じ部隊に長く共にいた成の事を知る人物でもあるからだ。

「有馬さんは梟を追い詰めて撃退してるんです、あんな内容知ってたら同じ言葉は言えませんよ」

今回の内容は今の盛り上がり方にしては確かに良くない。

成の行った事は基本的に囮である事と、何度か羽赫のクインケで敵の攻撃を牽制した程度だ。大局に絡む偉業を為しては断じてない。

ただ一緒に戦って救われた命が多いことや、その動きそのものは特等達に引けを取らなかつた事から目にした捜査官が噂を広め、今に至っているのだ。

何かを為していないのに、自身の崇拜する有馬と同等に評価されているのが気に食わないのだ。

自身との打ち合いでは一度として負けなかつた相手ならば、尚更である。

過去に地下で殿を務めた時も「よく死ななかつたわ、運だけは良いのね」というほど、彼女は成をそもそも好きでない。

「まあ、そのうち分かる。嫌でも成には、厄介えきごとが増えていく」

宇井は有馬の事となれば熱くなる伊丙を宥めるが、確かに宇井としても今の評価が過大であるとは考えている。

多少なりとも0番隊にいた時期の成遼太郎を知っていれば、そう判断せざるを得ない。

「それを見てから、判断すれば良いだろう」

なのでそう言うしかない、伊丙のこれも話題が変わるまでの数日もしたら落ち着くだろう。

成遼太郎はただ若いだけの捜査官、それが浸透するのはいつまでか。

あげて来た少ない功績を思い浮かべながら、彼へどの様な無茶振りがされるのかを宇井は考えるのであった。

5話

2月s日

グールとして情報を集めていると、やはり色々な話を聞ける。どの区にやばいのがいて、アオギリに新しく入ったヤベー奴がいるとか、そんな話の他にピエロ、魔猿、ブラックドーベルといった団体の名を聞けたりとかなりやばいんだ。

特に最近はやばいのグールが話題らしい。

絶対に関わりたくないが、最近の私に振り当てられる仕事が軒並みコクリア脱獄犯のものが多く。

さすがにシヤチといったSSレートまではやる事は無いと思うが、ちよいちよいSレートが混じっている。

なので絶対に見つけても戦わない事にした、私は並に生きたいのである。

2月t日

有馬さんと久しぶりに会った。

梟と戦ってどうだったとか色々聞かれた。

当たり障りのない事を色々答えたと思うが、あまり記憶はない。

現CCG最強、白い死神と会えばだれでもテンパるのは仕方ないと思う。

ただグールと戦うのは、嫌か？という質問だけはちよつと覚えている。

「戦うのは嫌で、命を奪うのは苦手だ」と答えた。

復讐の因果に巻き込まれたくない、そう思っただけの答えであるが、その後すぐに「そうか」と答えて有馬さんは消えた。

質問に対して何か反応をしたのはそれだけだったが、そもそも何で話しかけてきたのかは分からなかった。

3月u日

0番隊へ戻された。

正直歓迎されていなかったが、有馬隊長のパートナー役に指名されてしまった。

伊丙の私を見る目が明らかにヤバかったので彼女は出来る限り避けている。

あの人、多少なりとも一緒にいたので有馬さん崇拝者なのは知ってるしそのパートナーに私が選ばれたのも納得いかないし気に食わないのだろう。

正直変わって欲しい、ていうか誰か助けて欲しい。

稽古という名の理不尽な講義が始まってるんです。

5月31日

授与式ではヤモリを倒したと噂の鈴屋君に声をかけられたり、上等となった亜門さんと話した。

黒巖特等にも会ったが頑張れとだけ言われた、真戸さんの推薦で入った時からこんな感じではあったが梟の時にそれなりの動きをしたせいで拍車が掛かっている。

ただ変わらず、有馬さんの鍛錬という名の理不尽は凄い。

両手で武器を振り回すのが何で難しいのかわかってない、そしてその練習の為だけに過去に討伐したSSレートの甲赫を渡して来た。

名は『草薙』と言い尾赫も入ったせいかわ有馬さん手持ちの『IXA』と似たような地面を通って遠隔で触手が敵を貫くと言ったギミックまで搭載している、ただ向こうは盾の機能があるのでそれが理由で恐らく使っていないのだろう。

緑色の西洋剣が二つ繋がったような奴で、単体での扱いが恐ろしく難しい。切り離して二刀にできるが、それを扱わせたいから渡したのがよく分かる。

なのでそれ相応の期待か何かがあるのだとわかってしまう。

そう思うと夜道と伊丙に気をつけようと、何となく感じてしまった。

6月v日

0番隊として捜査するというよりは、処理するという事が多くなった。

もう当たり前のようにSレートを任せられる、一度も単騎で倒した

事は無いのだが無理矢理である。

やったね、白単翼賞たくさんもらえるね……！

伊丙の目が最近、ていうかもうずっとだけどやばいね！

後輩達はなんか羨望の眼差しで見てるけど、それはそれでなんかきついんだよね！

……階級、上がりたくないなあ。

7月w日

宇井副隊長から有馬さんについて色々レクチャーされた、かなり今更感があるのだが……この人が有馬さんをどれだけ信頼しているかはよく分かった、伊丙もそうだが有馬崇拜者は同じところに集まりやすいのかもしれない。

もしくは私を引き込みたいのかもしれないが、伊丙に会えば殺される気がしてならないのであまり関わり合いたくないところである。

☆

8月になって少し時間の経った頃、有馬に呼び出しを喰らった。

これから20区にて大きな討伐戦が行われるのでその前の話し合いでもするのかと、この時成遼太郎は考えていた。

場所は有馬の指定した神社の境内で、あの有馬さんでも験担ぎぐらいはするんだと呑気に考えていた。

「……今なら冗談だと、笑い流せますが」

ただ、話はそう呑気な内容では無かった。

「アオギリの樹のリーダー、隻眼の王は俺だ」

アオギリの樹、今現在最もCCGとの抗争が激しい団体の名を有馬貴将は出していた。

出来る限り関わり合いたくないと考えていた組織の親玉であると、グルを纏めている存在だと宣言したのだ。

「なんで私にそんな事を」

「お前ならば、この諍いの絶えない世界を変える事に手を貸してくれるからだ」

有馬は自身の計画について大雑把にだが、話始めた。
グールと人間のわかり合った世界を目指すのが目的だそうだ。
自身を倒すグールが現れ、自身が倒されればそれがグール側の希望
となる前提の作戦だ。

確かにそうなる、確信を持って言える。

有馬貴将という存在はそれだけ、この世界に大きい存在だ。

それを倒したグールも相応の存在に成り果てる。

「将来的には俺の亡き後を任せられる」

そして、その役目の中の一つが任せられようとしている。

それだけの信頼を持たれ、この話をするだけで絶大なりスクを抱えている。

しかし、成はかなり言い淀む。

「ですが、私と有馬さんはそこまでの信頼がある程の付き合いは……」
ただ受ける受けないの段階ではないのだ、ここまでの話をして来た
事がおかしい。

有馬とは確かに時間だけで言えば5年も関わりがある、しかし実際の
関わり合いがある時間はここ半年である。

確かにこの半年は誰よりも有馬に付き添ったと確信を持って言える
のだが、それだけでこの話がされると思うほど自惚れてはいない。

ただ、それは有馬も分かっている。

「渡すものがある」

そう言う和二つのケースを渡す。

見慣れているから分かる、それはクインケのケースだ。

開けてみる、と言われ恐る恐る開封してみるが。

「……どこで、これを」

1振りの太刀と、4振りの小刀の様なクインケがそこにあった。

かなりの高性能なものというのが一目見ても分かる。

しかし、そんな事はどうでもい。

ただ、有馬の目がどこまで届いていたのかと言う事に対して畏怖の
目で聞いた。

「太刀の名は『鎖骨』短刀の方は『砂塵』地下でお前が倒した、グール

のクインケだ」

信用がない、それはあくまでも成視点での話だ。

有馬は自身が0番隊へ来てから見ていたのだ、そしてその確認を兼ねてここ半年で見定めたのだろう。

「……他に、この事を知るのは？」

「人では丈だけだ」

丈、平子丈の事だろう。

過去に5年ほど有馬とパートナーを組んだ上等捜査官だ。

成を除けば唯一のパートナーである、それなりの関係が結べているのは不思議ではない。

「……宇井さんや他の0番隊には秘密にしてるんですね」

ただ、自身と同等か以上の時間のあつた0番隊への信頼は少なくとも無いのだろう。

いや、あつてもここまではならないと判断されたのだ。

個人的には伊丙や宇井などといった信奉者は喜んで手を貸してもらえると思うが、今の有馬からすればお眼鏡に合わなかったようだ。

「それで、後ろにいる彼女は？」

ふと、気になっていた同席している少女を見た。

先程からいるところからして関係者なのは確実であるが、見覚えは全くない。

「隻眼の梟だ、と言っても成と戦ったのはその父親だが」

サラリと言い切った。

この場に現グルル最強と現捜査官最強がいるという事だ、元からこの2人で画策した作戦らしいが、もはや脅迫である。

正直に言つて、やりたくない。

私がやる必要はない、しかしここで断つて他言しないと約束した場合どうなるか。

少なくとも、アオギリのグルルに口封じをされる。

断るという選択肢が、そもそも存在できない。

「……分かりました、手を貸しますよ」

こうなれば成のできる事はない。

もはやこの広大な流れの中に巻き込まれてしまったのだ、どこで道を間違えたと言えば最初からなのだが、ここまで至るとは当時は思いもしなかっただろう。

「ただ条件が一つ、いいですか？」

もはや乗ってしまった船である、成は一応のやる気を出す為にある契約を結びたいと言う。

そしてそれに対しては梶の方が答える。

「うんいいよ、こつちでやっても」

あつさりと了承した、それを聞いたので満足したのか成は天を仰いだ。

「……死ぬまで付き合いますよ、有馬さん」

「ああ、頼む」

これから始まるのは彼が最も忌避した、混乱の渦中に混ざる事だ。成遼太郎という人生の中で、最も狂乱とした4年間の始まりである。

6話

9月2日

20区にある以前少しだけ調べたことのある『あんでいく』という喫茶店が今回の標的だった。

有馬さんから聞くに、ここは以前戦ったもう1人の梟の管理する場所だったらしい。

それがV、もとい和修に逆らったのが今回の大規模討伐作戦の原因である。

有馬さんからは色々話を聞いた、それこそ0番隊の庭出身の者は半グールのなり損ねであり、私の両親もそもそも人間とグールのハーフであった、そして和修という存在が行なってきた事実を知った。

間違いなく、悪である。

都合の悪い事に、正義の権利を持った悪だ。

故に、今回は有馬さんと共にアオギリの樹を乱入させる事になった。

色々理由はあるが、一つは父親の方の梟を利用する為なのと、半グールを作る為の素体を準備する事、そして和修への意趣返しだろう。

なので今回、0番隊の任せられている地下の要所を有馬さんと共に守る事になった。

地下へ逃げ込んだグールの排除と、外からの侵入を防ぐためにだ。

途中、上でやり合っていたグールが何匹か降りて来たがその後眼帯のグールが降りてきた。

情報でしか知らなかったが、有馬さんが戦って圧倒した。

正直かなり強いが簡単に倒していた、ただ気に入ったようでそのグールは殺さずに置いておかれた。

その直後にアオギリの樹のグールを通し、数刻した後には散らしていた0番隊を集めて地上へ向かった。

隻眼の方の梟がかなり場を荒らしていたので、有馬さんはそのまま戦いという名の虚構を演じて梟達を逃して戦いは終わった。

死ななくて良い命が大量に散ったが、それを背負っているのは有馬さんだ。

ただ少なからず、自分も加担したと言う実感に潰れてしまいそうだった。

9月x日

様々な命が散ったのだと言う事を集団で行われた告別式で悟った。中には亜門上等もいる、ただ検体として捕まっているのかまでは聞いていないので何とも言えないが、そうだととしても死んでいるようなものだ。

そこで初めて捜査官としての暁さんを見た、かなり優秀らしい。

向こうも顔は覚えていてくれたみたいだが、反応は少し寂しそうに感じた。

無理もない、聞けば亜門上等とはパートナーを組みそこから間もなく亡くなったからだ。

立て続けに知り合いが亡くなることには慣れない、慣れたらそいつの心は人間じゃない。

機械的な人だと感じていたが、やはり彼女も1人の人間であった。

私がそれに関わった人間だとは知らずに話し合っても、あまり上手く上部を取り繕えない自信がある。

また今度父の話をしてくれた言われたが、出来るだけ話したくもない。

10月y日

有馬さんから確保した眼帯のグール、金木研を目的の為に育てると言う話になった。

彼は有馬の仲間、嘉納というドクターの行った人間を半グールにする実験で残った数少ない成功例だそうだ。

そして、それを今後は素材として梟が使われて行われていく。

正直に言えば、この事には関わりたくない。私の心情的に気分が悪いというのも大きい、それで変わる未来がそこまで見えて来ない。

人間だった存在をグールにすれば確かに両者の理解者が爆誕する、だが私という両者の立場を多少齧るものからすれば、グールが人を食

べる時点で分かり合えない。

だから理解者がいても、そこが変わらないと変わらない。

だがどうやら食料は何かしら解決策があるらしく、そこはまかせる事になった。

なので本題に入ろう、私の事だ。

私に下った命令が0番隊を離れる事だ、0番隊の外から金木をサポートするようにしろと言われた。

サポートというのが具体的には示されなかったが、恐らく捜査官となった時の金木を技術的、もしくは精神的に誘導するのが役割だろう。

また将来的に離反する0番隊から離れておく事も重要という話だ、和修に警戒される未来がありありと見える。

ただ金木は脳を損傷したせい記憶の喪失と欠如があるそうで、新しい名を与えるらしい。

名を佐々木琲世、今後はその名で育てようだ。

自身を殺す存在を育てるといふ気持ちは推し量れないが、協力者として私は佐々木を支援する事になった。

なので新しい部隊に配属される事になる、と言っても来年ぐらいからだと思うが、宇井准特等の率いる新設部隊にである。

伊丙がいるのに心底やばい匂いを感じたが、気を引き締めていこうと思う。

☆

5月、昇進の季節だ。

そしてこの年は近年稀に見る程に豊作、もとい戦果を出した捜査官が多かった。

特にアオギリの樹との抗争が絶えず、何人もの捜査官が殉職した。

そんな狂乱の時代の中、今回の催しでは一際目立つ3人の男女が登壇した。

1人は女性、名を伊丙入。容姿が良いというのも目立たせている要因の一つではあるが問題はその階級である。

僅か18歳にしての、一等捜査官への抜擢。

公式の情報では僅か2年での到達になり、その実力と動きはもう1人の有馬と呼ばれているほどだ。

現0番隊の副隊長、宇井准特等のパートナーを務めている。

また、負けず劣らず有名な捜査官が隣にいる。

もう1人の名は鈴屋什造、同様に一等捜査官へ昇進している。

彼は以前行われたあんでいく討伐戦において、特等達と共に梟と渡り合った男だ。

Sレートの子ヤモリも過去に討伐しており、その時も限界を賑わせた。

そして最後に、現0番隊で有馬のパートナーを務めている成遼太郎も一等捜査官へ昇進している。

この3名は、僅かな時間でこの階級に至った逸材たちだ。

並の捜査官で至るのが27歳辺りと考えれば、如何に頭が抜けているかが分かるだろう。

ただ最近まで成遼太郎そのものについては、梟と交戦し生き延びた時から実力に対して懐疑的な声が多かった。

しかし白単翼賞を取ればそんな事を言う人間は黙る、二等捜査官でSレートを倒す事出来るのは特等クラスに至る者ぐらいだ。

故に、この3人は近い将来にCCGを支える支柱になるのだと考えられるのは当たり前である。

そして、それが事実となるのは遠くない未来であった。

☆

授与式はいつも忙しくなるが、それは知り合いが多い人に限る。

0番隊隊長のパートナーという肩書きは、人を寄せ付けない。

話しかけてきたのは元上司であった黒巖特等ぐらいであり、他には少しだけ話したことのある鈴屋一等ぐらいだ。

私はそこまで顔の広い人間ではないので、そもそも人との関わりが薄いのである。

ただ、そんな中でも1番長い付き合いの捜査官が1人いる。

授与式後、休憩所の自販機前で彼女は作られた笑顔と心底気分の悪そうな目をしながら現れた。

「金魚の糞が、今度は郡先輩に付くんですか？」

おっと、中々に鋭いボディーブローだ。

2つ年下の少女、伊丙一等の言葉の鋭さは昔よりもメンタルの奥の方まで届いてくる。

「伊丙一等、同じ班になるんですから多少はその……」

「私に一回も勝ったことないくせに、上から目線ですか？」

「いや、そういうわけでは……」

伊丙一等とは宇井准特等主導で新設される部隊に配属される仲間なのだが、最近彼女の当たりがえぐいほど強い。

理由は分かっている、有馬さんから私が気に入られてるのが気に食わないのだ。

ただ何故、彼女や宇井准特等は有馬の計画の役者になれないのか。

一度理由を聞いたが、実に簡単な理由だった。

有馬貴将が死ぬ前提の作戦を、この2人は絶対に許容しない。

有馬さん曰く、伊丙は自分に気に入られたいから色々としているのは察しているがその方向性が自分とは真逆な故に候補者から外したらしい。

故に、絶対に有馬さんから彼女は気に入られる事は無い。

だから私が忌避されるのも、仕方ない事ではあるのだが普通に精神衛生上気分が悪いので何とかはしたいところなのだ。

「もうハッキリさせましょうか」

ただ、彼女も有馬さんを諦めてくれない。

今彼女にとって最も簡単な有馬へ気に入られると考える方法ぐらい、私でも想像がつく。

「今年、どっちが多く討伐できるか」

「……は？」

しかし、やり方がストレート過ぎて思わず啞然とした。

「期日は今日から一年で、ちゃんと分かせてあげますよ」

確か、彼女の今年の戦績はSが2人にAが7人、その他40人ほどのグールを倒している。

対して私はSが3人、Aが4人とその他で10人ほどで彼女の方が

討伐数という点では倍以上の差があった。

ただこのどちらが上かと言われても、これだけでは判断は出来ない。

しかし彼女はすぐにそれに対するルールを決めた。

「あ、ポイント制にしましょう。Sが10点、SSは50点、SSSは200点で、他の雑魚は1点。これで競いましょうよ、最近調子乗ってるでしょ?」

やばい事を言っている、Aレートを雑魚扱いしてるのもヤバいが、彼女はやはり狂っている。

命に点数をつけてゲーム気分にいる、そしてそれが出来てしまう実力がある。

少なくとも分かり合えないタイプの人間だと察してしまう。

そしてこれならば、有馬さんから話をされても多少なりとも意見は食い違う。

話がそもそも通じないから有馬さんも信用を置けなかったのかもしれない。

何で私と付き合いの長い捜査官の倫理観は大体ぶっ壊れているのか。

「負けたら、どうするんです?」

「そうですね、まあ勝った方の言う事を聞くっていうのでいいんじゃないですか」

その目には負ける気などさらさらないという自信が見える。

事実彼女は同年代では最強クラスの存在だ、普通の捜査官は同じ土俵には立てない。

「分かりました、ただ今年は妙な事で突っ込んでこないでください。それと人の限度がある命令でお願いしますよ」

ただあいにくと、私は普通ではない土俵の人間でありグールだ。

有馬さんから仕事に関しての大きな制限を受けていないので、それまでは付き合おう。

どうせ来る命令は有馬さんに関わるなかだ。

CCGをやめるとかかは一応釘を刺したのではないと思うが、ぶっ

ちやけ私から関わってないし、適当に相手してあげれば満足してもらえら
えらだらう。

7話

6月z日

私はS1班所属の捜査官となった。

班長の宇井さんは真面目な人なので、色々頑張っているが多少まだおっちょこちよいなところもある人なのを知ってるので、偶に書類を仕事も手伝うようにしている。

ちなみにS1班とはSレートの案件を基本的に担当する班の総称で、その代表が宇井さんという事になる。

なのでSSレートの対応をするS2班、SSSレートを対応するS3班も存在しS3は有馬さんが担当している。

なので正式名称でいえば、S1班宇井班所属の成遼太郎一等捜査官となる。

宇井さんには多少なりとも世話をしてもらった恩もあるので、程々に頑張りたいと思う。

7月a日

早くも伊丙がSを1人やったらしい。

こつちが裏技（グールでの聞き込み）しないで地道に捜査してるのだが、手柄だけ取っていく。

私はそれで構わないので良いが、露骨過ぎないか。

岡平さんっていそこそこのおっさんを顎で使ってるけどいいのかそれは、呼び捨ててるの見てすごい違和感感じる。

あ、ちなみに私にパートナーはいない。

まあ名目上では宇井さん（+伊丙）と組んでいるらしいが、特に一緒にはいない。

あとグールで思い出したが、有馬さん達には私が赫子が見える事はバレていた。まあ知ってるのはアオギリの樹の仮初のリーダー、隻眼の梟のエトさんと有馬さんだけだが2人からの修行という名の理不尽が最近襲いかかっている。

グールとしての身体能力を抑えた状態でエトさんと戦わされている、正直死にかけた事も数回ありこれからも続くし、もうなるよう

なーれ!と諦めている。

来月も私が生きている保証はどこにもない、早く終わらせて楽に生きていきたいものである。

8月b日

エトさんなんだが、本職は作家さんらしい。

界限では著名な方だそうで、かなり変わった人だ。

私に赫子の使い方を教えてくれたり、血液を調べてくれたりして色々と助けてくれていたのだがいかんせん、頭がおかしい。

ちなみに、悪い意味でだ。

強くなる方法として精神の破壊を意図的に起こす、つまり拷問してパワーアップさせる事が出来るけど試す?と聞いてきた時は流石にヤバいと思った。

ただ、後に

「成り損ねから生まれた本物と本物が混じった子供って、どうなるんだろうね」

という疑念ができたら襲いかかってきた、半分はおふぎげだと思いが半分は生命の危機を感じた。

あの人の前で気絶だけは出来なくなったのだが、そのうち対価を示されそうで恐ろしい。

9月c日

血液を調べて分かった事を忘れそうだし纏めておこう。

1. 私のグールの血の割合は50%であるが、庭出身者とは異なる事

2. 私の存在そのものが奇跡的な偶然である事

3. 親は有馬と伊丙の分家の血筋である事

4. 私の寿命は庭の子達ほど短くならない事

などだ、まだあったかもしれないが調査中でもあるので今後増えるかもしれない。

気まずいのは、伊丙と従兄弟の関係という所だろうか。

あれと同じ血が少しでも流れてると思うと、お互いにどこで道を違えたのか想像できない。

ちなみに私の存在がどのくらいの確率で生まれるか聞いてみた所、そもその実例が全く無いことから推測でしかないと言われたが、人生で乗った飛行機で必ず事故る程と言われたので相当やばい事が分かった。

なので死んだらモルモットにするとエトさんからは宣言された。

……うん、一応エトさんの前では隙を見せないでおこう。

10月d日

伊丙一等がまたSレートを討伐した、今年で3人目だ。

対して私はゼロである。

このまま狩りまくっていて大丈夫だろうか、有馬さんの心象とか悪そうだ。

それとなく有馬さんに聞いてみるとコクリア出身のSSが今徘徊しているとの情報をくれた、カケラも聞いてねえよ。

いややらんよ？絶対にやりませんよ、SSなんて普通にバケモノなんだ。

命あつての物種なので話だけ聞いて、関わらないようにした。

11月e日

普通に捜査してたら「お前が有馬か？」とグルルが襲いかかって来た。

まあまあ多数の手下を連れてである、一応勝てた。

あ、この事はCCGには報告してない。明らかにSSの怪物だったし、それを倒せた私がS2班にぶち込まれてはまだ0番隊で修行中の金木、もとい佐々木の支援ができる立場になれないかもしれない。

ただSSと殺し合いをしたのは初めてだ、鎖蛇をカウントしなければだが。

普通にしんどい戦いをしたのは間違いない。

手下も後で調べたらSが2人いたほどだ、ただ考えて欲しい。

私を日常的にボコしてくるのは最強の2人だ。

有馬さんとエトさんのふぎけた理不尽に比べればマグマとぬるま湯ぐらいの差がある。

でもなんで私を間違えたのか。

有馬さんじゃないし、血はなんか入ってるけど眼鏡かけてないし、背もあんなに高くないし、あんな輩もこれから現れて来るのか……？ たまに雰囲気は似てると言われるが。

12月f日

佐々木三等と初めて邂逅した。

同い年なので気さくに話して貰えたが、あれだ、私コミュニケーション苦手だ。

初対面とか関係なく敬語でしか話せないから距離の詰め方が分からない。

真戸暁一等がメンターとしているそうだが、中々大変そうだ。

ていうか暁さんともまともに話した事ないのではないか、頑張ってる欲しい。

☆

「やる気ありませんよね」

以前、勝負を持ちかけた休憩所の前で、伊丙は成を呼び止めた。

ただ、かなり喧嘩腰にである。

普段の気の抜けた雰囲気彼女からは想像出来ないほどに、成に対しては高圧的になる。

「討伐したSレートの数、いくつです？」

「……ご存知でしょ、まだ0です」

最初からやる気がなかったのは知っている。

そもそも人との関係を求めていることも、少なくとも時間を過ごして来た伊丙には分かる。

そうでなければ局内で、人があまりこないこの自販機とベンチしかない狭っ苦しい休憩所には来ないだろう。

「私が勝ったら、有馬さんと郡さんに近付かないでください。というかもうそうしてください」

「別にそれでも良いんですよ、私から関わった事はありませんから」

まるで向こうから関わってくるという言い草だ、彼女のこめかみに青筋が通る。

最初からそうだった。

成という人間は周りとは距離を取り、何もしない。

最初の一度だけ言い返された時はあったが、それ以来何を言われても否定や拒絶の言葉を使つた事はない。

「中身もあの時と変わらないんですか」

「……変わつてないとしても、私以外に損をする人はいないので」

いや、損はある。

全力の彼を倒したという数字としての実績が、彼女には欲しいのだ。

有馬という人間に認められたいから、だからこそ何でも出来る様に努力を重ねて来たのが伊丙入という人間である。

だから、戦え、そして返り討ちに遭え。

殺させろ、お前の命を、魂を、尊厳を、私の手で。

それが伊丙の願いであり、一方的な怨みだ。

「伊丙一等」

「何ですか？」

唐突に、珍しく、久しぶりに、彼は彼女の顔を見上げた。

いつも目も合わせない彼が、何かを知りたいと思ひ、その真意を汲みたいと、見上げた。

「グールを殺す事で、何か精神的な呵責はありますか？」

「あるわけないじゃないですか」

珍しく何を聞いてくるかと思いきや、陳腐な質問だ。

グールは殺されて然る存在、そしてそれを殺す事に一々気を病ませるのであれば捜査官なんて合つていない。

詩人にでもなつていれればいい、そう当たり前の事を答えたが。

「私は、そういう人間です」

彼は、当たり前じゃなかった。

「勝負の件はもう私の負けで良いですよ……それでは」

それだけ言い残し、足速に去っていく。

その背中に対し、わざと聞こえるほど大きな舌打ちをすると彼女は眩くように呪詛を吐いた。

「なら捜査官なんてしてんじゃねーよ」

8話

4月g日

有馬さん達と協力を結んでから2年経った。
私も気付けば22歳になっており、捜査官になって8年も経っている。

あれから大きな変革というのは起きていない、この期間は有馬さん達曰く準備期間であると言っており、何の準備かは言わずとも分かるだろう。

ちなみに階級は一等捜査官のまま変わっていない。

宇井さんは特等に、鈴屋くんは准特等に、佐々木は一等に、暁さんは上等に、伊丙も上等捜査官に昇進しているので近くにいる私は陰でめちやくちや言われているらしい。

確かに私も過去に実績はある、だがそれも話のつけようはある。

白単翼賞は有馬のお溢れ、昔一時期流行っていた梟と対峙した話も鮮度が落ちてきたので信用は殆どない。

上手くやっている、私は上手くやれている。

有馬さんから手柄を立て過ぎればVに警戒されるとして注意もされてきたが、そこは私の考えとも一致していたのでありがたい。

ただ、給金が少ないのは少しであるが大きな贅沢が出来ないので寂しいのが辛いところではある。

ただこれだけ何もしてないが、宇井さんとのパートナーもといトリオは名目上では続いている。しかし今は色々やり過ぎているキジマ准特等のお目付役として宇井さんとは行動していない。

宇井さんにあのイカレ野郎を見とけ、と頼まれたがコクリアの拷問官らしいのでかなり面倒な役である。

倫理観ぶつ壊れてる、付き合わされる人みんなそう、まともだったの宇井さんと亜門さんしかない。

そろそろ世界は私に優しくしてくれても良い気がする。

5月h日

佐々木一等がクインクスというチームを率いる事になった。

クインケを内蔵した捜査官、つまりグールの力を持った人間だ。それも4人、私は未だにメンターにすらなつた事はないので分からないが、大変そうである。

一度だけメンバーに会つたが個性派揃いだ、有馬を超えるをテーマに作られているらしいが人の力では超えられないのを皆分かつているのかもしれない。

最盛期をとうの昔に超えているとはいえ誰も超えられない、かく言う私も人間だけだつたら確実に超えられない存在、それが有馬貴将なのだ。

6月j日

Sレートのおロチというのが最近、アオギリ狩りをしているらしいので注意したい。

7月k日

キジマ准特等が個人的に所有している倉庫が何箇所もある事がわかつた、捜査中に捕まえた個体の管理をどうしてるのかと考えて尾行をしたらエグい拷問をしていたのを見たのだ。

と言っても彼がいない時である、私はグールほど耳は良くないが鼻は良いので直ぐに場所は見つかつた。

思いつきり捜査官として違反だろう。

必要以上の尊厳の破壊と痛み、13条の2項に反している。

しかしこの場所を見つけてもシラを切られるかもしれない、出来れば現行犯で何とかしたい。

ただ他にも場所はありそうなので、調査は必要だろう。

8月l日

佐々木一等はあいもかわらずクインクス関連で大変そうだ。

一方私は忙しくない。

キジマ准特等の倉庫を洗っている作業も終わったし、後は現行犯でやるだけだ。

大きな仕事がこのところない、隻眼の王関連でもない。

ただ先日グールでまた情報を集めていると「貴様が隻眼の王か？」と変な黒服集団に襲われた、何度も「そんな存在知らない」と答えて

も襲ってきた。

一応撃退して逃げた。殺しはしなかったがそこそこの手練れであり、何か見覚えのある人が居た気もするが確証はない。

そのせいかわからないがSSレートに認定された、より慎重になるうと思う。

9月m日

この前襲われた黒服集団、あれがVだった。

和修の手駒であり掃除屋であり矛、有馬さん達も指揮られている。

隻眼の王の存在を探している様で、エトさん曰くイレギュラーな存在に彼らは怯えているのだとか。

後そろそろ、佐々木に大きめの試練を与えようと言っていた。

手始めにオウルを送るらしいが、私も名前しか知らないので気を付けろ+倒すなとしか言われていない。

最近の佐々木一等はSレートのオロチを相手している、頃合いだろう。クインクス班も優秀な人材がいる様で、そろそろ佐々木本人も落ち着いてくる時期だ。

ただ彼は良い人すぎる、私としてはそう差し向ける側なので心はやはり痛む。

10月n日

キジマ准特等が中々尻尾を出さない、もとい拷問しないので監視が疲れてきた時期だが、捜査に本格的に戻されるのも色々面倒なので気楽にやれている。

伊丙がゴミを見る目で見て来るが気にしない、富良上等は良い人なので逆に申し訳なくなるが、このままのんびりやらせてもらおうと思う。

11月11日

クインケ鋼の輸送護衛任務を行ない、アオギリと戦った。

同時期にエトさんは佐々木一等へオウルをぶつけたらしい、グールのオークション会場の制圧日だったので都合よくやったのだろう。

かなりの戦果をあげた作戦らしいが、小金集めでオークションの護衛をしたり、金になるクインケ鋼を狙ったりと、アオギリはかなり

弱っているようだ。

運営状況は分からないが、彼女自身にもそう時間は残されていないのかもしれない。

12月24日

佐々木にシャトー、クインクス班のシェアハウスにクリスマスパーティーをやるから来ないか、と招待された。

なので顔だけは出した、佐々木一等は良い人だし断り辛かったので一応出席だけはしたのだ。

ただ有馬さんまで来るとは聞いてない、あの人暇ないだろ……：適当なタイミングで帰った。

クインクス班とは仲が良いわけでもなく居心地が良くなかったのもあるが、彼等の親交を結ぶ気も予定もないので特に問題はないだろう。

1月0日

また少くないお年玉を手に孤児院に来た。

私の懐は昔よりも寒いのだが、孤児の中にはグールの被害者もいる。

何というか、やりきれない気持ちがある。

私のように捜査官に放逐されるような者に、なって欲しくないのだから。

理不尽が嫌いだ、命は大切に、亡くなった命が大切でも、それで命を奪う復讐という形は嫌いだ。

人が憎いという理由で殺される事も、この業界ではある。

亡くなったのは認めていくしかない、ただ亡くなる前の救える命は守りたい。

復讐は新たな復讐を生む、だから有馬さんのやり方にも付き合えている。

人とグールの分かり合える世界が欲しいわけじゃない、復讐の因果が生まれない世界が欲しいのだ。

少なくとも命っていう所で1番大きな復讐を生む今の世界を、私は嫌っている。

孤児院という来年も経営が続くか分からず、子供同士で仲良くしながらも、いつ来るかも分からない親を信じて待つ世界、人生が自分の意思で決められない世界はやはり、嫌いだ。

2月p日

有馬さんから具体的な作戦概要の説明が始まる。

今まで有馬さんやエトさん自体に時間が取れなかったのもあるが、私自身がこの世界の情勢を知らなかったのも大きい。

なので私なりに情報屋から仕入れたりしたのだが、Vについても良くわかっていない。

細かいこれからの道筋を把握してない、そしてアオギリの樹が何をしているのかも分からない。

なので分からなくても大丈夫な必要最低限の知識から入れ始め、やつと始まった。

☆

いつもの集合地、寂れた神社の境内に有馬と成は集まっている。時間が中々取れない有馬から近日中に実行する予定の確認を行う為だ。

今の成には最低限の知識と覚悟を持ち合わせている、故に有馬は話を終えた所なのだが。

「……冗談じゃ、なさそうですね」

成の表情は、優れない。

いや、かなり悪い。

それもそのはずだ、直近で行われる予定は凄まじく残酷だからだ。

「伊丙を殺すって、なんで」

伊丙入、庭出身の上等捜査官の殺害ないし見殺しによる生命の強奪。

それが、これから行われる予定なのだと有馬の口から語られたのだ。

「20歳で上等だ、十分に人側の希望になるのもあるが……相応の存在となった彼女が喰種を認めた社会を望まない事になるのは、成もよく分かるだろう」

分かっている、捜査官としては誰よりも長い付き合いである、成はよくわかっている。

ノイズになる、円滑にこの作戦を進めるのに必ずどこかで障害になる。

それが伊丙という人間なのだ、しかしそれでも成は苦言を呈する。

「なら鈴屋准特等は？あれこそ人側の希望になりえますよ」

鈴屋は既に准特等だ、未来の有馬と言われているのは彼の方である。

最近では有馬の次に戦果を出している捜査官だ、むしろ戦績だけで見れば鈴屋の方が一枚は上なのだ、伊丙だけを選ぶ理由にはなり得ないのだが。

「鈴屋は庭の人間じゃない」

それを聞いて、すぐに成は何かを言い出そうとしては口を閉じる。分かっているのだ、両者の大きな違いを、決定的な違いを。

「V側の存在がなる事が問題だ、だからそうさせるわけにはいかない」
有馬貴将は人類の絶大的な英雄だ、故にそれを手元に置くVは絶大的な存在でもある。

CCGにおける発言力や実行力は言わずもがなであるが、手元に最強の駒があるというのは都合が良すぎるのだ。

点で確実な制圧が行える、それが敵の急所ならば致命傷となる。

「嫌でも、この仕事をしていけば命の重さを考えさせられます。そして彼女は若く、努力を惜しまず……寿命が、短いです」

仮に有馬を倒せるだけの実力を得た金木研と伊丙＋鈴屋が戦った場合、これだけならば金木は勝てるが『アラタ』を使えば話は変わってくる。

篠原や黒岩特等が使っていた纏うタイプのクインケ、耐久性と敏捷性、攻撃力を著しく底上げする人の枠組みを超える道具、2人が使えば確実に金木は敗北する。

しかし、今伊丙を消せば金木研が高確率で勝てるだろう。

アラタの性能と鈴屋の実力を目の前で見た事がある成は、それが分かっている。

だから片方は殺した方が円滑に進む、そして殺すならどつちかと問われれば答えは揺るがない。

「やり方は気に食いませんが、貴方に認められたくて戦っていました……それでもですか？」

「それでも、だ」

搾り出した言葉も、即答される。

「……分かりました」

もう決定事項なのだ。

ここまで嫌がるのは、まだ生きている命だからだろう。

消えた命に無頓着な姿勢を取る成にとって、これからこちらの都合で消すというのは理不尽でしかない。

ただ、納得を示した後には、言葉が続ける。

「じゃあ、私が殺します」

何か覚悟を決めたのだろう。

こんな陰謀の渦中にいれば遅かれ早かれ、誰かの命を奪い、背負う事になる。

伊丙入との付き合いは長い、彼女をよく知るのもあるが今の立場的にも確実に殺すなら彼のポジションには適正がある。

だから、せめて、介錯は自分が行うと決めたのである。

「任せるが、出来ない時はエトに任せる」

「分かりました」

有馬はそう言い、今日の定例会は終わった。

この数ヶ月後、成は伊丙の命を奪うこととなる。

9話

4月p日

佐々木一等が上等に、暁さんが准特等になった。

真戸准特等……と2人である時は階級で呼ばれたくないそう。

一時期は酷かった精神状態も、亜門さんから立ち直り、より彼女は逞しくなっている。

さすがは若くして准特等に至った人だ。

しかし最近フエグチを佐々木が抱えている事に神経が尖ってしまっている。

フエグチは父親の仇の1人である、殺したい程憎いだろう。

少しだけ不安だ、同様に佐々木もだが。

オウルと同等の戦いをした彼の实力はSS以上、最盛期に近づいて来ている。

また次の駒をエトさんがぶつけるだろう。

それと特等が2人増えた。

1人は鈴屋くん、佐々木の次に話しかけられている気がする。

有馬さんと同じく22歳での特等への抜擢、最年少である。

そして出席しなきゃいけないこの授与式なのだが、やはり私の居心地は悪い。

私自身の討伐したグールの数は記録上、A以下が7人。

年々減っている、減らす意識はしていないがSと戦わない姿勢を貫いている影響だろう。

ただ昨年から始まっているキジマ准特等の監視の仕事が面倒というのもあったが、宇井さんは特に何も言っていない。

個人的にそれでありがたいので、私からも何も言わない。

伊丙のふっかけかけた賭けには負けているので宇井さんと有馬さん、ついでに伊丙上等にも仕事以外で関わりは持たないようにしている。

待たなくても変わらないからだ、だからそれでいい。

4月q日

S1班の新たな任務対象が現れた、コードネームは『ロゼ』といい

和修政特等曰くドイツにいた残党らしい。

その任務に宇井班、キジマ班、佐々木班、下口班の計四班での合同任務とあいなった。

佐々木上等と仕事を共にするのは0番隊にいた時以来だろうか、クインクスとは初めてである。

あと下口上等とも初めてか、最近部下を亡くしたそうだが新しい人が入っていた。

伊丙はクインクスの人達と仲良くなっていたが、普段の彼女は本当にポワポワとした乙女だ、その雰囲気と話されたら誰でも多少は気を許す。

恐ろしいほど戦闘時に人が変わるだけで、私の前でもそつちよりだ、普通にポワポワしていた方が精神的に疲れないのだが、それもあと少しの付き合いだ。

大きな任務に乗じて殺す、それが今の私の任務だ。

今回の件で、殺す事になるだろう。

だから私は、自分の嫌いな悪者になるしかないのだ。

4月r日

キジマ准特等と伊丙上等達でロゼの一派、その1人を捕縛した。

所有件はキジマ准特等にあつたので予め控えていた倉庫をしらみつぶしに探していくと、やはりその一箇所にあった。

男のグループは酷い拷問を受けており衰弱していた、舌も取られており、さすがに問題行動が過ぎていた。

彼を無理矢理説き伏せてグループは私が連行した。

宇井特等にももちろん報告、グループの所有件は一時的に私のものとなった。

キジマ准特等には査問委員会へ問われるだろう、よくやったと珍しく宇井さんは褒めてくれた。

ただ伊丙の前ではやめて欲しい、目がやばい。

4月s日

キジマ准特等、またやらかした。

あのグループを拷問した時の動画を公式でアップロードした、自分を

餌にしてグルルを誘い出すために。

そんなものを準備していたとは思いませんでしたので、詰めของ甘さについて宇井さんには謝罪した。

宇井さんはかなりキレてるのがよくわかった、といつてもキジマさんに対してだが。

また彼は査問委員会に呼び出されてる、これのパートナーの旧多一等も大変そうである。

それとロゼのグルルはコクリアに送り、私が引き継いで情報を探っている。ただ舌がないので筆談だ、それに向こうも応じようとしないので遅々として進まない。

私とてただで生かしてゐるのではないのだ、しかし彼の組織への忠誠心は本物である。

なのでキジマさんの動画を見せた、かなり困惑しながらも自身の恋人が先走るかもしれないとだけ書いた。

また倉庫の見張り仕事である、地味な仕事である。

4月7日

佐々木達がアオギリのグルルに襲われたらしい。

アオギリとロゼが関わりを持っていれば規模は大きくなる、人は倍以上必要となるだろう。

5月11日

網にかかったグルルを見つけたのは、首を飛ばす寸前だった。

ドアは前よりも嚴重に施錠されていたがぶっ壊して入った。

元から情報が無ければ絶対に間に合わなかった自信がある、彼女は口が軽かったようですぐに音を上げたそうだ。

ただロゼは月山財閥のグルルという事が判明した、100年以上続く巨大企業である。

その功績はどうでもいいので全てキジマさんのものだが、グルルはまた私の所有件に移行させた。

キジマさんからは滅茶苦茶な嫌味を言われたが、私は宇井特等の名代だ、虎の威を狩る狐と言われようが何も気にしない。

「貴方はグルルも人で数えるんですねえ、グルルは嘸かし嬉しいで

しょう」

とも言われたのは、何故か何となく頭には残っている。

人もグループも同じ一つの命として扱っているのが間違いだとは思わない、ただ理解者が少ないことを理解している。

だからこの私のあり方は、私だけが理解していればいいのだ。

5月v日

女の方、名前はアリザというグループから話は少しずつであるが聞き出せている。

男の方、ユウマの書いた手紙を読み上げる事で上手く聞き出せている。

渡した方が楽なのだが、検閲の問題もありかなり先になる事だけは留意してもらっている。

生きていると実感するたびに涙しながらも話す彼女を見るに、相当拷問は酷かったのだろう。

やはりこういうやり方は私個人としては気に食わないが、必要な時は必要な役回りという事も理解しているつもりだ。

だが私の聴取もそろそろ一息つく頃合いだろう。

佐々木上等のグループのマスクを使った捜査活動がそろそろ身を結ぶ、そろそろ月山家を落とす時だ。

☆

「……久方ぶりだな、成」

式典も終わり、真戸暁は狭っ苦しい休憩所にやって来た。

式典は人が多い、少し休みたかったと言うのもあるが、目的はいつもそこで暇を潰している青年だ。

「真戸准特等、昇進おめでとうございます」

「2人でいる時ぐらいは、昔のように呼んでくれ」

最初の出会いは父の忘れ物を曲に届けたときだ、その時に若い捜査官というので印象が残っている。

亡き亜門上等同様、父の口からよく出てきた捜査官の名前としても頭に残っている。

しかし、彼の階級は一等だ。すぐに追い付き、追い抜き、突き放し

た。

「……暁さん、顔色が優れませんが」

「何、母と同じ階級に上がり緊張しているのだよ」

今ある彼の形を、どう解釈すればいいのか未だに暁には分からない。
い。

戦っている瞬間を見た事がない彼女には、判断ができない。

「また、2人の話をしてもらえるか」

だからこの曖昧で中途半端な形での繋がりが今でもある。

2人の事を知る人間というのは少ない、まして2人ともをよく知る
捜査官なぞ片手で収まるだろう。

父がよく囮にしてきた話も、無茶振りの話も、捜査官としての手解
きを受けた話も聞いた。

亜門の熱意的な己の正義や父への信頼、その話もよく聞いた。

次は何を話してくれるのかと、話を待っていると。

「……もう、辞めておきませんか」

言い淀みながら、それを拒んだ。

「なぜだ？」

「話を聞くと辛そうなので」

暁は驚いた、と言っても拒まれた事にはではない。

普段、話はしても意見を出さない成が初めて自分から意思を伝え
た、それが拒否という形であつてもだ。

ここ数年の付き合いで多少なりとも、成遼太郎という捜査官につい
て暁は知ってきたつもりであるが、それは情報的な面が多い。

遺書は書かない、人に媚びない、梟から生き残れる程度に戦え、父
直伝の捜査能力を持ち、他者の死を悼む事はあれど、引きずる事はな
い。

「過去を見つめるのは必要な事です、ただ執着するのは良くないかと」
「そう見えるのか？」

「……どうなんでしょう。ただ何かしら区切りをつけたいんじゃない
ですか、フエグチの廃棄で」

そして、たまに鋭い言葉を吐いてくる。

「君は、父を失った後でも変わらなかつたな」

父亡き後にも、彼の人間としての姿勢は変わらなかつたそうだ。

真ん中に芯がある、それも誰に何を言われても、何が起きてもブレない、自分だけの芯がある。

「今ある命の事しか、私は考えられないので」

「切り替えが上手いな。捜査官向きだよ」

「切り替えが苦手だから、自分でそう決めてるだけですよ」

そう決めつけて、生きれるほど人間というのはシンプルじゃない。

成遼太郎は、やはり心技体のどれもが残念な程に捜査官に向いているのだ。

だからこそ、暁という捜査官は彼の未来を、行く末を、案じているのである。

芳村エト

「君はあれだね、自分がおかしい事に気付いてないね」

「おかしい側筆頭に言われたくないのですが」

芳村エト、彼女は目の前にいる青年に対して頭の中にあるデータを元に話をする。

今は成とエトの鍛錬、もとい殴り合いの時間だ。

クインケも赫子も使わない戦闘であるが、異次元の動きをするエトに喰らい付く成も、十分に人を辞めている。

そんな中ではあるが、殴り合い以外にも成についてやグールという存在についてなどの雑談の時間も多い。

かれこれ2年もの付き合いだ、同志として話せる人間というのは貴重であり、エトはこの会話そのもの楽しんでる節がある。

成もまた断る理由もなく、むしろ有益な話を聞ける事が多いので面倒ながらも付き合っている。

「君のRc値、普段は人並みにまで落としているようだが……」

「調整できるように練習しましたからね」

「この数値は私と同等か、それ以上だよ」

成の頭の上にハテナが浮かぶ、それだからどうしたという様子だ。

別にRc値の制御はエトでもできる、人並みにまで落とす事も可能ではある。

ただ、目の前にいる青年はグールとしての自分を知ってから独学でそれを会得している。

「……しかも君、まだ上げられるだろう?」

「制御を考えなければ、ですけどね」

グールの赫子には2つの要素がある、赫子の大きさは才能であるが赫子の形は知識によるところが大きい。

そして、目の前の才能の塊はどちらもあり、それを感覚で捉えている。

「君、捜査官としては有馬ほどじゃないけど喰種としては天才だよ。私が保証してあげる、一緒に世界壊そうぜ?」

「壊すんでしょ、後さりげなくその貧相な体を擦り付けないでください」

何故か最近スキンシップが多くなっている事に冷や汗を垂らしている成を見てケラケラと笑うエト、実を言えばこの協定を組んでからは有馬よりも時間の割合はかなり大きい。

故にプライベートな話し合いをするまで、二人の仲というのは悪くない。

「君は枯れてるわけじゃないだろ？好きな女の子ぐらいいるんだろ？ほれほれ、おねーさんに何でも言ってみなっ」

「おねーさん、痴女がいる」

「はは、ぶっ殺すよ？」

成からすれば、実は1番人としての関わりを持っているのが彼女だ。

付き合いの長さで言えば該当者は多数いるが、ここまで気の抜けた話し合いをする人というのがそもそも居ない。

エトは「まあ後でそうするとして、話を戻そうか」と呟く。普通に無視したい内容だが耳元で囁かれれば嫌でも聞こえてしまう。

そしてまた、いやらしく成の心の中まで踏み込んでくる。

「もしかして、これから殺す子とか？」

エトというグールはお人好しでもなければ聖人でもない。

反応を見て楽しむだけの友人ですらない関係だ、彼のよく会う倫理観のぶっ壊れた存在筆頭であり、時間の長さでエトの興味だけで成り立っている関係だ。

だから、どんな反応をするのかとエトは顔を伺う。

「……あれは違いますよ、従兄弟ですし出来の怖い妹みたいなもんです」

「じゃあ居ないの？」

「少なくとも、こんな事してる間に結婚とか考えられると思いますか？」

伊丙入に対して、成は恋愛感情を抱いた事はない。

確かに容姿は良い、普段の性格も友達として築くなら悪くない。

ただ彼女はそういう事を考えられる程の話にならない中身を持つ。まあそもそも、成に女性の知り合いそのものが少ないのだ。告白された事は中学時代にありはしたが、それつきりだ。

よく言われる事であるが、捜査官は2つのタイプに分かれる。

早々に身を固める者か、独身を貫く者か。

前者は真戸や黒岩が当てはまる。

「私は、出来るだけ他者の命を背負いたくないんですよ」

そして彼は後者側の人間である。

命の重さを知るからこそ、その責任を持ちたくない。

持たざるを得ない時を持つが、そこまでの業を背負いたくないのだ。

「君あれだね、殺した相手のこと覚えてるでしょ？」

「……まあ、知性があったグールはだいたい」

「なるほどねー、殺した相手の命を背負ってるつもりなんだ。優しいじゃない、色々損しそう」

恐らくであるが、これから死ぬ予定の有馬の命も彼は背負うのだろう。

そしてこれからこの事に巻き込まれて死ぬ人間、グール、その他諸々の命を背負うつもりで戦う。

「こういう人間なんですよ、私は」

世の不条理は当人の力不足、しかし力を付けることが彼の答えではない。

不条理そのものがなくなる事を、彼は望んでいるのだ。

だからこそ、巻き込まれた形とはいえ有馬達についていつている。

「うん、お人好しだ。でも逆に気になるけど、どういう時は殺してたの？」

「殺さざるを得ない時か、殺して楽にさせる時ですね」

グールを見逃した事はない、少なくとも相對したグールは全て捜査官として狩ってきた。

襲いかかってきたグールも、全て狩り取った。

ただ、自分が生きる為に手を抜いたことがあるだけだ。

その結果逃げられたり、そもそも戦わなかったりしたただけなのである。

「君、捜査官向いてないね。いつか壊れちゃうよ?」

「いつも壊そうとしてくる人が何言ってるんですか」

それもそうか、と笑うエトに溜息を吐く。

「やっぱり、私ってメンタル弱そうに見えますか?」

「いや、むしろ強いんじゃないか。自分の精神を落ち着かせるのに、他者を見限っている事に何も感じてないだろ」

強いからこそ、脆い。

何かの拍子で内側から崩れていく、それがエトには分かる。

「整理をつけてるんですよ、こう見えて繊細なんです」

確かにね、そうエトは答えた。

そしてもう何度目か分からないが、核心をつく言葉を放つ。

「件の上等、君はある条件がなければさっさと殺してるんじゃないか?」

「何ですか、それ」

「例えば……その子に恋慕の情を抱く者が、君の世話になった上司だとか」

少し、目を見開いた。

エトの口から、そこまで読み取られているというのに畏怖した。

「それだけじゃないですけど……何でも知ってるんですね」

それだけ呟き、その事については口を閉じた。

エトもここをほじくっても反応しないのでは面白くないと思いつく話を変える。

「君人間の食事で生きて良かったね、じやなきや自分の生きる為に誰でも殺すバケモノになつてたよ」

「それなら、有馬さんに殺されますから」

自分の人生を認めているように、成は答える。

人を食べなければ生きていけないルールならば、彼はそれを正当な理由として食べていただろう。

だから、それで殺される事を不条理とは考えていない。

「あ、それと例の物が出来そうだよ」

「……あれですか」

ふと思いついたようにエトは呟く、成もまた分かっているようだがその顔はどうでも良さそうにしている。

「うん、一応は約束の物だしね？作るの大変だったんだから貰つてよ」

「もう不要なんですけどね」

エトは弄るように体を押しつけ、彼の体を確かめる。

身長にして172cm、体重67kg、有馬の雰囲気を持ちながらそれとは完全に異なる青年の力を感じている。

「そろそろセクハラで訴えますよ」

「おや、誰にだい？」

「有馬さんに」

「手厳しいな、長い付き合いだろう？」

「会ってから8年したら考えてあげますよ」

ただ、そろそろ問答に疲れてきたのか。

体を離すと、柔軟を始める。

成も拒絶こそしなかったがやっと離れたかとほっと一息つく。

しかし、そう彼女は優しくない。

「そう言えば、君とは組み手とかしかやった事なかったね」

そう呟くと、背中から赫子を展開する。

「そろそろ、一回殺し合おうか」

いつもの冗談かと思いつながら、エトの方を振り向く成。

しかし目がマジであったので流石に危機感を覚えており、宥めるように後退りする。

「……あの、私貴方と違って手足の再生はできないと思うんですけど」

「大丈夫、そしたら最期まで養ってあげる」

瞬間、成へ赫子が向けられる。

「瓶潰けにして、ね？」

命懸けの戦闘訓練は、数時間にも及んだ。

幸いな事に手足の欠損は無かったが、成はこれ以降彼女と会う際は

必ずクインケを常備するようになったのであった。

10話

月山家の一人息子、月山習の使用人、もとい護衛には優秀な者が就いている。

月山の騎士として名高い、松前もその1人だ。

盾と剣に分けた甲赫は才能こそ並であれど、高い技術で扱えており、月山家でも随一の使い手として知られている。

「お久しぶりですね」

その松前の前には、1人の少女がいる。

「お久しぶり、というかさよなら」

名を伊丙入、庭出身の上等捜査官だ。

彼女と松前が会うのは二度目であり、一度目は圧倒的な技量と動きの読めなさで撤退を余儀なくされた。

しかし、今回は許されない。

ビルの屋上では、ヘリを待つ皆の命を託されて御曹司がいる。

最低でも時間稼ぎ、それが松前達に与えられた使命である。

相対する捜査官の数は8人、明確な戦闘意思を持っているのは4人、そして要注意人物は2人だ。

伊丙は言わずもがなであるが、もう1人のつぎはぎの捜査官も松前達の記憶に強く残っている。

自分達の仲間を拷問し、動画で挑発したキジマ式だ。

手にはチェーンソー型のクインケ、ロツテンフォロウがありその血の後からもどれだけの同胞をビルに上がるまでに排除してきたかわかる。

どちらも通すわけにはいかない。

「来ますよ」

松前は、伊丙に挑んだ。

彼女の持つクインケ(Aus)はS+レートの甲赫を使用した太刀型のもので、破壊力がある。

分離が可能である松前の壁は簡単に排除される。

「今日はやる気なんですな」

「無論」

一方、残りの戦える3人の捜査官の方であるが既に2人死亡している。残りのキジマは雑魚の処理をしながら使用人の1人、マイロと相対しており、やや優勢だ。

しかし、伊丙の方は盾に苦戦して攻めきれず押され始める。

その様子には伊丙のパートナーとクインケ持ち、そしてキジマも驚いている。

「良いですね、その盾」

だが伊丙には余裕がまだある。

その赫子から作られたクインケは素晴らしい物になるだろうと、今最も欲しいIXAに近いものが手に入る、と少しだけ笑みを浮かべる。

「あつ、血」

しかし、足元にあった血で大きく体制を崩した。

それは、松前という実力者の前では大きすぎる隙だ、そのまま彼女赫子が伊丙の腹を貫くのも、必然であった。

☆

「……あな、ぽい」

赫子は伊丙の体を貫通した、彼女に死を連想させるほどの手傷を合わせた。

たった一度のチャンスを物にしたのだ、彼女の視界が少しぼやけ始める。

致命傷だ、もう戦える身体ではない。

ただ、彼女は消え入りそうな声で呟いた。

「岡平ア……クインケエ……」

「は……何を」

「よこせつつつてんだよーはよせいっ!!」

瞬間、マグマのように彼女の怒声が吹き出した。

岡平もまさかこの状態から戦うとは思わず反応は遅れたが、そのまま手に持っていたクインケを投げ渡す。

羽赫のクインケ、名を『Thuman』稲妻のような弾を出すレ

イピア型のクインケだ。

レートはS+のもので、その力は絶大過ぎる。

「散れや」

床を抉りながら猛進する雷撃、それを松前は盾で受けるが。

「(これは、持たない……)」

その捨て身とも言える攻撃に耐えることしかできない。

規格外の攻撃に耐えられるほど、彼女の盾は硬くない。

直に破られる、その時隣を誰かが飛び越えた。

「マイロっ!!」

「習様を頼むっ!!」

マイロだ、しかしマイロにはこの攻撃を耐えられるような盾はない。
い。

それが命懸けの特攻であるのはすぐに理解する、勢を殺さずに直線でマイロは伊丙へと向かっている。

「じゃ、まっ」

目の前の脅威へと、目標を変える伊丙。

そして防ぐ力も気もないマイロの身体は泣き別れたなる。

いくら再生力のあるグールと言えど、こうなれば確実に殺せる。

「胴・体・無・要!!」

だが、跳躍した勢いまでは殺せない。

「伊丙上等っ……!!」

伊丙の前に、殺意を持った上半身がやってくる。

対応しようにも意識すら曖昧な彼女は咄嗟に動けない。

「(あ、死……)」

ふと、自身の頭に情景が浮かぶ。

若かりし頃、まだ黒髪であった頃の有馬の姿だ。

死神にあった、そしたらとても綺麗だった。

その記憶が彼女の心の柱だった。

そんな走馬灯が、一瞬で過ぎ去って行った。

☆

誰もが思った、伊丙上等捜査官は死ぬと。

首が飛ばされて死ぬ、そうなる結果が誰の目に見えていた。

「とど、かず」

故に、誰も予期できなかった。

敵をぶった斬った直後に、伊丙の元へと走り込んでいた成一等捜査官の事を。

「岡平一等、止血だ」

「は、はい」

ギリギリで間に合い、伊丙の体を引っ張り捨て身の一撃を避けさせたのだ。

同時に飛び込んできたグルルを壁際まで蹴り飛ばしている。

しかし咄嗟の影響か、伊丙の片腕が肩下から飛ばされてしまった。

ただでさえ多かつた流血、岡平は言われるがままに止血をおこなっていくが助かる見込みは低い。

「彼女を医療班の所まで連れて戦線を離脱、死なせるな」

そしてグルルとの間に、彼は立った。

自身のクインケを展開しながら。

まだ生きていた上半身のグルルへは地面を這わせた触手で貫き絶命させている。

「何言ってるんだ……」

だが、彼の指示を一番認めないのは彼女自身だ。

「雑魚成、利き腕ないくらいで戦えねえとか思ってるのか」

「戦えないでしょ、腹に穴が空いてなくても今の上等では勝てません」

片腕が無い伊丙では、勝てない。

彼女が仮に腹の穴がなかったとしても、その実力は特等レベルから2段階は下がる。

腕とは、手数と重さに直結する部位だ。

手先の動きは技術であり、模造品を付けても元に戻ることは無い。故に、成の分析は正しい。

しかし、そんな正論が言われても納得いかない。

言う言葉ではなく、言う人間が気に食わないのだ。

「私に指図すんな、さっさとクインケ寄越っ!!」

無理矢理立ち上がった伊丙の言葉を言い切る前に、それを上書きするように破裂音が鳴った。

「聞き分ける、死にたきや後で死ぬ」

伊丙の頬を叩いたのである、力加減をしてるようには見えない。顔には赤い紅葉が浮かんでおり、ジンジンと腫れ上がってきている。

だが伊丙は痛みに喚くわけでもなく、啞然としている。

まさかいつも他者への距離を取る成が、そこまでしてくるとは思いもしなかったのだろう。

いつももある上っ面の敬語も消え、軽蔑するように見下ろしている。

ごちゃ混ぜの頭の中には屈辱的な意識もまじっている、しかし言い返せるほどの余裕は本当にない。

それほど重い傷なのだ、生きている事どころか意識がある時点で怪物である。

へたり込み、岡平は彼女をそのまま背負い後方へ一気に下がる。

「キジマ准特等、あの2人だけで護衛は難しいです。彼女を連れて下がってください。ここの維持は私が」

だがグールのまだ残るこのビルで2人だけで下がらせるのは流石に危険だ、キジマへ成はそのまま下がるように促すがキジマは首を縦には振らない。

「お断りですよ、成一等。なぜ下がらねば？」

「私の言葉は宇井特等の言葉と同義であると取ってください」

キジマはそれを聞いていつもはすぐに引き下がるが、今回は言い分に顔を顰める。

越権行為だ。

キジマに対して命令が出来ていたのは監視役での事であり、現場での指揮は認められていない。

そしてそれはキジマですら分かっていることだ、ここでその言い分が使えるとは本人も思っていないはずだ。

だが、続けてこうも言った。

「まして必要以上の骸の上に出来た結果を、特等は望みません」

勝手な言い分だ、自己本位である。

ただここまで意識を発露させた瞬間をキジマは見たことがない。それも、怒りとも焦りとも感じるような反応を。

「いくよ旧多くん、後でこの事は報告すれば良い」

何か特別な理由があつたわけではない。

ただ、こうなつた後を知りたいと感じたキジマは下がる事を決める。

結果として伊丙入は命を繋ぎ止め、被害も最小限に抑えられただろう。

ただ、これが成遼太郎の人生における分岐点となつたのは知る由もないだろう。

☆

5月w日

月山家の討伐が決行された。

当主と使用人は投降し、楽に終わったかと思いきや息子を逃していたのでその追撃戦が開始した。

ビルの先行部隊として伊丙上等、キジマ准特等達と潜入し、屋上前まで入り込んだ。

そこで剣と盾を使うグループに伊丙が血で足を滑らせ腹を貫かれた、ただそこからブチギレた彼女はT h u m a n、有馬さんのナルカミのようなクインケで手練れの1人を撃破した。

が、決死の突撃を行いその凶刃は彼女の首に迫つた。

今の伊丙なら確実に死ぬ、態々私が手を汚さずとも消える。

故に見殺しにしようとしたが、頭の中に宇井さんの顔が思い浮かんでしまった。

なので、利き腕を失うように助けた。

喚き散らしてきたが黙らせて、キジマさんと共に撤退させた。

その後、1人残つた私だが進行地点の維持だけだったので、その旨をグループ側に伝えると何人かは残りはしたが、引かせる事に成功した。

まあ残つて襲つてきたのは人の目もないので対処したが。

上ではエトさんが乱入したようで轟音が鳴っていた、しかし佐々木もとい金木となった彼が撃退したらしい。

結果として、梟の撃退に成功はしたが、月山家の子と当主は逃げた。私も結果として殺せず、エトさんにも任せられずに終わった。

ただ捜査官としての彼女をその日殺したのは、私であった。

5月z日

伊丙を殺さなかったが、使えない駒にした事を有馬さんへ報告した。

甘さが出た事に関しては謝罪をしたが、今の伊丙は使い物にならない事を判断されたのでこのまま彼女は生かす運びとなった。

いや、正確には殺す必要がなくなったという所か。

あと関係ないがエトさんから今の金木が相当強いと聞いた、捜査官の時の私と同等以上の事だ。

6月x日

私に処分が下された。

勝手な指揮が問題となつたらしい。

それと今回の作戦で目的としていた月山家のグール殲滅は失敗したので、そのスケープゴートとして選ばれたのだろう。

正確には成り行きでそうなつたことを宇井さんから謝罪されたが、別に気にしていない。

二等になつたのも、個人的にはどうでもいい事だ。

むしろ気が楽なる。

ただ宇井さんは元気がない、伊丙の命がある事に対して頭を下げてもらえたが、彼女はもはや捜査官どころか人間として死んでいる。

生きる意味を失さないかけている彼女は、未だに病室から出られていない。

7月y日

私の上司がキジマさんになった、代わりに旧多一等は准特等となった金木の元へ行った。

キジマさんの手足となり雑務をこなすだけなので楽だ、ただ彼は私が嫌いなのは知っている。

拷問しようとして少しでもその態度があれば、階級など関係なく苦言は呈していたのが染み付いてしまい、今でもしてしまおう。

宇井さんの庇護が無くなったのではあるが、そういう関係になってしまった。

だが昔に比べて遥かに減った気もする、私が悉く個人倉庫を見つけまくったせいだろう。

今じゃ楽しまれてる節がある、そろそろ満足して欲しいところだ。

8月2日

エトさんや有馬さん、そして平子さんと話した。

有馬さんはこれから近い時期に、金木に殺されるらしい。

具体的には、コクリアで。

エトも、そう長くないと言う。

そしてその後のことを平子さんと私の2人に任せると言う話し合いをした。

やはり死ぬ事を選んだ人達は、何故か強い。

死んでも成し遂げたい信念があるから、強い。

今更ながら、2年も付き合っていれば情も湧く。しかし死んでほしくないなんていう我が儘は通らないし、それは彼等への冒瀆になる。

2人の成就が叶わせる事、それが無理矢理とはいえ託されてしまった私達の責務なのだろう。

11話

10月a日

エトさんから、もうアオギリは消えるだろうと聞かされた。今拠点としている流島も直に暴かれ、そう遠くないうちに殲滅されるだろうと。

実際、今のアオギリは窮地にあり時間の問題なのは局員ならば誰もが察している。

ただ、これから彼女が何をするのかは知らない。何かしら行動を起こすつもりらしいが、それはサプライズと言って秘密にされた。

大抵は碌でも無い事だったので、今回もそうだろう。

11月b日

アオギリの占拠地がバレた。

同時に、その殲滅作戦が立案された。

キジマさんは4番隊に配属され、部下の私は本島に残る運びとなった。

コクリア周辺の巡回が主な仕事となったが、それ以外は変わらない。い。

ただこれから先が、恐らく一つ目の山場となるだろう。

11月c日

エトが捕まった。

いや、あれは自首したのに近かった。

その後すぐに会見を開き、自身をグールと明かして本を出版した。

王のブレイグは私も読んだ、和修をグールの協力者として記述して隻眼の王が戦う話だ。

これから起こる世界を書いたのだ。

現在コクリアへ収監され、金木と旧田一等が対応している。

私程度端役が会えるわけもないが、まさか最後の別れとなるとは思わなかった。

これが彼女の選んだ最後だったのだろう。

11月d日

流島攻略には最短で1週間、1か月はかかるも見てCCGは本島の要所であるコクリアの防衛に有馬班を置いた。

万が一にでも梟が復活されても困るからだろう、どうやら梟Ⅱ王と彼等は認識しているようだ。

ただそうでないと気付いているものも向こう側に多く、あろう事かグールの私をそうだと考える者もいるらしい。

まあらしいと言ったのは未だに隻眼の白虎をアオギリに次ぐ標的として出されているからだ、もう白虎として動く気はないがやれるだけの仕事はこれからである。

12月e日

有馬さんとエトさんの予想通り、金木はコクリア破りを敢行した。

フエグチを助ける為だ、また裏で通じていたのかラビットなどのグール集団も加勢に来た。

連絡を受けたキジマさんと私は先行、私は上から防衛に向かいキジマさんは下で特等達と合流する事になった。

これは上からガスが浸透するので階級の低い私は上からの駆逐が適していると判断されたのだろう。

ただ結果としては有馬さんは金木に殺され、平子さん率いる0番隊は離反した。

そしてエトもやる事は終えたからここで死ぬつもりだったらしいが、助けてしまった。

彼女の覚悟を冒頭した形になるだろう、ただ救える命を救えないというのはやはり、精神的に辛かったのだ。

有馬さんと異なり、彼女の死は無くても成り立つのだから。

何故か赫子が使える旧多一等がエトさんへ致命傷を負わせていたが、蹴り飛ばしてなんとか逃げた。

戦うという選択肢も頭の中に出てきたが、こちらは突発的な行動だったので準備は何も出来ておらず、手持ちのマスクしか付けていないので格好が捜査官だったのもあり引いた。

何よりも、エトさんが瀕死であったのも大きい。

下は特等達が集結してきたのでグールを弱体化させるガスを吸わ

ないように上の天窓を破壊して撤退した。

と言ってもエトさんは一度車に置いて戦線に戻ったのだが、キジマさんは金木にぶっ飛ばされて義足じゃない方の足も無くなったらしい。

面倒な上司から暫く解放されるのだが、どうせすぐ戻って来るので面倒だ。

ついでに、初めて伊丙の病室に行ったが病室前で宇井さんが丁度、有馬さんの死を告げているところだったのでそのまま帰った。

彼女を知る者からは考えられないほどの叫ぶような泣き声は、少なからず心に響くものであった。

☆

「身勝手じゃないか、なあ?」

今しがた、取られた手足を修復し終えたエトは救われてしまった命を噛み締め、勝手な男である成へと目をやった。

ここは彼のマンション、自宅だ。生活感をあまり感じない部屋にはエトの著書が数冊と、最低限の衣服と電化製品しかない。

エトの部屋とは真逆、散らかるものがそもそもない部屋だ。

「どうするんだい? 私はグールだ、食事はとってきてくれるとでも?」

「Rc直下げれば人の食事取れたりしないんですか?」

「……私の知る限り、それが出来るのは君だけだよ」

エトはあまりに楽観的な答えに溜息を吐く。

成からコーヒーを渡され啜るが、いかんせん心が落ち着かない。

「一応ですがココリアのシチューを盗んです、1週間は持つでしょう」

「その後はどうするつもりで?」

「……どうしましょうか」

ココリアで配らる食料、確かにこれがあればマシだ。

しかし切れた後に必要な人肉をどこで調達するといふのか、本人も何も考えていないあたりにお人好しさを感じる。

「前々から感じていたが、君は中々に自分勝手だね。その癖して衝動的すぎる、今回のことでマークされたかもしれないんだよ?」

概ね、死ぬのを許容出来なかったから助けた。

それが答えなのをエトは分かっている、だが舞台を降りる予定だった役者がまだ舞台にいれば何かしらのノイズになる。

梟とは、恐怖の象徴であり多くの捜査官の抱く復讐の存在。

これから分かり合おうと考える世界には、隻眼の梟の名はあまりに邪魔になる。

「その時は貴方だけでも、王の元へ逃がしますよ」

「もしかして、死ぬ気？」

「冗談言わないでください、誰の命よりも自分の命です」

この答えにエトはまた溜息を吐く。

確かに自分の命を優先はするだろう、しかしそれは自身の命が危なくなっても助けられないという事ではない。

危なくとも、助けはする。ただ自分が死ぬか生きるかという天秤で無い限りは、成という人間は自身を押し通さない。

「とりあえず、食料に関してはなんとかします。エトさんは外出せずに大人しくしててください」

「まるでペットじゃないか、ご主人様とでも呼んであげようか？」

「普通に嫌ですけど……もう好きにしてください、生きていればそれでいいです」

あー、やはり駄目だ。

生きていることが大前提にあるエゴイスト、それがこの男だ。

からかいがいのある性格と生真面目なところで不真面目になり、正しく生きることよりも自分本位に生きていく。

有馬がなぜこの男を仲間に取り入れたかよくわかる。

これが敵になれば、鈴屋や有馬を超える障害に成り果てていただろう。

グール側の天秤を知るからこそ、彼という理解者が生まれたのだ。「……まあ、説教はもういい。過ぎたことだ、だから悲しそうな顔をするな」

2年も付き合えばそれなりに中身が分かる、こうなる事もまったく予期できなかったわけではない。

「ただ、この責任はいつか取って貰おうかな」

死に場所を失った、死ぬことを許さない彼がいる限り、これから先にある生き場所を探さなければなくなった。

ただそれまではひたすらこいつで遊んで暇を潰しておこうと考えた。

12話

1月d日

コクリアの事件がCCGどころか世間でとかなり大きな話題になったが、それよりも今はCCG上層部の方で荒れている。

和修局長ならびに総議長、果てには一族そのものが全員殺された。丸手特等は殉職、纏め役であり唯一の生き残りである和修政特等も頼りない。

そして1番の問題は総議長の遺書から旧多一等を次期の局長に推薦するという文章が出てきた。

詳しい話をエトさんに聞けば、彼は分家らしいが総議長の息子だったらしい。

そして皆殺しにしたのも彼で間違いないとの事だ。

だがそれは今現在、金木達グループ一派の仕業とされている。

やり方が汚いが上手い、頭は相当回るのだろう。

和修全体から敵が旧多に変わったのが、伝達の速さや使役する仲間の纏まりやすさを考えれば、面倒になった。

だがやる事は変わらない、ただ何をして来るか分からないので注意しなければならぬ。

1月e日

まさか私が、死体を漁る事になるとは思わなかった。

と言っても自殺者のものを選んでいる、都内の自殺スポットを探するのは出来ないが残念ながら私は鼻がいい。

血の匂いのする場所に赴き、月に2人ほど運んでいる。

処理はエトがやっているが、冷蔵庫は全て死体で埋まっている。

私も食べるかい？と誘われたが、生きるか死ぬかの時以外に食べる事は絶対ないと断った。

ただ居候としての礼のつもりか、エトさんは暇な時間は本を書くか家事をするようになった。何故か料理が美味しいのには納得いかない。

1月f日

平子さんへ情報を提供、現在のCCGの情勢は不安定だと伝えた。

それと現在、暁さんが生死の境を背負っていると伝えられた。私に出来ることがあれば対応するが、今現在は手を打てないそう

だ。
やれる事もないが、彼女は猫を飼っていたのを思い出して届けた。鍵は赫子で開けてその後は一応閉めてきた、名前はなんか長つたらしい太々しい奴だったが、平子さんには何故か懐いた。

1月m日

死体の数が明らかに減った。

まるで先に取りられているように、自殺者の肉は手に入らなくなつた。

原因は不明で王が力を入れたわけでもない、嫌な予感がする。

2月g日

先のアオギリ戦で多数の捜査官が犠牲になった。

捜査官そのものの数が減っている、つまりグールと戦う者自体が減っている。

そんな中、数の薄い支局がグールの集団に襲われた。

名はピエロ、過去に現れた事もある集団だ。

それが連日、行われた。

復帰したキジマさんと共に支局で防衛を行なったが、かなり気味の悪い集団であった。

生きることよりも、楽しむことを優先していると言うべきか、生への執着を感じなかった。

これも金木一派の仕業とされたが、何かしら手を打とうと考えているらしい。

ただ不幸中の幸いと言うべきか、エトさんが今回の件で出た死体を確保したのでギリギリ食いつなげている。

2月9日

ピエロが本局へ本隊を送ってきた。

これを鈴屋S3班が撃退、その際背面を守っていた和修政特等が殉職した。

ただやり方が本当に汚い、マッチポンプなのは言うまでもないが兵隊のかさ増しに人を使っていた。

人かグールか分からないで戦うのはあまりに精神的に負荷がかかる。

刹那の瞬間が生死分ける中で躊躇を生むのは言わずもがなであるが、殺したのが人であった時はその罪悪感に苛まれる。

何喰ったらこんな発想が出来るのかは分からないが、人でも喰ってるのだろう。

あと喰うで思い出したが、エトさんに私の身体を一時的措置として食べさせた。

正直気分のいいものではないが、私は勝手にRc値が回復する影響もあり多少の傷なら治っていく。

ただその分食べる量は増えた、何故彼女がレバナラ炒めを美味しく作れるかは分からない。

2月h日

色々と変化の多い時が訪れた。

旧多が改名し和修吉福と名乗り、新局長に就任した。

邪魔者の血縁者はおらず、周りからの信用も先の戦いで得ている。

そして後見人には宇井特等、相当上手くやっている。

ちなみに和修特等が率いていたS2班はクインクスの瓜江上等が引き継ぐこととなった。

シャトーで何度か顔を合わせたか、偉くなったものである。

上等に至るのは伊丙よりも短期間だろう。

だがそんな事は正直どうでもいい。

旧多は新局長の就任式で先のピエロ戦の事を最大限利用し、カルト集団の教祖さながらの催しを準備していた。

一つは半グールの量産化、それも金木と同じものをだ。

恐らく全員をレートで表せばSないしSSに至る個体もいるだろう、それだけの雰囲気を感じる子供達が配備された。

そしてもう一つが、偽物の金木の準備。

顔はどうやって変えたかは分からないが、それに嘘の自供と公開処

刑を断行する事で新局長としての意思を周りに示した。

目標はグールの殲滅、血生臭い世界が始まろうとしている。

☆

「黒山羊は地下よ」

ピエロのグール3人と1人は、大胆にもCCGの局長室で格式なぞ知らんといった様子でデスクに腰掛けながら話し合っている。

そしてやはり話題は、グール達のことだ。

もはや絶滅寸前の種族、金木の率いる黒山羊も今は食料不足だろう。

しかし、今敵対している存在はまだいる。

「白虎は？」

ピエロの1人、ウタは聞いた。

隻眼の白虎、過去にCCGの前に現れたのは一度のみであり瞬く間に准特等と上等2人の捜査官を倒したとされるSSレートのグール。

しかし非公式にはVも一度接敵している、だがその際は逃亡を許している。

そして最近、コクリア内で旧多が接敵した。

目的は隻眼の梟、芳村エトの奪取だと考えられているが、その問題だったのは、格好が捜査官だった事だろう。

「身長170cm前半の本島に残った者と死んだ流島の者の中から洗いましたよ、そしたら面白い人物が釣れました」

そして今の旧多にはそれを調べられる立場にあり、それを探せる手駒もある。

「ガードは硬かったですけど、臭いまでは消せませんからねえ」

対象のマンシヨンの写真、そして経歴書を3人の前に置く。

だが3人とも、その名前に聞き覚えは全くない。

「白虎は赫子を使った事がないんでしょう？目は戦った時に変化もしていなかったらしいし、最初の捜査官の見間違いなんじゃない？」

コクリア内の監視カメラの映像データは事前に止められていた影響で確認出来ない、しかし上から逃げた事は証言としてある。

むしろグールじゃない方が可能性としては高い、ここまで隠し通せ

るほどの実力ものという可能性はゼロではないがいかんせんデータが少な過ぎる。

「もう捜査官の方は死んでるから確認出来ないしねー」

「まあ、隻眼なんてポンポン現れても困るわよ」

そして唯一確認していた捜査官達ももう死んでいる。

なので、もはやグールかどうかすら確認が難しいのだが。

「一応、彼からは臭いはしなかったそうなので多分グールじゃないでしょう。グールだったら口臭ケアが無茶苦茶上手いって事です」

しかし、生かしておくには危険過ぎるのだ。

旧多が赫子を使えるのを知るのはもちろんの事、CCG内の事情に多少なりとも詳しく顔は広いわけではないが、宇井や黒岩をはじめとした特等達からの信頼がある捜査官である。

作戦が筒抜けになりかねない。

「というわけで、殺しちゃいましょう」

ゆえに、旧多はすぐにやる事を決めた。

時間をかけるほど、良い事にならないと判断してのことだろう。

そして何より、仮に生き残ろうとこれから行う事で信用なぞ消し飛ばせるといいうのものもある。

「隻眼の梟もろともやっておきたいですし、ちょうど試したい駒もあるんですよね」

「なにその捜査官、強いのか？」

「絶対に有馬貴将よりは強くないんで大丈夫ですよ」

旧多は一度、その捜査官の動きを間近で見たことがある。

間違いなく一等捜査官程度で収まる人間の動きではなかった、しかしそれを見たからこそ、これが有馬に至るような存在でない事もすぐに看破した。

特等程度はあるかもしれないが、それならば駒の使いようで簡単に落ちるだろう。

「それに、せっかく助けた人に殺されるのって面白いでしょ？」

そして、彼に準備された駒は最悪とも言える立場を選んだのであった。

逃亡編

13話

2月h日

誰かに監視されている気がする。

今、オツガイが各区のグルルを掃討している。

そしてほぼ間違いないのだが、どうやら自殺者の肉を彼等は独自に集めていると思われる。

グルルの肉の他に人の肉も取る、恐らくオツガイの食料はそういうものなのだろう。

そしてこれも確信のある事であるが、監視されている。

エトさんも感じているようで、このまま居座るのは危険だと考えている。

なので、まずはどこかへエトさんを逃さねばならない。

2月j日

平子さんへ暫く連絡が取れない可能性があるかと伝えた。

だが直近のCCG、もとい旧多の動向と狙いについては自分なりに纏めて書類で渡した。

そろそろ中身の統一を行うために、行動を起こす可能性が高いと思われる。

いや、どちらかと言えば粛清だろうか。

私もその対象となり得る、ゆえにここから先はより一層、慎重に事を運ばなければならないのだ。

3月i日

明日、都合の良さそうな区へエトさんを移送する。

彼女はやれる事のことをしてきた一方、好き放題生きてきた。

私の知り合いで言えば真戸親子といった不幸を産み出している、それに対する贖罪は死ではないと私は考えている。

だからこそ、生きて貰わねばならない。

確かにオツガイ程度に襲われても大丈夫であろうが、今は金木とい

う象徴をぼやかすわけにはいかない。

今はまだ、身を潜める時だ。

☆

求められたのは迅速な移動と、後でその行動を問われたとしても正当化できる言い分の準備。

前者は高速道路での移動によりクリア、そして後者は支局への移動に乗じたので何ごともなくこの狙いは上手くいくはずであった。

そう、はずであった。

「……やられたな、成」

高速の上で、道路が封鎖されたのだ。

周りに車両が少ないと感じた時点で、その違和感を確信に変えるべきであった。

あまりに大胆に、手のひらで転がされたのを2人は悟る。

「この数の捜査官、私達がそもそも逃げる事を前提に敷かれている。指揮官は相当キレそうだ、どうする？」

高速道路、しかも20mを超える高さの道を車両で封鎖され見覚えのある捜査官達が各々の武器を携えている。

成の顔見知りとしては宇井特等に、伊東上等、キジマ准特等までいる。

抵抗を起こさせないための策だろう、少なくとも成だけは捕まえるという意志を感じる。

実際、成は黒山羊への情報を運ぶスパイであった。

逆説的に言えば、黒山羊の事を最も知る捜査官とも言える。

ここでグールに逃げられたとしても、後々処理出来る状況は簡単に作れるだろう。

それが仮に隻眼の鼻だとしても、旧多が本気を出せば可能な範囲だ。

「グールの力を使えば、この程度の修羅場は何とかなるが」

確かに、彼女の力を使えば簡単に逃げられるだろう。

しかし、それが目的ならばどうか。

今のグールとの和解を模索している黒山羊のやり方とは反してい

る、そう捉えられる恐れがある。

捜査官へその意識を浸透させる、それが目的ならばグールとして無理矢理突破するのは悪手である。

「使わない方がいいかと、今グールの脅威を見せつけるのは黒山羊のやり方じゃないでしょう」

成のグール化も言ってしまえば切り札だ。

そして生涯見せなければそれで良い、敵も味方も騙したとっておきである。

見せずに突破できるならば、しない方が良いだろう。

「だからエトさん、特に貴方は戦うって選択肢は出来るだけ無い方向で考えてください」

「君は？」

「一応話し合いしてきますよ、ただエトさんはもう逃げてください。下にも気配はありますが、Vなら足で勝てる筈です」

しかし、この状況を利用する事も可能ではある。

「ただ恐らく後ろでオツガイが控えてますから、これは私の方へ誘います。最優先は私でしょうし、ここにいる捜査官を派手に蹴散らせば寄ってくるでしょう。幸い、草薙と大和はあるので大丈夫です」

成というグールとの理解者の宣伝になる。

これが異端と取られる可能性は非常に高いが、これは前例になり得る。

人間の中に、捜査官の中に、グールとの和解を求める存在が現れているという事を。

幸いなのはクインケがある事だ、そしてクインケを渡してでもこの人では逃げる事の難しい道路での作戦を実行する事を優先していると見るに、恐らく成がグールでもあることは旧多にも認識されていない。

「12か6区で会いましょう、前話した都合の良い場所で」

☆

ある極秘作戦が、S1班を主体に始動していた。

なぜ彼らが選ばれたか、それは身内毎であったからという側面が大

きいからだろう。

「皆さんお揃いで、どうなさいましたか」

目の前に車から降りた青年は、白々しく聞いてくる。

助手席にはフードを被った少女らしき人影があり、何か話した後のようだが、少女の方に動きはない。

もしかすれば、この状況を悟っているのかもしれない。

「一応伺いますが、手違いではないですかね」

クインケのケースを両手に持ち、物騒な雰囲気が出てきている。

しかし何も障害物の無い道路の真ん中だ、既にライフルを構えた捜査官が不審な動きをしてこないか目を光らせている。

中には羽赫を構えている捜査官も多数いる、そして最前線にいる捜査官は既にクインケを解放しており、いつでも取り押さえると気を張っているのがわかる。

「成遼太郎二等捜査官、君には喰種の蔵匿と隠秘の嫌疑がかかっている。隣にいる者と共に、大人しく同行してもらおう」

逮捕状を片手に、捜査官の1人が宣言する。

抵抗しようにも、この数の捜査官は無謀としか言えないだろう。

グール1人に二等捜査官が1人、あまりに過剰だが今の時期を考えれば晒し首にするのに相応しい存在ではある。

だがそれを聞いた瞬間、成は道路の外へと指を指す。

「ちっ、羽赫班！」

瞬間、助手席に座っていたグールらしき人影が飛び出した。

宇井は展開していた羽赫部隊に射撃命令を出す、しかしそれは届かない。

「伏せろ!!」

成のクインケが展開されている。

SSレート甲赫、草薙だ。地面に刺されているそれが伸ばした触手が道路をめぐりあげ、更に捜査官達の車を軒並み吹き飛ばしたのだ。

故にグールへは攻撃は届かなかった。

道路を崩壊させるとまではいかないが、暫く使い物にならない状態になっている。

「追うのは別働隊に任せろ」

宇井は部下へ指示を飛ばす、そして一瞬にして戦場に作り替えた本人へと向き直る。

嫌な手を使う、人間はグールと違い銃で制圧できるが遮蔽物を作られた。

つまるところ、この手を打ってきたという事は徹底抗戦の意思があるという事でもある。

「宇井さん、出来の悪い部下で申し訳ありません」

遮蔽の影から、覚悟を決めた顔で成は立っている。

それもそのはずだ、ここから逃げられる算段はないはずだ。

道路の封鎖は数キロ先まで行われており、この高さを飛び降りるのは人間では不可能だ。

仮に降りれたとしても、別働隊が控えているので正に袋の鼠なのだ。

グールのように三次元での移動が出来る存在でもなければ、逃げる事はできない。

「ただ、私にも譲れないものがあるので」

だが、全く引く気を感じさせない。

むしろこの場で全員を倒すという意味まで感じさせる。

「全員、殺すつもりはありませんが……手加減出来ずに、手足が無くなる覚悟はしてください」

ふと、宇井はこの威圧感に既視感を感じる。

歩き方、クインケの持ち方、冷静に隙を晒さない位置取り、どれも何処かで見た記憶がある。

「総員戦闘配備――RN特別指定犯を確保する」

その佇まいは、宇井の敬愛する有馬の姿と重なって見えていた。

14話

☆

戦闘開始から、30分ほどたっただろうか。

黒煙を巻き上げる戦場に立っている捜査官の数は激減している。

ある者はクインケを破壊され、ある者は義足を破壊され、ある者は触手に貫かれ腕や足にダメージを負い、戦線を離脱させられている。

そこかしこに気を失い倒れている捜査官が溢れており、標的との戦闘を優先出来ていない。

「……あの人選ばれた捜査官は、伊達じゃなかったな」

既にクインケが破壊された宇井は脇腹を押さえながら蹲り、その真横を成は通る。

無傷だ、黒煙で多少は煤けていてもその体には銃弾一つ、すり傷一つ見当たらない。

今の戦い、何よりも宇井が恐れた点が二つある。

一つは射線の管理、もとい状況把握能力だ。周りを認知しながら10対1を無理矢理2対1以下に持っていき、各個撃破を行なっていた。

時には遮蔽を、時には捜査官の影に隠れ射撃そのものを行わせなかった。

周りとの位置関係の把握はここまで磨かれていれば、もはや固有の能力だ。後ろに目がついているとしても驚かないだろう。

だがそれを支える頭の回転力こそが最も恐ろしい。

瞬間的な判断力が高いのだ、五感で得た情報から最適解を選ぶまでのラグが殆ど感じない。

つまり明確な隙というものが見当たらないのだ、故に攻めるには単純な力比べとなる。

戦闘能力は確かにあるが、それは有馬には及ばない。

技術力、身体能力、どれも並の捜査官では及ばないがそこまで特筆する必要はない。

この数の捜査官が居れば、圧殺できる程度の力だ。

梟を相手した時ほどの絶望感はない、それは彼自身が手加減をしていたというのももちろんあるが、今の成は梟を相手に出来る存在であると宇井は確信している。

たった一人で包囲網を破壊したのは、事実なのだから。

「郡さーん、遅くなりました」

不意に、気の抜けた声が響いた。

成が唯一、恐らく逃走用にわざと壊さなかった車が同時に爆散する。

だが、それは予期していたようだ。

増援である、これだけの捜査官を揃えていながら準備されていた保険。

爆炎の中から、数人の人影が現れる。

「ギーコーナーリー？」

だが、成が両目を見開いた。

全く予期していなかった事が起きたのだろう、そしてそれが何故なのかはすぐに分かる。

「……伊丙、なのか？なんでこんな所に」

片腕を失い、臓器に損傷を負い、果ては精神的に多大なダメージを受けている筈の伊丙入、成が殺した筈の捜査官がそこにいたからだ。

腕は何故かあり、両手にはしつかりAusとThumanが握られている。髪色はストレスのせいか白髪に染まっており、その眼光の鋭さはグールを見る目と変わらない。

だが明らかに雰囲気が違う、以前とはまるで別人格が混ざったような印象を受ける。

「決まってるじゃないですか、お仕事ですー」

何の躊躇いもなく、伊丙は成へと切り掛かった。

二つのクインケを草薙の二刀流モードで受け止めているが、あまりの重さに成は弾くと一度下がる。

だがそのまま羽赫の電撃が浴びせられる、瞬間に草薙のギミックで地面を捲り上げて回避までの時間を稼ぎ避ける。

殺気を宿した攻撃であるが、伊丙だけに警戒するわけにはいかな

い。

他のオツガイは様子見をしているようだが、いつ手を出してきてもおかしくない状況だ。

しかし、今成の混乱している頭のリソースはこの解答に割かれ始めている。

「……まさかだと思うが」

オツガイとの出現、治っている腕、以前では見受けられなかった二刀流でのクインケの使用、あまりにも状況を判断するに容易な情報が転がっている。

以前の伊丙は二刀流を使う事は稀であった、何故なら庭出身者とは言え女性でかつ、使っているクインケが大物だったからだ。

故に100%の力を出し切るのに両手で一つのクインケを扱う、だが今は片手で完璧にクインケを扱っている。

最大の問題であった筋力を解消している事に他ならない、そして先程の罅迫り合いでも押し負けた事からこれは確信に変わっている。

「オツガイか」

「正解ですよー、ご褒美に片腕もらっちゃいますね？」

成はクインケでの応酬を捌ききる。

クインケの技術で言えば成の方が有馬から指南を受け続けていたこともあり上手だ、しかし殺す気でくる同僚に対し、成自身は多少なりとも動揺が現れており、特にそれはクインケから迷いとして現れている。

「あはは、やっぱりだ。あの時、私の事助けられたのに無視したんだ？腕は無くなっちゃやし、有馬さんは居なくなっちゃったし、許せないなあ」

今の戦闘で、彼の實力はある程度保証されたものとなった。

成がわざと力を出さずに生きてきたのを証明されたことに他ならない。

伊丙は成が戦っていれば防げた未来を想起している、それは気に食わないことに有馬の片腕として生きていたかもしれないが、肝心の有馬そのものが死んでいるのが今の世界だ。

救えたかもしれない命の中には、有馬もいるのだ。

伊丙からすれば年が上の出来の悪い部下だった、それが今、CCGの敵として立っている。

クインケの操術を教えた事もあれば、地下で助けたことも何度かある。

それが、このような形で恩を仇で返そうとしている。

「許せないなあ!!」

瞬間、彼女の片目が赤黒く染まる。

背中からは同様に赤黒い燐赫が現れ、周りの遮蔽物を吹き飛ばしていく。

「……バケモノか」

巨大というものもあるが、その破壊力と扱い方にやはり彼女が天才であるという事が思い知らされる。

だが、戦わずに逃げられるような甘い状況でもない事を成は分かっている。

「痛いじゃないですか、まーた無くなっちゃった」

赫子向けられるがそれを躲し、受け流し、懐にまで飛び込む。

近距離ではクインケの間合いであるが、成はフェイントを絡めつつ片腕を切り離す。

首を切る事も不可能ではなかったかもしれないが、あえてそれを選んだのはまだ戦闘不能にさせる余裕があるからだろう。

オツガイが混じろうとも、時間はかかるが対処はできると。

「おんなじ事、してあげますよー!」

しかし、腕は勝手に繋がった。

「足りないなあ、足りないなあ……!!」

乱雑に振り回される赫子は受け流す事すら至難になってくる。

力が強すぎる上に、手足のように動かしているのだから当然だ。

回避を続けても、周りには倒れている捜査官もおり無闇矢鱈な行動は出来ない。

そして伊丙は、倒れた捜査官を気にしている様子はカケラもない。なによりも、彼女はまだ全力を出していない。

「死んだらダメですよ？私、琲世の居場所聞きたいんですから」

見惚れてしまいそうな黒い笑顔、その真意は酷く単純で純粹だ。

「それは、そうなるか……」

彼女は、求めているのだ。

そして求めているものなぞ、一つしかない。

「そうですね、有馬さんの仇は私が取ります」

今、成の心は酷く歪んでいる。

冷静に、顔に出さないように努めているが、身体にも歪みが現れている。

伊丙入が元から殺される存在であったと知るのは有馬、エト、成の3名だけだ。

その基準はこれからの世界でノイズになりかねない事、そして捜査官として優秀であった事だ。

「ちやーンと壊して、壊して、壊して、ぶっ壊してから殺すんです。だって私、そうしないと満足出来ないですよ？有馬さんが帰ってこないんです、だったら私が出来ることなんて有馬さんの邪魔した奴ら殺すぐらいしかないでしょ？」

今の彼女は金木研と戦い、殺す意思を抱いている。それを防ぐ為に成は態々片腕を落とすように助けた、しかし今はそれが悪手となって目の前に顕現している。

今の彼女の生きる糧は、その憎悪だけだ。

自分のまいた種ではある、だが旧多という悪魔がしっかりと水を撒いたのだ。オツガイという肥料を添えて。

「なら伊丙、私がそう仕向けたとしたらどうする？」

だからこそ、今の成には責任を取らねばならない。

「……は？」

壊れた様な笑い声が止んだ、いや彼女は壊れているのだがその破壊衝動が蠢いたのを成は察した。

「有馬貴将が死ぬと分かってて静観していたとすれば、お前は私をどうする」

その答えは、隣にあった車を見れば分かる。

真上から叩き付けられた赫子によってひしやげており、原型は全く留めていない。

「あー、もう壊します。だって耐えられないですし、生かして捕まえるって言われてますけど……別に中身は殺しちゃいけないとは、言われてませんから」

瞬間、彼女の背中から伸びた赫子の本数が増えた。

8本、伸縮どころか大小すら弄る彼女の暴力が今から撒き散らされていくだろう。

赤い瞳を更にギラつかせ、そのもう片方の瞳すら赤黒く染まっついていく。

今の彼女は冷静じゃない、そうさせたのだがもはや周りへの配慮を行える様な状態には見えなくなった。

「……この場にいる者全てに告ぐ」

静かに、それでいて周りへ響く声音で成は宣言する。

「巻き込まれたくない者は下がれ、2分だけ稼ぐ。周りの被害を考える程の余裕は今の私にはない」

成は自惚れているわけではない。

自分の実力を正確に理解している、隻眼の梟にも捜査官としてはクインケや運次第では勝てる自信を持っている彼であるが、周りに捜査官が倒れているという前提で戦う事はしていない。

周りを庇いながら梟に勝てるほど、成遼太郎という捜査官は強くないのだ。

「良い人ぶるじゃないですか、私は見捨てたくせに」

彼女は正気を保っている。

正気な状態で狂気を纏っている。

今の彼女には力に振り回される事は無いだろう、そんな彼女に対して手加減が出来る捜査官は、有馬貴将以外にいない。

故に、本気を出さなければ成という捜査官が勝つ事はない。

だが、そう簡単な話ではない。

「……お前は殺したくないよ、伊丙」

「私は殺したいですよ、成」

刹那の間の後、暫く轟音が鳴り響いていく。
斬撃音、爆発音、衝撃音、都心の道路で誰にも止められない戦いが
始まってしまふ。

元は人間同士の争いだとは、誰にも想像できないだろう。

☆

3月k日

私の確保を行うための作戦が行われた。

だが何とかエトさんは逃し、私は注意を引いて捜査官達のクインケ
を破壊して回ったのだが、思わぬ乱入者が現れた。

伊丙だ、しかも明らかに強くなっていた。

オツガイの施術を受け腕は復活し、もはや手のつけられない存在に
至っている。

完全に余裕の無くなった私が取れた行動は、伊丙を倒すことだけ
だった。

間違いなく言えることとして、私の出会ったグルルの中で3番の指
に入る存在という事だろう。

クインケを両手で扱いながら襲いかかってくるオツガイの彼女は
捜査官としての私の全力と拮抗している、そして結果としては道路が
持たずに倒壊、引き分けという形で終わった。

一応、何度か致命傷を与えたつもりではあったが、凄まじい回復力
に対応できなかった。確かに殺すつもりではなく戦闘不能にさせる
つもりで戦いはしたが、それでも彼女は圧倒的だった。

草薙は破壊され、大和も弾切れとなり使えなくなった。

倒壊の砂塵に紛れて逃げる事しか出来なかった。

だが、彼女は私が生かしてしまった存在だ。

使えない駒が戦局を変える駒へと昇華してしまった、故に責任を取
らねばならない。

彼女を金木と戦わせるわけにはいかない、彼女は私の手で……。

15話

「スパイが、成さんだったんですか？」

黒山羊の主人、金木は今しがた平子から伝えられた情報に若干戸惑いを持っている。

佐々木の時に関わり合いは多少持っていた捜査官の名だ、元は0番隊の先輩であり、平子以外で唯一の有馬のパートナーを務めた事で知られている。

情報的には黒山羊側の人間というのはよく分かるが、彼自身は有馬同様よく分からない人間であった。

もっぱら成との会話は有馬という捜査官の話を聞く事が多かったが、成自身は有馬の事を知っているようだが多くは話さなかった。

そして成自身の事も、彼はあまり話さなかったのを覚えている。

だが捜査官として気負わない事をよく伝えてくれた存在であった。

「ああ、しばらく連絡は取れないそうだな」

旧多の今後の動向、それを予測した資料を渡された金木は軽く目を通す。

目的そのものは不明であるが、まずは周りとCCGの整理整頓を行う可能性が高いと書かれている。

その中には肅清、という文字もある。

「さっき、7区で大規模な戦闘があったと聞きました。まだ確定してませんが、これって……」

成が連絡を取れなくなるような状況、それに合わせて起こった地上での戦闘。

金木達も地上には観察する程度の密偵は送っているが、地上で目立つ程の戦闘が行われていることと、その標的について心当たりはなかった。

「……そうだろうな」

平子からの、連絡と資料を受け取るまでは。

しかし平子は続けて「捜索隊は送らなくていい、覚悟の上だ」と呟くが、金木もそれだけでは納得はできない。

王として、グールの希望として動く必要がある事は分かっている。だが手の届かない人が救えないというのが、彼は嫌なのだ。しかし、それを察してか平子はこうも続ける。

「成遼太郎は時が来るまで身を潜めて来た、この時のためだけにだ。そして戦鬪面では有馬さんの信頼を得ている唯一の捜査官だ」

この状況であろうと彼に動じた様子はなかったのは、それだけが理由だ。

金木も実力を隠しているという点についてはなつたしたが、今の言葉には驚く。

成の実力は何も分かっていなかったが、有馬貴将のお墨付きをもらっているとなると話は大きく変わる。

「心配するな、あいつはそう簡単に死なない」

平子とて成の具体的な能力は知らない、それこそが強みでもあるからだ。

未確認で正体不明、有馬がわざわざ抱えた手札はそれだけの価値のあるものなのだ。

☆

CCGの局長室に旧多と芥子は伊丙を呼び出していた。

全員が庭の出身者という事もあり顔見知りだ、Vとして生きてきた者達である。

だが、今は同窓会のような優しい雰囲気が集まりではない。

「なんで逃しちやっただんですか？」

「苦しめてから殺したいからですよー、だってどうやっても私が勝ちますし」

先の戦いで旧多は成を吊し上げる予定であった。

明らかかな地雷でもあった彼の排除は、これからの思惑に必ず障害となると考えての行動だった。

梟なぞどうでもいい、処理のしようはいくらでもあるただのグールだ。

しかし成は捜査官だ、それでいて白虎として情報をかき集めていた隻眼の王の腹心とまで考えていいだろう。

いや、むしろ彼こそが最初の隻眼の王という可能性もある。

それだけ、この存在の排除は重要であつたのだが任せた駒に問題があつた。

「入、貴様勝手が過ぎるぞ」

芥子は呆れたように伊丙を見る。

彼女の實力はVを凌駕している、それこそ施術を受けた並のVすら簡単に振じ伏せるだけの力を彼女は持つてしまっている。

だからこそ任せたのだ、絶対に勝てる戦を行うために。

「じゃあ何ですか？ 気に食わないんなら良いですよ、殺し合いでもしますか？」

しかし、もはや生きる活路の無い彼女は己が欲求を満たす為だけに動いている。

王を倒す為の駒としてスカウトはしたが、それ以外の自由が過ぎる。

だが生かしているのは強いからだ、それこそこれに対応できる捜査官は存在しないと断言出来るほどに。

「王様はあとで殺しちやいますから、今はとりあえず遊んでもいいですよ？ ただ成には手を出さないでくださいよ、私が殺すので」

それに、彼女は先の戦いで全く戦果をあげていないわけではない。「クインケも壊したし、私も本気出してないんですから。それに殺してくる相手を殺す気で戦えないんですよ？ 次はどうやって遊ぼうかなあ〜」

成遼太郎の實力を引き出し、表面上は引き分けとなつたが追い詰めている。

別に彼女が殺す必要はない、彼女以外にも簡単に殺せるように弱らせてもらえれば良いのだ。

☆ そういう狙いとしては、旧多の思惑通りであつた。

☆ とある、倉庫の中で成は身を投げ出すように倒れ込む。

同時に持っていた破損した草薙、弾切れの大和の入ったケースが床に転がる。

12区のとある倉庫、その所有者の名はキジマ式。

成が都合よく逃げれる場所として控えた隠れ家だ、キジマ自身もそこまで利用する事はない上に今は時期として利用もされ辛い。

機能した隠れ家だ。

「手酷くやられたな」

そして先に送っていた人物は倒れ込み成をそつと赫子で包み込む。

「……エトさん」

「君ほどの使い手がクインケを壊されるのは意外だったが、旧多でも出てきたのか？」

エトは先にキジマの倉庫へ侵入、簡単な片付けと逃走経路の確認などを行なっていた。

彼女に対し2箇所の候補を出したのは万が一にでも捜査官やオツガイの出待ちをされた時に不利だからだったが、幸いにもその様な事はなかったようだ。

ただ、彼女の手には追っ手から剥ぎ取ったのか四肢が幾つか手にある。食料は自分で調達したのだろう、恐らくVの物を。でなければわざわざ戦わないという選択をする必要もない。

「……もつと、嫌な奴です」

「……そうか」

成の絞り出された言葉に、それが誰を言っているのかエトは察する。

成の捜査官としての全力で戦うに値する存在なのは壊れたクインケから想像がつく、そしてそれで責任を感じている事も。

「多分、捜査官の私では次に会った時に殺されます」

客観的な事実として、成は負ける。

クインケが今手元にないというのも勿論ある、実力そのものは拮抗している、だが覚悟に差があり過ぎる。

あそこまで単純な思考を持つほど壊れた怪物は、今の色々と頭を悩ませる成より遥かに強い。

「だから……だから」

何があっても、基本的に答えを即答していた成は言い淀む。

恐らく頭の中には自分の行うべき正しい答え、というものがあるのだろう。

ただそれはやりたいかと問われれば、ノーなのだ。

しかし、こうなったのは自分で責任であるとも分かっている。

いつも何事も動じない心が、壊れそうになっている。

いや、壊れる事はないのかもしれないが……何かを失う事が分かっている。

それが怖いのだ、自分の中で引いた一線を超えてしまうことを。

そこから先の世界の自分が、何をしても動じない化け物に成り果ててしまうのではないかと。

「成遼太郎」

瞬間、成の顔が弾かれた。

頭を抱え続ける彼を、考え事ふっ飛ばした。

「……何、するんですか」

「迷い続ける君を見て珍しいと思う反面、さっさと立ち直れと忸怩たる思いでね？」

要するに、喝を入れたのだ。

痛みに思考が吹っ飛ばされた成は溜息を吐きながら、それでも何も変わらないといった目でエトを見る。

すると隣へ、エトは腰掛ける。

「君は悩み事がある時は逃げ道を探してきた、だから都合の良い答えを出す男だ」

「説教ですか、まあ間違っていないですけど」

好き勝手に生きてきたわけではないが、譲れない所では勝手にしてきた。

だからこそ伊丙入は生きており、その伊丙を止めなければならぬ。

「そしてその結果が今の惨状ではあるが……まさか、私のことも後悔しているのか？」

「っ……」

成の言葉が詰まる。

成はエトの死に場所を奪った、そしてこれからの世界で生きる意味を無理矢理に考えさせた。

グールという存在の憎悪の象徴、もう彼女は今後の世界のノイズにしかならないと分かっている、成は勝手に命を助けた。

それが彼女の救いでなくても。

「最後まで悩め、思考の停止はいつでも出来る」

エトの言いたい事はシンプルだ、お前の考えのままに成し遂げたい事を身勝手にやってみろと言っている。

自分を助けた時と同様に、伊丙入も後悔亡き選択をしろと言ったのだ。

「とりあえず草薙は捨てる、今は治らん。大和の補充ぐらいは対応できるが、整備は出来ないからな」

「……エトさんって、こんな世話焼きでしたっけ？」

成という人間は大抵のことを己だけで完結させてきた男だ、だから色々とうとういった鞭で叩かれることは無かったのだが、最近はそのような事が増えていく気がするのだ。

「本来なら私はもう舞台を降りている、残った以上主役は譲るものだろう？」

ただ、成自身少しは気を張らないでいられる時間だとは感じているのであった。

16話

コートを手を持ち、今しがた検査を終えた宇井は局内へ戻ってきた。

歩いてみれば特等に気付き挨拶がやってくるが、その後皆世間話に花を咲かせる。

今のCCGでは二つの話題がある、一つは新局長について、もう一つは裏切り者についてだ。

前者は革新的で衝撃的な策ばかりを打ち出す旧多の事で、話題はまだ懐疑的な意見が2割にグールの殲滅について信用する意見が8割と言ったところか。

既に結果を出しているだけあり、CCG内の声は局長派が多いといったところだ。

「宇井特等、お怪我は……」

歩いていると同じ作戦に参加した伊東上等が駆け寄ってきた。

彼も頬に湿布があったりと色々と手傷を負っているが、宇井ほどでは無い。

「問題ない、ただの打撲だ」

正確には、打撲で済まされたといったところだろう。

それは他の捜査官も同様で今回の作戦において負傷者は70人を超えるが死者はゼロである。

「まさか、成まで裏切るなんて……それも世話になってきた特等にまで剣を向けて……」

宇井は直にクインケを交えた、ただ成は圧倒的に上だった。

クインケを破壊されるばかりか、蹴りで吹っ飛ばされる程度の余裕を見せ付けられた。

彼も後特等クラスの捜査官が3人いれば戦えるとは感じているが、4人がかりでようやく殺し合いのステージにあげるだけだ。

「事はもう起きた、私情は挟まない方がいい」

それは、自身へ言い聞かせるように呟かれた。

「成元捜査官は伊丙上等が処理する、今はそれより隻眼の王の方が問

題だ」

今残っているのは、手塩にかけて育てた部下である伊丙だけだ。今の彼女は生きている、病室で生きる気力を失った彼女に宇井は何も出来なかった。

だがその裏で悪魔の契約があつた事は知られていない。

『彼女の腕と臓器が治れば、またあの笑顔が見れますよ?』

そう言った旧多の言葉を信じ、伊丙入の施術の後見人を引き受けた。その時に嘉納というマッドサイエンティストの存在すら認めた、そして成遼太郎という部下の排除まで了承した。

宇井にとつて成とは最も自分を気遣つてきた部下である。戦闘面では頼りにはしていなかったが、自分達の班の良心として倫理観をブラさずにくれてくれた存在だ。

仕事もよく出来た、捜査能力もあつた、だが居なくなつた。

「すみません、一番……特等が苦しいですよ。部下の殺し合い、ですし……」

「……もうあいつの事は任せろ、アレに勝てるのはハイルだけだ」
今からまた、失うのだ。

そして宇井は伊丙を選んだ、それだけの事だ。

だが頭の中から離れないのだ、開き直るでもなくただただ謝る時の成の覚悟を決めた顔が。

その顔に、悲痛さがあつた事を。

「二人目の有馬にも、あいつはなれたのに……」

伊東上等はその場で別れた、宇井にもまだやるべき事がある。

「(未来の有馬同士の戦いなんて、誰が望むんだ)」

ただ、自分の為したい事は何なのか分からないままであつた。

☆

襲撃を受けてから1週間、その間に大きな出来事はなかった。

Rc 検査ゲートも突破でき、捜査官としてもグルルとしても土地勘のある二人は容易に区を跨いで移動が出来ており、キジマ所有の倉庫を点々としていた。

そんな中、成は考えが纏まつたとエトを呼んでいた。

「なるほど、妙案ではあるか」

一通りの作戦を聞き終え、エトは納得する。

「だが『夙成』を使った所で、その後はどうする?」

「そこからは私で何とかしますよ、それで伊丙とは決着を付けます」
悩み抜いた1週間、いやもう答えは決まっていたのだが、それを為すための策を成は練り続けていた。

出来ることと出来ないこと、手元にあるもの、手に入れられる者を精査し、導いた策だ。

「つまり、目先の目標は流島か。検問はどうする?」

「回収と囿で分けます、地理はエトさんの方が詳しいと思うので」

流島は離島だ、船が必要である。

今はアオギリの跡地という事もあり、調査の真つ最中だろう。

隻眼の王について掴めていない彼らの事だ、多少なりとも人員は割かれている。

「ただ言っておいてなんだが、回収されてる可能性は高いぞ」

「その時はCCGの研究所に忍び込みますよ、それに彼らが捨てるとは思えませんし」

「……成る程、まああいつらの事だ。量産でも考えているだろうな」

概ね、これからの事が決まったようだ。

まだ旧多陣営も固まっていない、それに対して二人のフットワークはかなり軽い。

組織と個人との差を存分に発揮していくのだが、それでも懸念材料は尽きない。

「その後はどうする?」

「とりあえず、黒山羊と合流ですかね。潜伏するにも難しくなってくると思いますし」

今の潜伏場所である倉庫もいつバレてもおかしくない。

オツガイは鼻がきく、ましてやエトは人肉を食わねばならないので臭いもたってくる。

今はオツガイの殲滅対象区域から外れるように移動しているだけであり、時間の問題だ。

「恐らく、今の黒山羊は食料不足だ。考えるに今はその確保へ、樹海を
目指す計画でも思案してる頃合いだろう」

「なら、旧多もそれを見越して動いて来るでしょう」

そして、時間の問題なのは黒山羊もだ。

地下へ避難しているお陰でオツガイからの攻撃はまだ届いていな
いが、食料の確保は難しい状況だ。

そして地下の正確な位置がバレるのも、時間の問題だ。

「つまり時間との勝負というわけか、困ったもんだね」

「流島は出来るだけ早く確認したいんですが、滞在できる時間は短い
でしょうね」

旧多サイドに比べ、切羽詰まっている。

それは成もエトも同様の意見だ、このまま時間をかけるのは得策で
はないと。

しかし、旧多自身にまったく隙がないわけではない。

「ただ今のCCGでは表面化していないだけで反旧多派が居ます、こ
れだけ無茶苦茶に動いて来れば正気の人間が出てくるはずです。そ
れもそろそろ動いて来るでしょう」

成が赫子を出さなかった理由の一つがそれだ。

人を殺す事を受け入れる集団になりつつあるのが今のCCGであ
る。

だから先の作戦では徹底的に人間である事を演じた。

捜査官達に違和感を与える為にだ、仮にここでグールの力を出して
しまえば成を倒すことの正当性が出てしまい、旧多への信頼へと繋
がっていく。

この布石があるだけで旧多陣営に負荷をかけられる。

「無理に急いで粗が出れば詰みです、なので時間はかけます。色々と
不安もあります、少しずつ勝てる戦にしましょう」

勝てない戦いではない、ただ一手のミスで負け戦になりかねない。

時間はないが、ギリギリまで時間を有効的に扱う、それが成達の選
んだ戦いである。

「ところで、一つ気になっていたんだが」

ふと、エトは問いかける。

その雰囲気から作についてのことはなさそうだが、成はなんでしようか？と珍しそうに顔を見る。

「君は全てを為した後、どうするんだい？」

為した後、これは今の争いそのものの事だろう。

グールと人の諍いのない世界、それがやって来た時に何をするのかと。

「これ今話すの死亡フラグって奴になりませんか？」

ただこれを作家が言う縁起が悪そうだ。

終わった後どころか明日も生きている保証もない、そんな事を考える余裕は今までなかった。

「良いじゃないか、フラグはへし折る物だろ？」

ただ、成は少し考えてみるが思い返しても何も思い浮かばない。

そもそも彼にとって明日も生きれるかどうかすら怪しい立場でもあったからだ、その日を生きるのに知恵を絞っていた事もありそんな先のことまで頭を回した事はなかった。

「……転職できる身でもないですし、この手の仕事を続けていそうですわね」

中学卒業どころか中学中退という学歴に、捜査官以外の仕事の経験はない。

成がどう考えようと、堅実にこのまま生きていくなら捜査官かそれに類する者にしかなれない。

しかし、エトが聞いているのはそれではない。

「そうじゃなくてさ、君はどうしたいんだい？」

どうありたいかを、聞いたのだ。

「私が、どうしたいか……」

少しだけ、さつきよりも長く成は考え込む。

人の根幹は揺るがない、成もそうでありその考え方は変わらない。だからこそ、それを言葉に纏めようとしているが少しだけ難しい。

自分の求める答えを言語化するのには、形のないものに形を作る行為だからだ。

「……幸せに生きたい、ですかね」

だからか、成の考えた答えは抽象的なものとなった。だがそれがしつくりきたのか、それで満足している。

「良いじゃないか、それを忘れずにいるといい」

人は幸せになる為に生まれてくる、グールは奪い合うように出来ている。

どう生きても、グールは不幸を振り撒く装置なのだ。

そんなグールの当たり前を、変える為に戦うことを決めたのが有馬貴将やエトだ。

「生きるのに意味を持つてるのかそうじゃないかで、人の強さは違うからね」

そして、そんな彼だからこそ有馬に選ばれたのである。

ラボ襲撃編

17話

オツガイを用いたCCGの攻勢により、グールの大半が東京から姿を消した。

めぼしい地上での戦闘も、一ヶ月前に起こったRN特別指定犯の捕縛作戦以ない。

着実に、少しずつ、グールを追い詰めている。

くだんの指定犯達の住処、その痕跡も既に見つけている。

こちらも時間の問題だ、ゆえにいつかどこかで黒山羊や彼等は動く確信が旧多にはあった。

「ラボより入電！現在攻撃を受けているそうです！」

平日の真昼間、指令部にその伝令は届いた。

「数は？」

「確認出来ていませんが、少数とのこと。既に警備兵は壊滅したとのこと」

冷静に問いかける局長としての旧多、だが予期していた事もあり心も冷静だ。

「少数……忘れ物を取りに来たとは思えないし、来るなら白虎か」

2ヶ月前、RC抑制剤と亜門鋼太郎の奪取に黒山羊の数名が乗り込んできた事があった。薬の用途は不明であるが、余裕を持って退散したことから目的は達したと予想される。

故にこの襲撃はそれとは別の意味を持つ。

「ただ目的がなーんも分からないなあ、いや何を取りに来てるのかは分かるけど」

しかし、その目的らしき物はラボに侵入した時点で看破している。

「あの薬、副作用もまあまあ大きいしそもそも白虎の彼ぐらいしか使う必要もないし、使うのは愚策でしょ。今取るのは無意味に近いんです」

つい数週間前、流島の調査中の捜査官ぎ正体不明の存在に攻撃を受

け船舶がいくつか沈められる事件があった。

直ぐに援軍を送ったが、到着時には退散済みでありその意図や目的は不明であった。

しかしそれが白虎達によって行われたのなら、流島から持ち出された薬が目的なのは明らかだ。

しかし、それがわかったからと言ってそれを何故求めるのかが読めない。

「(そもそもこの状況全てが布石で、目的はピエロみたいに防衛を散らす事？それとも意図返し？それだけなら流石に浅はかだしなあ)」

だがここまで旧多からしてみればわかりやすい策を講じるのか、意図がわからない。

困にして本来の目的が別にある、ならば別働隊が居てもおかしくないのだがその様子もない。

「成ですね」

入電から間もなく、伊丙がやって来ると確信を持って答える。

「まだ首謀者は分かっていますか？」

局長は一人が呟くも、それに対して彼女は首を振る。

「クインケを治しに行くにはちよつと大胆過ぎですし、そんな感じの誘い方じゃないんで……多分ですけど、私が誘われてますね」

彼と最も付き合ひの長い捜査官は彼女だ、何かを感じ取っているのかもしれない。

そもそも彼女の言う通り、クインケは使い物にならなくしている。流島で強奪されたという情報もなく、補充がされているとは思えない。

そのような施設があれば、多少なりとも勘づける。

それはグールとして情報を握るピエロであり、局長としては実権を握る旧多ならば可能だ。

「クインケは新しいのでも準備してるんですよ、で今度は殺しに来るつもりって感じでしょうか」

だが、伊丙の読み自体は悪くない。

少なくとも何かしらの備えをしている、それが心の備えということ

もあるだろう。

「まあ、準備してたのが向こうだけと思ってるのが癪に障りますけど」
だが、備えていたのは彼等だけではない。

「行つてきて良いですよね、局長」

「ええ、任せますよ。伊丙上等は先行して彼等の殲滅を、S2班は取りこぼしの出ないように包囲網を張ってください」

オツガイの小隊を抱え、彼女は先に行く。

たなびかせた白髪、歩くだけで漂う風格、そのどれもが最強の捜査官を想起させる。

新たな黒い0番隊を率いて、死神部隊が向かっていった。

☆

地上で転機を迎えようとしている頃、その一報は地下にいる黒山羊の方にも届いていた。

「成さんから、手紙ですか」

「ああ、地上の監視隊伝いで準備していたようだ」

平子は渡された手紙をそのまま金木へ渡す。

久方ぶりの連絡だ、そもそも生存しているかどうか不明な状態であったのでまずは生きている事にほっとする。

「まさか、成までこつち側とは思ひもしなかったぞ」

その様子を見て、真戸暁も大きく溜息を吐く。

彼女は滝澤、今はグールのオウルを庇った影響で捜査官ではなくなり、生死を彷徨っていたが、金木達が奪取したRc抑制剤のおかげで普段通りの生活を送れるまで回復している。

「あいつがいつまでも一等捜査官にいた理由がよく分かる、ただあそこまで周りを寄り付かせないのも演技だったとはな」

暁にとって成は父の教えを受けた一人であり、20区での梟戦後では数少ない精神的な支えにもなっていた捜査官でもある。

それが、まさかグールとの架け橋になろうとしていたとは全く気づかなかった。

それだけ、この時に全てをかけていたのだろう。

「いや、あれは素からだな」

「……今度、少し優しくしてやるか」

ただ少しも己を見せていないわけでもないようなので、信用は多少なりともあつたのだと暁は前向きに捉える事にした。

他意はない。

「内容は？」

「見た方が早い」

話を戻し、金木は受け取った手紙を開く。

長つたらしい文はなく、簡潔に内容は纏めているようだが、金木の表情は少しばかり困惑が混じっている。

「……成さんって、こんなやんちゃする人でしたっけ？」

「案外、今までのフラストレーションが溜まっているのかもな」

先に目を通してしている平子は軽く受け流す、それを聞いて暁も「見せてくれ」といい覗き込むが、思わず目を見開く。

「犯罪者どころか、これじゃテロリストですね」

「あの馬鹿は、とことんやらかすつもりか……」

捜査官に戻る気ないだろと暁は呟き、金木もそれに対して苦笑いで答える。

どうやらもうやらかした事も書いてあるようだが、これからやらかす事を見るに「この人やっぱり有馬さんの部下だなあ」と金木は察する。

「あいつの選んだ事だ、任せれば良い」

座して吉報を待てとは言いが、平子のそれはあまりに様になっていたのであつた。

18話

3月j日

深夜の流島へ上陸した。

陽動役である私はCCGの船舶をいくつか破壊、多数の捜査官が現れたが全員倒した。

本島からの増援が来るには時間がかかるのでそれまでにエトさんへ夙成の回収をお願いしたが、既に持ち去られた後だったらしい。

元から管理も面倒というのもあり受け取らなかったが、今更必要になると貰ったけばよかったと勝手に後悔している。

流島は船で脱出に成功、今後の策を練りたいと思う。

3月k日

CCGの研究所、金木達が侵入した影響で警備が固くなっている。指紋認証の他に虹彩認証、それにそれなりの数の警備が置いてある。

ただの兵ではない、Vが警邏を行なっている。

ただここまで警戒しているという事は、それだけ大切なものがあるとも言える。

少しばかり策を練らねばならないだろう。

4月l日

明日、決行

☆

「思ったより荒れてますねー」

ラボに付いて出た一言目に、そう伊丙が口にする程ラボは至る所に破壊の跡がある。

目に見える監視カメラは全て破壊され、恐らく彼女達が来るまでにあらかた破壊を済ませているのだろう。

「……地下か、行きますよ」

だが、下から誘っているのか血の匂いがする。

この程度の相手に不覚をとる相手ではない、わざと傷でも付けたのか前もって準備したのか、その匂いが誘いなのは明らかだ。

だが、伊丙はそんなことは承知で向かう。
オツガイもまた、彼女について行く。

道中に気を失った警備兵、もといVもいたが特に気にせず進んでいくと。

「……久しぶりだな、伊丙」

そこにはもはや見慣れた存在、成がいる。

ただ手にあるクインケは見慣れないものがある、かなり大物の太刀と短刀が片手で4本持っている。

「殺される覚悟はできましたか？」

「できるわけではないでしょ」

変則的な五刀流、ナイフを大量に扱う捜査官はいるが短刀はナイフよりも大きいものだ。

扱い方を知る人どころか扱える人間すら居なさそうな武器構成に、彼女からは思わず笑みが溢れる。

「新しいクインケですかー、じゃあ私もお披露目ですね」

向こうが曲芸的な何かを行おうと、それを根本から破壊する。

そうぎらつかせた双眸はあえてまだ赤くない、代わりに彼女の新たな相棒が展開される。

漆黒の長槍、それには成は見覚えがある。

「IXAですか」

「欲しかったんですよ、ずつーと。試し斬り、良いですよね？」

有馬貴将の使用した武器の一つ、S+レート甲赫のクインケだ。

盾としての機能のほかに、地面を這わせた触手で貫くといったギミックまで搭載した万能のクインケだ。

過去には当時SSレートの金木研を圧倒した武器でもある。

「自由に動いて良いですよ、ただ殺すのは私です」

だが今回は彼女だけではない。

周りにいるのはオツガイの中でもとりわけ、指示を聞く程度の制御のできる物が集まっている。

つまり、連携を行えるオツガイだ。

それぞれが赫子を展開し、Sレート以上の暴力が振るわれるのは間

違いない。

しかし、その様子を見ても成に動揺はない。

すべて想定内といった様子だ。

「今回は、加減しませんから」

その上で、クインケを構えた。

「その減らず口、閉じるまで遊んであげますよ」

あえて伊丙は赫子を使わずに突っ込んだ、そうすればすぐに決着がつき面白くないと考えたからだろう。

この前と違い6人もオツガイがいる、それと戦うのすら辛いものになる。

実力的には拮抗していたからこそ、伊丙のその推測は間違っていない。

「……この前より動けてますね、ドーピングでもしましたか？」

だが瞬間、2人のオツガイが赫包を破壊された。

別に大きな隙があったわけではない、単純な事であるが前よりも動きが速いのだ。

以前の戦闘は映像としてデータがある、それを前もって頭の中にいられたからこそオツガイ達は虚をつかれたといった様子だ。

「まあ、そんな所ですね」

赫包を破壊した成だが、そのまま立ち上がろうとした2人の手を切り落とした上で気絶させる。

オツガイは並のグールの回復力すら超える生物だ、腕の欠損程度は後で修復できると知っての行動だろう。

「……殺さないなんて、甘すぎませんか？外の警備も全員生きてましたし、よく有馬さんのパートナーなんてできてましたね」

だからこそ、変わらないその姿勢が気に食わない。

外にいたのはV、つまり成熟した0番隊のような存在でありそれを全滅させただけで満足していないのも腹立たしい。

「あの命まで背負いたくないからですよ」

「……甘ったるいなあ」

Vがどのような集団かはわかってしている様子だ、しかしそれでも命を

奪わないというやり方に嫌気がさしてくる。

「まあ背負うとか意味わかりませんし、どうで良いですけど」

そう言うとな彼女はT—h u m a nも解放する。

同時にその瞳は今度こそ赤黒く変色して行く。

今度は少し本気を見せる、周りのオツガイにもそう喚起するとまた刃を向ける。

決着まで、あと25分。

☆

「ラボには一度、クインケの改修で行ったことあるので内部構造は分かっています」

ラボの簡単な地図を地面に描く成、それなりの広さのある敷地の図解であるが要点は抑えられているように話は通しやすそうだ。

と言ってもエトも全く知らない場所ではない、知識としては彼女も頭の中にある。

「地下にクインケの試運転ができる部屋があるので、ここへ伊丙を呼び込みます。かなり広いですし、邪魔も入り辛いでしよう」

「時間は？」

「長くて30分、それ以上はデッドラインです」

成は大勢の捜査官に囲まれたが、あの時逃げれたのは運の要素以外に草薙の存在が大きい。

地形を変え、斜線を切り、数の不利を緩和できたからだ。

だが、今はそのクインケが破壊されている。

グールとしてならば逃走は可能だが、人間として同じ状況になれば今度こそお縄につく。

「なので私は周りの制圧と監視施設の破壊を優先します。こっちは10分で蹴りをつけるので、エトさんは薬の奪取を」

オツガイを率いる彼女達の移動速度は地形を無視しているので車よりも早い、その気になれば10分もかからないだろう。

そして普通の捜査官は到着に20分、包囲網の構築に5分かかると成は推測している。

そこからラボへ無理に攻め込む必要はないが、体制の整った捜査官

達と戦うのは非常に厳しいものとなるだろう。

ただこのデッドラインはあくまでも、伊丙との戦闘時間である。

「後、今回に関してはグールとしての力を存分に使ってください」

「何か心境の変化でもあったかい？」

「そうではないですよ、今回で目に見える共闘を演じます」

グールを守る為に戦う人間は出来た、後はグールと共に戦う人間の姿を見せれば成遼太郎の本気度が分かる。

だがこれ以外にも一計、講じるつもりではあるようだ。

「なので、包囲に来る部隊……S2かS3だとは思いますが、それも利用します。その時のために、赫子は温存しておいてくださいね」

19話

戦闘開始から15分、成遼太郎は以前と違い肩で息をする程に疲弊している。

そしてこれも前回と異なるが、手傷が多い。

手足の欠損といったものはないが、身体中に擦り傷ができています。それもそのハズだ、前回と違い戦っている数と質が異なる。

特にSSにも匹敵する存在達が4人も増えているのが原因だろう。

「……流石に、殺さずに戦うのは無茶したか」

そしてそれらは、今しが倒し終えた。

「その、動きはなんですか」

残るは伊丙入、ただ1人だけだ。

「有馬さんの猿真似ばかりして、こっちの癩に触ることばかり……その癩、勝った気ている」

「猿真似もなにも、有馬さんから教わった動きですよ」

むしろ真似し続けてきたのは彼女の方だ、手に持つクインケもまたその現れである。

手駒を壊滅させた成遼太郎という人間は有馬の意志は知らないが、有馬の力は間違いない受け継いでいる。

だからこそ、それを仕留める事しか頭がない。

「……もういいか、遊ぶのは」

それ以外を、彼女は削ぎ落としてきたのだから。

「ここまでやる気はなかったんですよ、やる必要もないと思ってましたし」

彼女はそう言うと、首元に手を当てる。すぐに後にカチリとボタンを押した様な音が聞こえると、全身を黒い鎧が覆い出す。

「……そんな物まで準備してたんですか」

今の今まで成が戦いを成り立たせていたのは、捜査官として対応できるギリギリの動きの範囲に伊丙はいたからだ。

ドーピングらしきものも、人として枠組みを超えるほどではなく精々庭の人間程度の身体能力をもたらしたものだ。

これから襲い掛かる、暴力には劣る。

「女王って名前が付いてるんです、私にピッタリでしょ？」
アラタQueen、特等のような特別な人間のみに与えられる鎧型のクインケだ。

SSレート甲赫の赫者の赫包が使われているそれは、並のクインケとは一線を画す性能を有している。

そしてこのQueenは彼女専用にかスタマイズされた特別性であり、このような仕様のアラタはJokerを持つ鈴屋特等だけだ。ここまで彼女を引き出した彼の実力は有馬とまではいれないが、それなりに名を残せる捜査官にはなれただろう。

だが劣化しているとは言え、もう死んだ死神の動きを見続けるのは彼女の精神に不快感を溢れさせる。

「そつちがそうさせたんです、後悔してください」

グールの枠組みすら飛び越えた一撃は、容易に成の片腕をクインケごと吹き飛ばした。

☆

「成、手加減をしているのか？」

ある日の稽古中、有馬は成へクインケを向けていた。

成は同様に赫子を構えている、つまりグールとしての稽古の真つ最中での問いかけだった。

この問いかけをしている有馬は当然、無傷だ。

対して成は身体中に裂傷を抱えており、どちらが押されているのかは明らかなのだが、その状況に至るのを有馬は看破していた。

「……私はグールと同じ体質です、欠損した部位の再生はできませんがある程度の傷は治ります。ですが、有馬さんは……」

少しの静寂の後、余計な言い訳は意味を持たないと考えた成はそのまま訳を話して行く。

成は半喰種だ、その再生力は人を食べていないのでエトほどでは無いが並以上にはある。

「お前は、俺に傷をつけるのを恐れているのか」

「万が一っていうのは、だれにでもあるじゃないですか」

対して、有馬の回復力はただの人間並だ。

失えば戻らない、そして計画の主軸でもある有馬が関係のないところで傷を負わせるのを恐れてしまったのだ。

全盛期の有馬ならばそんな必要はない、しかし今は殆ど失明し片目だけでぼんやりとしか実像を捉えられない彼の領域に、手が届くのだ。

「……捜査官としてのお前は、既に鼻に不覚を取らない程度の力がある」

有馬貴将という捜査官は天才の中の天才であるが、成遼太郎という半喰種もまた奇跡の存在の中にある天才なのだ。

天才が老いれば、届かない道理はなかった。

「ただ、ここ以外でグールの力は出来る限り使うな」

だがその上で、有馬は成へ枷を与える。

いや、枷というよりは戒めというべきか、その訳を話し始める。

「力には代償がある、俺もその例に漏れない」

有馬は絶対的な人間の枠を超えた力を持つが、その代償として寿命が短い。

その寿命も戦いに明け暮れていれば消耗していく、もはやその命は数年保たないだろう。

そして成もまた奇跡的な生まれとはいえ、親は有馬と同様の存在である。

具体的な仕組みをエトから聞き及んでいるが、それとてどの様な作用があるのかは誰も想像がつかない。

「その力は、時と場を選べ」

有馬貴将は切り札を準備していた。

隻眼の王もその一つであるが、彼もまたその札の一つである。

「了解しました、有馬さん」

明かされる時は、それこそ命を賭す時のみである。

☆

「……なんですか、それ」

腕を吹き飛ばした。

成もまったく対応できない速度で、その片腕を切り落としたのだ。だが、成の表情に苦痛の表情はあれど絶望の色はない。

宙に舞った腕を残った腕で掴み取る余裕まである、その様子は明らかに異質だ。

「切り口が綺麗だと治るとか思ってますか？そんな都合の良い事ありませんよ？」

しかし、そんな彼女の反応に何も答えない。

「伊丙、お前は何の為に戦っている」

更に無視し、問いかけてくる。

その様子を見て彼女の額に青筋が通るが、それはアラタで成には見えない。

代わりに、怒気のこもった声で響かせる。

「何の為に？何の為にでもありませんよ、どうせもう直ぐに死ぬ命ですから、有馬さんに話す冥土の土産ぐらいは準備しないと」

「……どうりで、目が死んでいるわけだ」

彼女の眼は憎悪に燃えている、しかしその炎の先には何も無い。真つ暗な虚無を映している、生きる意味をそこにしか持たないのだ。

死神の瞳があるならば、こんな世界を映しているのかもしれない。

「宇井さんでも、救えなかったのがよくわかる」

成の頭には何度も足繁く彼女の病室へ通う宇井の姿が映る。

その度に疲弊した顔つきになり、何度も無力感を感じながらも通い続けた彼の姿が頭に残り続けている。

伊丙入と最も時間を過ごした捜査官は成遼太郎なのかもしれない、だがもつとも関わってきたのは宇井郡である。

彼にできないならば、誰がこの呪縛から解き放てるというのか。

「もう一回……覚悟を決めるか」

だが、その無謀をやる為に彼はここに来たのだ。

「何をして……はっ」

成は切断された腕の断面同士を擦り当てる。

何をとち狂ったのかと伊丙は見るが、その傷口の違和感に言葉が止まる。

「切断されたのは初めてで不安だったが……いけたな」

切断された腕は何ごともなかったかの様に、元に戻った。

もはや服の切り傷でしかその痕跡は確認できない。

そして、こんな事が人間に出来るはずがない。

そんなことができる生物はグールだけだ、そして伊丙は前回と比べ動きの変わった原因も見破る。

「ドーピングってそれですか、雑魚らしく知恵は絞ったみたいですけど」

明らかに人としての動きを超えていた、つまりグールの力を使ったと言うこである。

その片目は赤黒く染まっており、混ざり者であることの何よりの証拠だ。

先程まではRc値の赫眼を発言しない程度のギリギリを出し切っていた故の実力だったのだ、それがドーピングの正体である。

どうやったのかは知らないが、この時のために準備をしていたのがその施術を行う為だったのかと、同じ土俵上がろうとしたのだと彼女は結論づけているが。

「私のこれは、生まれつきだ」

それを見破ったように成は答える。

「自覚はなかったが」と一言付け加えるが、その言葉は彼女には届かない。

なにせ8年以上の付き合いをしてきたのだ、グールという可能性の片鱗すら感じられていなかったのだ。

「(はやっ……!!)」

瞬間、成の尾赫が地面を叩く。その反動を利用し、移動速度を飛躍的に上げている。

その勢いのままクインケごと尾赫を叩きつけ吹き飛ばす。

「……お前はやっぱり天才だ。たった数ヶ月でそこまで赫子を使いこなせたグールを、私は見たことがない」

しかしその攻撃はアラタと赫子によって対応される。

アラタは攻撃力や耐久性に優れた鎧であるが、人間としての枠を超

える要因として最も大きいのは機動力の上昇だ。

人を超えた動きを行える鎧だ、それを元から人を超えた存在が使えるばもう一つ上の段階へ昇華する。

また彼女の使う熾赫も防御力こそ低いが再生力は高い、それを多重の盾にされれば衝撃もやわらぐ。

「ただ年季の差だが、赫子の扱い方は私の方が上手だ」

だが、それでも無傷ではない。

いや傷はすぐに治るが、彼女の精神的なダメージは計り知れない。ただショックを受けているというよりは、戸惑いの方が大きい。

「何で今まで使わなかったんですか」

「これを見られると、色々と不都合があるからな」

猫の尻尾を棍棒の様に太くした尾赫、いくつかの赫子を束ねているのだろう、強靭さがある。

しなやかさが売りの尾赫を最大限移動に利用するのに適した形だろう、その破壊力も身をもって経験したばかりだ。

「……馬鹿にして、ますね」

だが、それらを全て感じ取った上で彼女の肩が震え出す。

「それだけ力があれば有馬さんを助けられたはずでしょ？私だってこんな姿にならなかつた、琲世ぐらいなら倒せたんじゃないんですか？そんな身勝手な理由で、私達を見捨てたんですか？」

これだけ力があれば、何でも好きな様にできただろう。

隻眼の梟を殺す事も、有馬貴将に並ぶ事も、不可能ではない。

隠し通す事を優先し、救わなかつた屍が築かれている。

それを全て許容している事が、彼女には理解できない。

「貴方は、どんな手を使ってでも助けなかつた。それが、例えば有馬さんでも」

そしてその許容の範囲が、己以外の全てに当てはめられている事に。

「許されると思いますか？あの人は誰よりも働いてきた。その最後をあんな形で終わらせて、あまつさえ殺した琲世の方に寝返った!!」

彼女からしてみれば、見殺しにしたも同然だ。

冒流しているようにしか見えない、今のCCGの人間からすればその意見がほとんどである。

少なからず世話になっていたはずのCCGの恩義を忘れグールについた、その事実から導かれる答えなぞ似通ったものになるのだから当然だ。

裏切り者、というのが最もふさわしい答えだろう。

真意と言うのは関係ない『人がどうなのか』ではなく『人がどう見えるか』が大衆の意見となる。

そしてその扇動者は、それを利用したに過ぎない。

そんな結果は誰の目にも見えていた、恐らく成の目にも見えていただろう。

そして最も影響を受けた少女は、もはや人ですら無くなった。

「誰よりも働いた死神を殺した貴様らを、私は絶対に許さない！」
瞬間、彼女の赫子に異変が起こる。

アラタの上に更にまわりついて行くのだ、それは全身に及んでいく。

「奪わせろ、私に……お前の全てを」

伊丙はオツガイだ、人の食事で過ごしてきたかと言えば答えはノーである。

彼女は全てを成す為に、己すら犠牲にした。

だからこそ、施術も受けグールの肉も喰らった。

成遼太郎は救える命を手にする為に、手段を選んできた捜査官だ。それは後先を考え、最悪のパターンだけは踏まない事を意識してきた。

エトを助けはしたが有馬の命に対して傍観者に徹したのも、それが理由だ。

対して伊丙入は、手段を選ぶ必要も意味もなくなった。彼女の存在意義はVの駒だ、しかしその中でも有馬貴将という存在があったからこそ彼女は駒として動き続けてきた。

だがその意味は一度無くなり、その後に致命的な者も亡くなった。有馬が彼女を消すという考えをしたのもこういった考えが存在し

たのかもしれない。

そして、全てを削ぎ落とした。

後先を考えずに、目の前にある自身のやるべき事の為だけに今を生きている。

それ以外は全て復讐への薪にしているのだ、故に自分の尊厳や命すら勘定から外し、最恐の捜査官へと昇華した。

「どうなってもしりませんから、ぎょこなり?」

それが今の彼女、白日庭の赫者 伊丙入である。

「……流石に厳しいな」

成とて赫者との戦闘経験がないわけではない、何度も梟と試合をしている。だがだからこそ分かる、彼女はエトよりも恐ろしい存在である。

「まだですか、エトさん」

決着まで、残り10分を切っていた。

20話

鎖骨、大振りの太刀であるそのクインケはSSレートの尾赫が使われている。

しかしそのギミックはIXAのように盾を張ることも、タルヒのようにならなくてもない。

刀の背についたブーストギミック、それが鎖骨についたギミックだ。背骨のように配置されたそれを見れば、フエグチに少し似ているかもしれない。

事実、フエグチのような伸縮も可能ではある。

だが特筆すべきその火力の高さはIXAを上回る、扱えるかどうかは本人の技量次第ではあるが高火力なクインケだ。

その破壊力は甲赫であっても簡単に破壊できる、それだけの出力がある。

瞬間的な移動、斬撃の重さの増加、このクインケを扱うには振り回されない事が重要となる。

そしてそれを的確に扱える成は、伊丙にもそれを行うが。

「届く訳ないでしょ」

表層を剥ぎ取る程度に収まっており、火力不足であった。

いや赫子部分は破壊できる、ただアラタが硬いのだ。

それゆえに火力でのゴリ押しという戦法は取れていない。

「また曲芸ですか、もう飽きましたけど」

対して片手で扱う4本の短刀、砂塵はかなり特殊なギミックを有している。

「そんな半端な技で、私に勝てると思ってたんですか？」

名の通り、砂塵のように刀身が散るのだ。故に持続力は低いのであるが羽赫のような攻撃ギミックを有したクインケとなっている。

今の大和が修理中の成には数少ない中距離での戦闘を可能とする武器だ、投擲する事も可能である。

それを赫子と併用しながら、赫子そのもので扱ったりと器用な戦い

方を繰り広げる。

その連撃は彼女の赫子を散らしていく、並のグールどころかSレール程度ならば対応すら出来ずに瞬殺されているだろう。

しかし、致命的なダメージには程遠い。

「どうしました、まだ始まったばかりですよ」

成の尾赫と伊丙の燐赫がぶつかり合う、巨大な質量の衝突という事もあり両者に衝撃が走るが、伊丙は踏ん張り成は逆に吹き飛ばされる。

「凄いですねー。色々出来て。だけどそんな色々しただけで勝てると思ってたんなら甘い見通しでしたね」

手先の器用さは完全に伊丙よりも上手だ、しかし手数が多いだけでは単純な力の塊である今の彼女には勝てない。

成がどのような手を使ってこようと潰す、その上で圧倒するという覚悟が彼女にはある。

だがそんな時に、部屋の中に別の気配が入ってくる。

「まさか赫者にまで至っているとはな」

一定の距離を保つ2人を見守るように、天井にあるダクトに腰掛ける少女がいる。

「……遅いじゃないですか」

エトだ、成の方が押されているのだがそれを見ても焦りなどは全く感じさせず、むしろ楽しんでる様子だ。

「例の奴だ、探すのに苦労したんだぞ？ 大事に使え」

「どうも」

そう言うと、成の方へ何かを投げ渡す。

手のひらに収まる程度の筒状の何かだ、それを成は受け取るとほっとしたような表情を見せる。

「それで、どうするんだい？ 一応聞くが手を貸そうか？」

上から観客に徹する様子のエト、手にはVから剥ぎ取ったのか肉を食べている。

さながら映画でも見にきているような様子だ、完全に戦闘モードはオフである。

「私は2人係でも構いませんよ?」

伊丙はエトが隻眼の梟である事は知っている、それでも余裕がある。今の彼女は最盛期に届くとは言わないが、有馬貴将の領域に半歩程度とは言え踏み込んでいる存在だ。

死ぬ直前の有馬よりは間違いなく、強い。

「赫者になるのもアラタを持つてきたのも予想外ではありますが、大丈夫です。予定通り……彼女は、私が倒します」

成はそう言うと、甲赫を顕現させる。

巨大な爪のように先が分かれたもので、その尻尾も合わせれば隻眼の白虎と言われても相応しいだろう。

ちなみに彼が白虎と称されたのはその動きがネコ科の猛獣に見えることからであるが、今はある程度グールな人間らしい動きの方が多い。

そしてその赫子であるが、二つとも合わさっていく。

「なのでエトさん、万が一の時はお願いします」

「そんなことは起きないと思うが、了解したよ」

そして腕と足、背中にそれが纏わっていく。

アラタに似た鎧の様な部分が多いのだが、白い尾赫と合わさった影響で縞模様に見える。

そして顔には隻眼の方だけ牙に挟まれたような面が付く。

赫子の形はイメージである、彼がこの姿を明確に意識出来たのは命名された影響も多少あるだろう。

「君の赫者は久しぶりに見るね」

人間としての形に収めた赫者、そのような姿で成は顕現する。

しかし、その様子を見ても伊丙の様子に焦りはない。

「まさか……その半端な姿で、私とやり合うつもりですか?」

伊丙は完全な赫者だ、全身を覆い尽くす赫子の量は成のそれを上回っている。

それに彼女自身、アラタを纏っている。どこから見ても彼女の優位は揺らいでいるように見えないのは確かなのだ。

「旧田のピエロ。忠告するが、気を抜かない方がいいぞ」

しかし、そんな様子を見かねてかエトは伊丙に言う。

「私の知る限り、こいつより厄介な存在は最盛期の有馬以外に会った事はない」

次の瞬間、成の鎖骨が伊丙の身体を吹き飛ばすのであった。

☆

成が赫者となつてから5分、決着は付いた。

部屋のあちこちにはその戦闘の痕跡がビッシリとついている。

ここだけ爆撃でもあったかのような惨状だ、そしてその中央ではロボロの姿で赫者状態を解く成の姿がある。

その前には地面にへたり込む伊丙の姿も。

「ずるいでしょ、色々」

絞り出すように答える彼女の体はロボロボだ。

アラタは完全に破壊し、赫子も出す事もできない。

折れたIXAを握るのみであり、もはや抵抗の意思すらない。

「……私の負け、ですよ」

全てを認め、彼女は生気を失った様子で呟く。

「どうせ30まで生きられません、残りの命を無為に生きるれるとも思えませんし……殺してください」

そして最後に、彼女は死を望んだ。

もう自身に課した使命の達成は不可能であるとわかってしまったからだろう。

それだけ圧倒的な差で彼女は負けた、殺す気で戦い全ての準備を整えた上で負けた、もはや言い訳の余地もない。

そんな彼女に、成は電池切れとなった砂塵を床に放ると彼女の合わせでこない目を見ながら語りかける。

「私はお前の言う通り、有馬さんを見殺しにした。お前も……そうするつもりだった」

成は言葉を選ぶように、ゆっくりと話しかける。

先程までの戦闘よりも緊張をした様子だ、彼女も感じたことのない様子であるが、そんな事で一喜一憂できるような状態でもない。

ならその予定通りに殺してくれと、そう彼女は願う。

「ただお前には、生きていて欲しい」

だが、成はその選択を選ばない。

「……どの口が言うんですか」

あくまでも生かす、殺さない。

その理由が彼女には分からない、彼女自身が殺されてもおかしくないののだ。

オツガイになりグールを大量に殺し、喰らった。

グールとの和平を望む彼等からすればもつとも消したい存在であり、生かす方が不都合が多い筈だ。

「それで、この残り少ない命をどう生きろつて言うんですか？そつちの我儘に巻き込まないでください」

それは身勝手な行動でしかない。

「……お前のやってきた事は、捜査官として間違つてはいなかった。むしろ間違つていたのは私の方だ、だからそこは気にしない。命に点数をつけたやり方は嫌いだ、お前自身を否定はできない」

グールを殺した事を、彼は気にしない。

それは彼自身も殺してきたからというのもあるが、彼女の存在証明は殺す事であったことを察しての言葉だろう。

だからこそ、彼が求めているのはそれとは違う答えだ。

「ただ……私は、お前にVやグールなんかを考えないで自分を見つめ直して欲しい」

捜査官やオツガイ、Vではなく伊丙入として、自分の事を考えて欲しいのだ。

彼女はグールにとっては災厄でしかなかったかもしれないが、彼女は被害者である。

操られ、従い、殺してきただけの人生だ。それに縛られないで、生きて欲しいと言ったのだ。

「それがお節介なんだよ!!」

だが、そんな言葉では彼女には響かない。

「さっさと殺してよ！中途半端な覚悟で戦われても、苦痛でしかないんですよ!!」

折れたIXAで彼女は襲い掛かる、反射的に殺して欲しいという期

待を込めて差し穿ってくる。

「私を……楽にさせてよ」

だが、それを避けずに成は受ける。

殺す気のない攻撃というのが分かつているのもあるが、もはや彼女は自身の傷すら治せないほど疲弊しているのも分かつていたからだろう。

嗚咽を漏らし始めた彼女には、救いが無い。

だが、成や宇井では彼女を助ける事は出来ても救う事はできない。

己を救えるのは真なる意味では自分しかない、己を見捨てようとする彼女に成はそのまま語りかける。

「私もお前も……苦しんで、生きるしかないんだよ」

人生とは思いつりにはいかなない。自分をぶらさない事はできても、自分の道は選べるわけではない。

2人は共に、他者によって定められた道を行ってきた捜査官だ。

その道で苦しんでも変わらなかったのが成であり、苦しまないように変わったのが伊丙である。

どちらの選択も間違いではなく、正解でもない。

相反したようで似た者同士なのだ、だからこそ成は彼女に求めて欲しいのだろう。

「ちよつと、頭冷やせ」

そう言うと、成は彼女の首にある傷口へエトから受け取った薬を打ち込むのであった。

21話

「前話した薬って、今の私に打てばどうなるんですかね」

普段の稽古中、といっても稽古ぐらいしか付き合いのない成はエトに聞いた。

それは協定を結ぶ為に望んだ対価のことだろう、すでに出来上がっているという報告は受けているがその詳細については成は知り得ていない。

「無反応だよ、君の体には関係ないからね。使えるのはそもそも庭の半人間ぐらいだよ」

「私も半人間ですが、何か違うんですか？」

成とて条件的には庭の人間と全く同じとまでは言わないが、その血は流れている。

それを聞いたエトは「小難しい話をするが、いいな？」とそのわけを話し始める。

「グールと人間は細胞が異なる、無論性能もだ」

まずは先行知識だ、その程度ならば成も詳しくは知らずとも話は分かる。

グールは人間と異なる存在だからこそ性能が違うのだ、しかし細胞単位での話は成は聞いた事も考えたこともない。

「ここで問題だが、有馬のような人間はどうなってると思う？」

「人じゃないですか、食事的に」

グールと人、どちらかと言われれば人の食事で生きているので人に寄っているのではないかと成は答えるが、それに対してエトは小さくを指を重ねて「ぎーんねん」と答える。

20代後半がやると中々に痛々しいなど成は考えるが、看破されたのか赫子で軽く殴られる。

「……正解は、どっち付かずだ」

仕切り直した彼女の答えは、意地悪であったがそれを聞いて成も納得する。

もし人間の細胞で作られた身体ならば、人間並みの性能で収まるはずだ。彼等のそれは人間を半歩は踏み越えているのだから、言われてみれば確かである。

「どっちもある私とは違う、テロメアとか言っても分からんと思うが彼等はそのも完全な生命体として成り立てていない。だから彼等の寿命は短い」

不完全で中途半端な存在ゆえに、そのノイズは大きい。急激な老化もその一つであり、20代の中盤から一気に彼等の老化は進行する。エトはどちらの細胞も持っているだけで、どちらでもない細胞があるわけではない。

だが人肉を食らわねばならないという制約のある、ほぼグール側の存在だ。

「なら、私もエトさんと同じなんですか？」

「いや、君は例外だ」

しかし、成遼太郎という存在は根本から違う。

「人とグール、どっちにもなれるんだよ」

その答えに意味が分からず、成は何を言っているんだと頭を傾げる。

「言っただろ、奇跡の存在だと。君が検体だったから『夙成』なんて代物は作れたんだよ、だから寿命の問題なんて存在しない」

成の細胞は人とグールのどちらにでも変異出来る、しかしその体質だけならば宝の持ち腐れである。

彼はその変異を完全にコントロールする、いわば和修の望む完成された人間とも言える。

それゆえに、和修ですら完成の兆しすら見えなかった薬を開発している。

夙成とは分かりやすく言えば、早熟という意味である。

早くに熟し、朽ち果てる。それを防ぐ為に開発された薬である為、その名が付いた。

また早熟の方が分かりやすいとは感じると思うが、検体の苗字を取って名付けられてもいる。

「それで、薬はどんな仕組みなんですか？」

だが、その性能については成もよく分かっていない。

貰えるなら貰つとくが心情の彼でも、得体の知れないものは流石に受け取りたくはないのだ。

「どっち付かずの細胞を、無理矢理ではあるが人間にする。半人間特有の戦闘力は失うが、その寿命はある程度ヒトに近いものとなる。まあ有馬ほど進行していれば意味はないがな」

副作用は人間になる事、だが戦わないならば関係のない話だ。

そもそも本当に必要のない薬である、親の寿命の短さから頼み込んだ薬ではあったが、今更それがなくとも彼はこの関係を崩す事はないだろう。

「やっぱり要らないですね、持ってても面倒なのでそっちで管理してください」

「後で欲しいと言っても知らんぞ」

「大丈夫だとは思いますがね」

なお後々受け取らずに色々とめんどくさい事になるのを、この時の成は知る由もなかった。

☆

何かを首筋に打ち込まれた、最初それは毒か何かかと伊丙は考えた
がそれは目の前にある成の顔を見て違うと直ぐに気づく。

「な、何を……」

身体に違和感が現れる、力が抜けていくような感覚に陥る。

「時間がないって言ったな。これで婆さんぐらいまでは生きられる、さっきの言い訳は吐けないぞ」

倒れそうになる彼女に肩を貸す、今頃全身を倦怠感が襲っていると察しての行動だ。

「成、私達の方は時間がないぞ」

「分かっています、向こうの配置は？」

「想定通りだ、定石に近い」

「では予定通りに行きましょう」

成はエトに伊丙を渡すと、そのまま落とした小刀を集める。もはや

弾切れではあるが、補充すればまた使えるからだろう。

そしてこちらにも出力が出なくなり、ただの太刀となった鎖骨を持ち3人は外へ向かう。

伊丙に関しては力が出ないので赫子によってエトに運ばれている。

「私を攫つても良い事ありませんよ、余計な敵を増やすだけです」

担がれていく伊丙はなされるがままである、声からもその疲労感も伝わってきている。

彼女は成の赫子を見ているので旧多に会わせるわけにはいかない、しかしそれは連れていくことと同義ではない。

だが、その意思は変わっていない。それはその後の彼女の顛末も想像に難くないからだろう。

「元から人生を縛ってきたVは私達が倒すつもりだ、それでグループとの諍いもなんとかする。それに……お前が居なくなれば、悲しむ人は多い」

旧多の元に完全敗北した形で戻れば、何をされてもおかしくない。事実、Vは彼女を持って余していたので都合良く消す可能性は十分な程にある。

彼女を守れる存在は、もうCCGにはいない。

「だから、死にたいなんて言うな……一応、私だって悲しむ」

「……そうですか」

意外だ、成遼太郎とは良い関係を築いてきたとは言えない。

時間が長いだけで、むしろ関係は悪かった。

ただそれは一方的なだけで、成自身は庭の正体を知ってからは自身と同じ境遇の彼等に対して少なからず自分を重ねていた。

仲間意識というものも芽生える、それだけ残酷を強制された世界なのだから。

「それで？…どうしろって言うんですか、私は戦う事しか知らないんですよ」

細胞の移り変わりやそもそもの戦闘で疲弊もあり、彼女の意識が混濁してくる。

Vを辞めようが、捜査官を辞めようが彼女にはそれ以外に何も学ん

でない。

その人生だ、成も似た様な結論を得ており捜査官に類した世界でしかもう生きられないとは悟っている。

「ゆっくり考えればいいでしょ。分からなくなった時があれば……まあ、責任は取りますよ」

だがそれでも、眠りに入る彼女に答えた。

苦しみながら生きていく、それが彼等なのだ。

22話

☆

S2班の班長を務める瓜江上等捜査官は、ラボの取り囲みを恙無く終えて、様子を見守っている。

クインクスもその場において、指示を待っているようだ。

元は和修特等の班であったがしつかりと統率が取れており、まとめ上げられた捜査官達だ。

「俺たちが到着して10分……伊丙0番隊が突入してからは30分、何の音沙汰もない。流石に斥候を出すべきか」

その捜査官達は、これから現れるであろう敵の取りこぼしを待っている。

少数での潜入という情報は逃げ出した職員から入っており、その殲滅には精銳が送られている。

『全ての捜査官へ向けて、私は言葉を残す事にする』

だが、この放送によってそれは失敗したのだと悟る。

「管制塔からか、狙撃班は位置につけ！」

檄を飛ばす瓜江、皆が管制塔の方へと目を向ける。

「0番隊から連絡は？」

「ありません、音信不通です！」

完全に連絡が取れないことからただの失敗ではなく完敗である事を察する。

伊丙入は最近で最もグールの討伐を行っていた捜査官だ、未来の有馬とも称され信用はあった彼女の敗北には少なからず動揺が走っている。

『私の名は芳村エト、高槻泉と名乗れば誰かは分かるはずだ。君達にはよく、隻眼の梟とも呼ばれている』

また、そのどよめきは更に大きくなる。

「本局へ連絡だ、詳細の確認と応援を要請しろ！」

捜査官達には高槻が捕まった事は知る者は多くとも、彼女が処分されていらない事、そして隻眼の梟であることは知られていないからだ。

しかし隻眼の梟がいるならば、伊丙と0番隊が負けても不思議ではない。

『私はこの歪んだ世界の形に憤りを感じている、故に行動しその過程で多くの命を奪い、失ってきた』

『どうした、なぜ撃たない！』

狙撃班は既に位置についている、しかし放送は止まらない。

好き勝手な放送は嫌でも皆の耳に入ってくる、それが王のビレイグの作者でかつ隻眼の梟の物とあれば尚更だ。

『グールと人、異なる事は多い。しかし私達も命を育み、考え、祈り、生きていく』

『影が見えません、そもそも赫子で窓を塞いでいる様で弾も通らず音響装置の破壊も難しく……』

狙撃班の通信から、すでに手を打たれているのを察する。

高火力な羽赫でもあれば違ったのかもしれないが、そういったクインケというのはそもそも絶対数が少なすぎる。

故に狙撃では対応ができない。

『人の命を奪ってきた私は、人殺しでしかない。だが大義の為にその言葉は受け取ろう、その罰はいずれ受ける』

『電源を落とせ、放送をやめさせろ！』

『非常時の予備電源で稼働してます、外部からの停止は困難です！』

すべて先手を打たれている、恐らく外部的な障害はすべて対応しているのだろう。

だが逆説的に捉えるならば、管制塔に籠城をしていることでもある。

『だからこそ、この関係を終わらせる。命を取り合い、悲劇を生み続けるこの形を、私達は変える』

「林班と川内班、成田班は管制塔の音響装置を破壊しに向かえ。森班と木之内班は本館で0番隊を捜索、残りは管制塔を包囲しつつ周囲を警戒しろ」

今は時間を稼ぐ時である。

隻眼の梟とは最恐の存在であり、まともに対抗できたのは有馬ぐら

いである。

梟を想定しているわけでもないのに、全員が緊張をしているのを感じる。

『私も今のCCGでなければ、隻眼の王と同じく対話を望んだだろう。だが人とグールの両方の命を弄ぶ和修の存在は、野放しにできない』
そしてそれが思う壺である事を、瓜江は察する。

放送は近隣住民にも聞こえる為破壊を優先したが、破壊に向かう班以外は全員周囲の警戒だ。

つまり、この放送に少なからず意識を割かれる。

『オツガイが食している肉はグールの肉だ、いずれ赫者の兵隊が出来るだろう。グールを滅ぼした後にそれがどこに振り下ろされると思う？正しい倫理のない正義は暴力でしかない』

旧多への過激な策に皆麻痺しているが、十分に常軌を逸しているのは理解している。

代わりにグール根絶という果実が見えているからだ、その後のことまで考えている人間とはやはり少ない。

『私の友人、成遼太郎もまた賛同してくれている』

そして何故か、ここで成遼太郎の名前が出てくる。

いや元はグールの内通者なので組んでいてもおかしくはない、しかしいつからか？

アオギリの樹の時から組んでいる可能性は高い、今迄は金木研とのみ内通していると考えられていたのでこれに驚く者も多い。

ゆえに、絶対に逃すわけにはいかないのだが。

『これ以上の身勝手を、我々は許容できない』

『こちら川内班、棟内に人影はありません。もぬけの殻です！』

棟内に、誰もいないのである。

『よって王の腹心である我々は、平和を求める為に行動に移る。その障害となる和修吉福に対し、我々は個人的な意思によって……戦線を布告する』

今現在も放送は続いている、その報告に困惑する瓜江に別の通信がくる。

「林班、潜入しましたが敵影は確認できません！仕組みは不明ですが放送は赫子が喋っていた様です！」

赫子が喋る、それを聞いて瓜江は自身の右手にある『銀喰』を想起する。これはアオギリのSSレート喰種ノロの尾赫を利用して作った者であるが、そのノロは口の様に動く赫子で人を捕食してきていた。

話す事ができても、不思議ではない。

だが、今考えられる余裕はない。

「班長！2時の方向より、梟が現れました!!」

この包囲ができるまで待機していたのだろう、その横つ腹を突く為に。だが薙ぎ倒す様に行動しており、チラリと見えた瓜江には人を殺す意思を感じない。

だが完璧な包囲を敷けていない以上、逃す可能性は高い。

すぐに櫛を飛ばそうとするが。

「S2班班長、瓜江だな」

背後に現れた男に阻止される。

「ついでに、クインクス班か」

クインケでの斬撃が瓜江に向けられたが、それは気付いた米林によつて阻止阻止される。

千手観音さながらの百烈拳だ、しかし初見で見切れる筈もない攻撃はあつさりと回避される。

「凄い赫子だな、今の使い方は見た事がない。隣赫か？」

そこには多少ボロボロな状態の男がいる。

「成、遼太郎……！」

佐々木琲世や平子丈と共に裏切った捜査官がそこにいた。

未承認らしきクインケを携えてだ。

「なぜ人間の貴様が、グールを……よりもよつて、梟を庇う!!」

「成り行きが半分だが……平和が欲しいからだ。王もそれを望んでい
る」

平和を本気で望むのならば笑わせている。

梟とは平和とは対極にいた存在だ、それが平和を謳う為に行動を共

にし剣を握るなどあつてはならない。

「この行動が、それに繋がると思っているのか？」

本気で考えているなら狂人だ。

しかし瓜江にとって成とて成という捜査官の情報があまりに少ないので判断に困る。

グルルを人として扱う宇井特等の部下、そして今の今まで力を見せずにいた実力者、この情報で判断出来ることは少なく、確定事項でもない。

その真意を、問うのだが。

「逆に聞くが、君は本当に旧多のやり方が平和を齎すと思つているのか？」

瓜江の甲赫を受け流し、米林の赫子による質量の暴力も避け、他のクインクス班の攻撃すら躲しながら答える。

瓜江は周りにただ流される愚者ではない、自身の考えをもつ捜査官だ。

ゆえに今の歪んだ形にあるCCGにも懐疑的だ、そして成や梟のいう通りに平和が訪れるとは考えていない。

「殺すのがグルルから、邪魔者になるだけだ。あれが正義なら生き辛いことこの上ないな」

「貴様らは違うというのか！」

仮にこの革命が成功したとして、変わるのは首だけではないかと瓜江は問う。

隻眼の王が座ろうが梟が座ろうが、世界の歪みは変わらないのではないかと？

「私はグルルとの殺し合いさえ起こらなければ、それでいい」

しかしその答えは、シンプル過ぎた。

捜査官なら誰もが一度は考えたことのある夢想であった。

「命を守る事が、そこまで不思議な事か？」

価値観が違う、だからその価値観を押し付ける為に戦っている。

そしてそれを本気で成し得ると考えている男が目の前にいるのだ、迷いのある今の瓜江達が敵うはずもなかった。

23話

「作戦はこれでいきます。何か疑問は？」

作戦施行1週間前、完成させた作戦の流れを示した成をみてエトは作戦としては成り立っていると感じながらも、違和感をいくつか感じている。

「これ、私が戦う必要があるか？」

人とグールの共闘を演じる、その為に戦う理由が分からない。いや狙いは分かる、成遼太郎という捜査官が認める事に意味を持っているのだが、認める存在が問題だ。

「隻眼の梟を出す必要は無いだろ、赫者化する必要が見当たらん。むしろ捜査官からの反感を買うだけだぞ」

認める事で、グールと捜査官が関係を持つ事例をただの庇護下にある存在でなく仲間として認識をさせることができる。

グールを人として扱うという価値観を示す、だがそれを芽生えさせるのに隻眼の梟という存在は強烈過ぎる。

「……分かってます、でもします」

赫者化してまで伊丙を格納する必要もない、捜査官を蹴散らす事はノーマルな状態で可能、むしろ成遼太郎という存在の印象を悪化させる愚策だ。

「……意地悪な事を言ったな、理由は分かっている」

しかし、その真意は分かっています。

成にこういった策謀を授けたのは、彼女でもあるから。

「私は人を殺し過ぎた、ここでその大義名分を示す場を与えて、少しでも全て終えた後の行動をしやすくする為だろうか？」

演説を隻眼の梟が行い、人殺しを致し方ない犠牲にする事で捜査官や被害者の憤りの収める理由にさせる。

『もしかすれば隻眼の梟とは、皆の考えるような悪魔ではないのかもしれない』

そんな考え方をさせた時点でこの策は成功する、ただそれだけではない。

「君は色々と気を遣い過ぎだ、君自身のその後はどうする」

これを行つたのは、成がエトを生かした責任を感じているからだろう。

だから彼女がこれから生きていくのに必要な事として、歪みになるうが作戦に組み込んだ。

エトが死んでいれば、意味は作れてもやる必要のない行動だ。

「伊丙を地下に送るが、そこにいるのは有馬を殺した金木だ。私とて多少なりとも不和を生む存在だ、隻眼の王に都合が良いとは思えんぞ」

そして伊丙を拉致する決断をした成であるが、その後が致し方ないとしても不都合がある事は変わらない。

少なくともグール達にとっては気が気でない存在だ。

「分かってます。ただ……伊丙も被害者です、そしてグールについて何も知らない。エトさんだって被害者の側面もある。旧多も加害者に見えるだけの被害者かもしれない」

世の理不尽に皆巻き込まれた、その理不尽に抗った結果が今の成であり、旧多もその1人である。

ただ望んだ結果が異なるだけだ。

「Vは潰します、あれは……歪んでました。でも他は自分の目で見極めてから判断します」

Vは今の世界の明確な歪みだ、それは倒さねばならない。

だが一方向だけで見た正義が、大義を持っていても正しきを持っていないとは限らない。

「なので旧多を知る為に、少しだけ地上に残ります。地下の人達は、お願いします」

だから確かめる、戦線を深くした上で、あれだけの事をしでかした存在の真意を覗くために。

「君は甘いな、それが美德でもあるんだが……何かを失ってからでは遅いぞ」

エトとて色々失ってきた。

タタラやノ口といったアオギリのグール達、母親、小説家として世

話になった塩野、全員失った。

もはや気を許した関わりを持つ存在は成が唯一の者となっている、それだけの代償を払ってきている。

「エトさんは伊丙にグールを教えて下さい、彼等が人間と変わらない事を知って欲しいです」

そして彼は伊丙のその後の為に、地下に下ろすのもエトは分かっている。

彼女は命の重さを知らない、グールが人と同じ心を持った生物である事を無視してきた人間だ。

彼女が変わる事を願い、その手助けをする。

「お代は高く付くぞ」

「つけといてください」

これからの世界で生きていけるようにする、それが色々と作戦や思惑を歪ませ、その歪みの修正を個人で行おうとしている。

そして、その意思は変わらない。

「そのつけを払わずに死ぬなよ、成」

だからエトは邪魔をしない。

「むしろこっちの方があるんじゃないですかね」

「体で払ってやろうか？」

「冗談キツ……すいません、許してください」

舞台上っているが脇役として、そこで踊る役者を特等席で見ることしか許されない。

共に踊れば、誰かを失うと分かっている。

それが次は、成遼太郎である事も。

☆

4月m日

作戦は概ね上手くいったので、後は経過を待つのみだ。ただ私は地上でまだやる事があるので待機する事になった。なので手紙を2人に握らせて分かれた。

4月n日

無事、というかあれだけ大きな事をしたおかげで丸手特等にコンタ

クトを取れた。

S2班と戦ったのは打撃を与えるためでもあったが、彼らとのコンタクトを取る為である。

ピエロ戦あたりからそういった気配は何度も感じており、その先頭に立つのが彼であるのも察してはいた。

打倒旧多の為に動いており、草薙と砂塵、それと鎖骨の修理も依頼した。

現在旧多は様々な人間の処刑を断行しようとしており、それを止める為に彼等は動いている様だ。

ただ打倒旧多を掲げる者達であって、グールと和平を結ぶ者達では無い。

ほぼ門前払いみだ形になったが、もう少し粘りたいと思う。

4月0日

戦局を有利に進めるための私は交渉をしにきたわけだが、予想よりあつさり通った。

想定では1ヶ月はかかると思ったが、5日で終わった。

私が手土産に持ってきた薬『夙成』を応用してグールを人間に近い食事が出来るかもしれないと科学者達が3日ほどかけて調べたからだ。

どうやらグールの細胞そのものにも多少は影響を与えるそうで、誤差の範囲ではあるが成分抽出を繰り返すとある程度の効果が見えたそうだ。

詳しい事は分からなかったが、グールでもある程度の食料を吸収しやすく出来る酵素のような働きをするらしい。

ちなみにこの科学者は嘉納の部下で何故か手を貸してくれており、中にはグールとの和平を望む者もいた。

どこかのタイミングで旧多のいる本局に乗り込むそうなので、そこに同行する運びとなった。

一息つけると思いたい。

竜戦編

24話十紹介文

ため息を吐いて仰ぐ空は、空じやない。

茶けた土と少し暗く照らされた世界、それが24区の地下5kmにある中層階だ。

伊丙が訪れてから1週間ほど経つが、起きた出来事と言えばオツガイの密偵であるハジメが現れた程度で他には何も起きていない。

周りには大量のグールがお腹を空かせ、子供がそこら中を駆け回っているだけの世界。

「どうした、グールの生活には慣れたんだろ？」

ため息を吐く彼女の隣に、エトは座り込む。

成の手紙を王に渡してから放任されている2人は、ずっと地下の生活を眺めていた。

他にやる事もないからだ、そして彼等の当たり前だけを見ている。

「慣れますよ、食事以外何も変わりませんし」

暇な時は棒を振りまわし、捜査官の動きを忘れない程度の鍛錬をし、たまに寄ってくる子供達をあしらひ、少しだけ顔見知りになった同年代の子とたまに話し、また眺めるだけになる。

「グールは人と変わらない、それを教える為だけに地下へ連れてきたって言いましたよね。嫌ってほど分かりましたよ」

彼等が人と変わらない、変わっているのは食事ぐらいだという事が分からせられた。

人とグールが分かり合えない本質は食事だ、食う側と食われる側が仲良く出来るほど世界は単純ではない。

だが、その争いを辞めさせたいという考えに理解が出来てしまった。

「でも有馬さんを殺した琲世がわからない、なんで成がついて行ったのかも」

しかしその上で、なぜこの行動に移ってきたのかが分からない。「殺したくないから和平を結ぶ、その為にどれだけ血が流れるのか分かっている筈なのに、人のままでいれば幸せになれたんじゃないですか？」

何もしないのが、何も変わらず少なくとも成遼太郎の平和ではありそうなのだ。

力はある、頭もそれなりで少なくとも何もしないという選択肢が浮かぶ程度はある。

それが何故、この選択に縛られているのがわからない。

「正直、ここまで乗り気になってくれたのは意外だった」

そしてその見解は、エトも同じである。

「力はあるが殺す事は好まず、傷つける事すら億劫になる。捜査官は天職でも、中身は真逆なのがあの男だ」

半ば強引に誘ったという事実はある、だがここまで協力的になってくれたことには意外に感じている。

有馬の意志を継いだからだろうか、その火種を託されたゆえに責任を感じてしまうような男なのだ。

「だったら捜査官なんか、辞めればいいのに」

「辞めれんさ、私と同じでな」

辞めたくても辞めれない、そういった流れが終わったとしても変わらない。

「新しい居場所を作れるほど、あいつは器用じゃないからな」

それ以外を知らない人間は、変わる事ができない。

変わる手段も場所も知らない故に、そこで生きていくしかない。

それを分かった上で、伊丙やエトを生かした彼は残酷な人間なのだろう。

☆

【成遼太郎】

性別：男

身長：172cm

体重：67kg

14歳↓23歳

14歳の時に偶々襲いかかってきた喰種を倒してしまいCCGにスカウトされ、半ば強引に0番隊へ入れられた少年。

最初の0番隊時代は自身が何故か赫子の使える半喰種なのに気がき、出来るだけ目立たないように生きて来たおかげがあまり目立った成果は出していない。

その3年後、真戸呉緒上等捜査官の部下になり2年ほど囃役など無茶を強行されていき階級を二等捜査官に上げる。

その時に合同とはいえSレートも討伐しており、そのクインケも譲り受けている。

そして19歳になり、黒磐特等の班に合流する事となる。

またこの時にアオギリも活発化しており、梟と対峙し生き残ったりなど目に見える戦果は出さないが目立ちたくない気持ちとは裏腹に特等の間で話題に上がる人物となる。

そして数ヶ月後、0番隊に再度所属し有馬貴将のパートナーを任せられるようになる。

またこの後に隻眼の王である事を明かされ、特訓を受けさせられるようになる。

隻眼の梟である芳村エトとはこの時から付き合いが多くなり、グル側の事情についても学んでいくことになる。

20区の梟戦後は新設されたS1班で宇井郡の部下となり、その後2、3年ほど在籍したが有馬貴将が殺された少し後に離反、CCGから追われる立場となる。

Rc細胞が勝手に増える体質の影響で喰種並の身体能力と赫子の発現が出来る存在、しかし基本的に喰種としての力は隠し通している。

捜査官としての実力は有馬貴将には劣るものの、梟と戦える程度の実力を有しており、赫者化すれば全盛期ほどではないにしろ有馬貴将の領域に届く存在に変化する。

存在そのものが奇跡的であり、両親が庭の出身者という条件でありながら半喰種として生まれ食事も人間と変わらないものになってい

る。

将来の夢は特になく、何不自由ない生活を望んでいる。

【クインケ】

大和：羽赫

レート：S

真戸呉緒と共に討伐したSレート喰種から作り出されたクインケ。片手で持てるバズーカ型のクインケであり、威力はナルカミに並ぶ。

ただ弾の数に問題があり、長時間戦闘には向かないクインケ。

草薙：甲赫・尾赫

レート：SS

過去に有馬の討伐した喰種から作り出されたクインケを譲り受けた物、両刃のある西洋剣が柄の部分で繋がったようなクインケであり、分離して二刀流にする事も可能。

IXAのように赫子を地面に這わせて攻撃する事が可能である一方、盾のようなギミックは存在しない。

鎖骨：尾赫

レート：SS

14歳の時に地下で遭遇した喰種から作られた太刀型のクインケで、刀の背にあるブーストギミックにより斬撃威力を底上げできる。しかし威力が高過ぎるので並の人間が使えば最悪、片腕が吹っ飛ぶ事もあり得る玄人向けのクインケ。

成遼太郎が使う事を前提に作られており、後述する砂塵と併用した変則的な5刀流で戦う場合が多い。

砂塵：尾赫

レート：SS

鎖骨同様の喰種から作られた小刀のようなクインケで、4振ある。ギミックとして刀身がチリのようにバラけて中距離での攻撃も可能となるクインケ、ただしそのようなギミックなので消耗が激しく長時間の戦闘には適さない。

【赫子】

尾赫と甲赫を合わせて持つ、天然の複合型。

尾赫は棍棒のような猫を思わせる形をしており、それを地面や壁に叩きつけて高速での移動を可能にする。

また甲赫は両肩から先が三つに分かれた爪のような形をしており、基本的に使われる事が少ない。

赫者になる事も可能であり、エト曰く喰種としての才能は天才的と称されている。

25話

地下のグルル達には致命的な弱点があった。

広大過ぎるが故に、見つからないという強みはある一方で、食料の確保が出来ないという弱点が。

地上の食料、もとい死体の回収はオツガイが優先して行っているのもあり都内には見つからず、自殺の隠れた名所でも手に入らない。

全員が飢え死ぬ、時間の問題であった。

故に黒山羊は大量の人員を導入した食料確保の為に21日より、部隊を編成して樹海への遠征を決めた。

これにより半年程度の食料を賄えるという目算の上で、だ。

そしてこの時期をあえて選んだのにも理由がある。

先日地下で確保された密偵、ハジメから渡された手紙には処刑執行を行う旨の連絡があったのだ。

その中には金木の伴侶となった霧島薫香の友人の名前も存在した。

最初は処刑断行に介入し救い出す策を考えたが罫であると判断し、その日にあえて何も仕掛けずに食料確保の日を被らせた。

それが4月23日である。

「……エトさん」

「気配が多い、今は王や主要の戦力すら出ているんだが……狙われたか？」

そして、その日に向こうは仕掛けて来た。

エトと伊丙の見上げた先には大量の黒い子供達がいる。

オツガイだ、この前の密偵に発信機でも仕込んでいたのか攻め込んできたのだ。

「20番地下通路に避難して！戦えない人は優先してあげて！」

襲撃に気付いたトーカは避難の誘導を行う、今ここにいる殆どのグルルが非戦闘員であるからだ。

子供であったり、身重であったりと何かしら事情があり地下へ残っている者達とその最低限の護衛だけがここにいる。

ちなみに伊丙やエトが残っているのはまだ信頼が薄いからだ、地上に出すよりも地下で経過を見守るといふ形にされたので例外だ。

「下がるぞ、ここは向こうに任せる」

そしてその軍勢を見たエトはすぐさま、非戦闘員の向かう20番地下通路へ伊丙を誘導する。

「戦わないんですか？」

エトならばいくらオツガイと云えど、時間稼ぎはできる。

伊丙も同様だ、ある程度の敵はとうとうでも出来る。

しかし迷わずエトは下がる判断をした。

「私が指揮官なら、逃すような真似はしない」

すぐに、次の一手を読んだからだ。

あからさまな登場によりパニック状態となった地下空間、当然戦闘のできるものが時間稼ぎに残る。

そして無力なグルル達にはまともな護衛というのが居なくなる、狙わないわけがない。

「君には非戦闘員を任せる、偶発的な遭遇はどうしようもないからな」
そう言うと、エトは誰よりも速く駆けた。

先回りしているであろう、指揮官を殺すために。

☆

「なんだ成、不安か？」

4月23日、作戦開始前の成の元へ丸手は赴いていた。

ビル街での監視、逃走時の対応が彼の仕事だ。

CCGで指定された犯罪者、もといテロリストであるという事もあり外での待機となっている。

最初は丸手も適当な言葉をかける予定であった、緊張をほぐす程度の物をだ。

しかし、その言葉を最初にかけたのは彼の顔がどこか思い詰めているようにも感じたからだ。

「自信を持って、お前は有馬程じゃねーにしろ強い」

これから行われるのは革命でも無ければ謀反でもない、ただ元の形に戻す為に行う戦いだ。取り戻す為の戦いだ。

「でも、信用はしてないですよね」

「だが成はまだ丸手から完全な信頼を得られていない。」

「流石にな、逆にお前はできるか?」

「しませんよ、むしろ警戒します」

具体的な戦闘時間などは教えてもらえてはいないのだ、ぽつと出てきた力を持つ得体の知れない奴となれば、警戒するに決まっている。だが共通の敵は定まっているから、背中を預けている。

利害の一致が何よりも、この関係を強固なものとしているのだ。

しかし、それが出来たからといって勝てるとは限らない。

丸手を気遣ってか、今度は成から話しかける。

「旧多は、手強いです。少なくとも人の嫌がる事を考えるのは誰よりも秀でています」

旧多が成に対して伊丙をぶつけたのは、それが最も有効的であると考えての行動だからだ。

それは戦闘力という面もちろん存在するが、精神的な負荷をかけやすいという理由もある。

ロゼの時に伊丙を庇った瞬間を彼に直接見られている、普段から主体的に動かない人間が動いた瞬間だった。

つまり伊丙入は成遼太郎にとって何かしらの感情を抱かせる人間と判断され、利用されたのだ。

そして結果として失敗はさせたが、経過としては思惑通りであった。

「その旧多が、何かをしないとは思えないんです」

何もしないというのは、不安を煽る事はあってもそれ以外に効力を得ない。少し長期的な意味合いでの効果は期待出来るが、短期的なものとなると難しい。

何かをした方が得だ、それが仮に失敗してもいつでも何かをしていくという不安を煽れた方がいい。

そして旧多は意味のある戦いをする、今までの仕掛けて来た戦いは全て旧多にとってのメリットがあった。

ピエロの時は局長としての地盤を固め和修政を消す為、成に仕掛け

た時はCCGへの見せしめとして、オツガイを用いての多方向の掃討作戦は民衆と捜査官からの正当性を得る為に。

どれも、理由が存在した。

そして、そのどれもが短期間のうちに間髪を開けず、あるいは同時並行で行われた。

それだけの存在なのだ、また仕掛けてこないとは考えられない。

23日の処刑もその一つではあるが、そこに合わせて動いてくる可能性は十分にある。

処刑の邪魔をされないように準備をするよりも、その裏をかいて何かをしかす方が彼らしい。

「ただ、何をしたいのかが分からない」

しかし、その主たる目的が分からない。

旧多のやってきた事や本性を隠していた時は知っていても、それ以外を知らない。

和修によつて敷かれたレールの上で管理されたくない、それが理由ならばもう達成している。

もう一族は全滅させているのだから。

必然的に管理から開放された後にする事は、それによつてできなかった事だ。

無論、Vやピエロには協力に対する対価を支払うのでその行動はあるだろう。

だが旧多が欲するものが、成には分からない。

「全てを手に入れた男が願うのつて、何ですかね」

成はこれで終えた自分自身を明確に想像する事ができない、そもそも成り行きというのものもあるが、彼自身が何かになりたいと考えた事が少ないのだ。

旧多という存在の立場で考え、何を求めるのか。

「そりゃ、平穩つて奴じゃねーか」

それに対して、丸手は一般論で答える。

確かに、そこまで上り詰めてする事はその維持ぐらいだ。

だが喰種を滅ぼせばそれこそCCGの局長という椅子に意味はな

くなる、今の流れとしては整合性が感じられない。

平穩とは安定した平和や幸福の享受だ。彼を知るには彼にとっての平和が何かを知らなければ分からない。

「これだけして欲しい、平穩……」

もはや世界への八つ当たりのようにも感じる彼の生きる理由、それを確かめなければ自分が定まらないまま戦う事になる。

真つ黒に見えるそれを覗くという愚行を犯す、白い部分を探す為ではない、その闇が何かを見定めるために向かう。

有馬は敵と戦う時は話すなど言った、情が生まれるからだ。

だが情が生まれないような殺し合いなぞ殆どない、だから成は話したい相手には話している。

話さなければ、何も知る事ができない。

ゆえに、成は自分の戦う理由を付けるために向かう。

「シャキツとさせろよ、お前を戦力として数えてねーわけじゃないからな」

そう言うと丸手は去っていく、残された成はする事もないのでぼんやりと空を眺める。

成にとって平穩とは人とグールが日常的に殺し合いを行わない世界だ、それが旧多に当て嵌まるとは考えられない。

分かり合えない存在だと察しながらも、それ自体を辞めれないのが彼という人間の欠点なのだろう。

何かを失う事が、十分にあるのだから。

26話

隻眼の王討伐を目的とした作戦、それは秘密裏にS3班を主軸としており、地下の侵攻という都合上連絡が取りづらい環境での戦闘となる。

なので遊撃部隊としてS1班からこの前の打撃を受けなかったメンバーを選出し、地下のグール殲滅部隊として送られた。

S3は隻眼の王を、S1は残党の処理などを請け負っている。

また密偵として送られたオツガイであるハジメの回収も任務としてあり、それは直ぐに終えた。

そして今、宇井は側面から逃げ惑うグールに襲いかかったのだが。

「郡さんは私が相手しますよ、そっちお願いします」

敵として考えていなかった存在が、目の前に立ちはだかった。

「生きて、いたのか。ハイル」

後ろには0番隊と平子、そちらはハジメと戦闘を始める。

しかし、宇井達は赫子を発現させている伊丙に足が止まる。

捜査官としてオツガイ0番隊を率いた彼女がなぜ、よりもよってグールとの間に立つのかは、判断ができない。

「なぜ、そっち側に居る」

「死んじやったからですかね」

そうだ、死んだ事になっていた。

ラボでの戦闘跡は凄まじく、大量の血痕もあり、伊丙の死体もなかった事から彼女は死んだ事にされていた。

「成はどうした、あいつはどこにいる」

0番隊のオツガイからの情報によれば成遼太郎にやられたと聞いている、つまりここに彼女がいる理由に必ず関わっているはずだ。

むしろ宇井は殺す気で来ている、伊丙を選んだ彼が失ったと思わせただけの原因であるからだ。

また、自分の部下の責任は自分で取るという意味でもあるだろう。

「あのバカは知りません、でも……渡しません」

彼女はその殺気を感じる、その上で拒否する。

伊丙とて何も成り行きだけでここに居座っているわけではない、後ろには多少なりとも情の湧いたグール達がいる。

それを助けたからと言って、過去に殺してきた事実が変わるわけではないが、彼女はここをどく理由には成り得ない。

「あいつは、裏切ったんだぞ」

宇井は戸惑いながらも、その真意を問う。

成は宇井も敬愛する有馬を殺した側にいるのをわかっていてなぜ、そっちにいるのかと問う。

伊丙とて成が今いない状況というのもあるが、そこについてはまだ消化しきれていない。

「勝手にされたままなのは癪なんです、その借りを返すまでは……こつちに居ます」

だが問い詰めていくだろう。

成の裏切りの真意も、伊丙を生かした理由も、これから先どうするかも全て問い詰める。

伊丙はまだ彼も世界の仕組みも知らない事が多過ぎる、だから彼女は地下で彼の帰りを待つのである。

「引いてくれれば見逃します」
伊丙には理由があり退けない、だがその理由で上司を傷つけたくはない。

そして宇井とてそうである、退けない理由はある。

「お前は連れ戻すぞ、ハイル」

上司と部下の戦いは始まった。

☆

隻眼の梟、芳村愛支は生まれて間もなく母を亡くし、親代わりであるノロイに地下で育てられた半グールだ。

グールという世界は狭く、自由がある一方で理不尽がある世界であった。

そして父親は生きていたが、Vという組織に属し母を殺しては20区で喫茶店を運営していた。

グールを助ける為の喫茶店『あんていく』だ、しかしそこにいた父は幸せな様子に見えた、自分が苦しんだ先にやつと小説家としての一歩を歩み始めた時にだ。

小説家となった14歳の時に、彼女は公平性のない理不尽な世界を呪い始めたのである。

そして起こした反乱は鎮圧され、有馬貴将にトドメを刺される寸前までいった。

しかし同様に世界の歪みを壊したいという願いによる利害が一致し、協力関係を結ぶこととなる。

アオギリの樹と隻眼の王はここに生まれたのだ。

その目的は和修による現体制の破壊、そしてグールと人間の間にある種族の壁を取り払う事だ。

人もグールも幸せを享受できる世界を、もたらす。

その為に、彼女は死ぬ筈であった。

ただ引き入れた仲間から助けられてしまい、死に場所は失っていた。

生きる新しい意味を探して欲しいと言われ、その責任を取ると迄言う、実際にその後を上手く生きられるような配慮を作戰に組み入れてきた。

十分過ぎる、むしろ巻き込んだ存在だ。情を植え付けたわけでもないのに、勝手に救われてしまった。

だから、舞台上そのまま自分に出来ることをする。

それが地下では、グール達を守る事である。

守るものが無ければ、人は戦う意味を見失ってしまう。

だから、彼女は戦った。

「こんな所まで来たのは驚きましたけど、何か変わりましたか？」

そしてまた、負けた。

前と同じで、五体不満足で地に這わされている。

「リベンジマッチのつもりみたいでしたが、1人で何も出来ないの知って徒党を組んだ事もあるのに、1人で来たのは笑えますよね」

指揮官である旧多の考えを、彼女はある程度先読みをしていた。

その道では彼女の方がいる程度長けているという事もあるが、旧多が何をしたいのかぐらいは読み取れていたからだろう。

S3班の鈴屋達を無視し、最も危険な存在でかつ頭である旧多へ攻撃を仕掛けた。

多少の護衛としてオツガイもいたが、それだけであり赫子を大つぴらに使える立場でないのも分かっていたので、タイマンに持ち込めていた。

あの時と違い、成の赫子を食べた影響でその力の片鱗を受け継いでもいたので善戦ができる自信はあった。

頭が止まれば体も止まる、時間を稼ぐ程度ならばできると考えるのは同じ洞察力と情報を持った存在であれば行う行動だろう。

「死亡フラグ立てまくりだったし、小説家ならもつと様になる言葉を吐いたらどうです」

ただ、旧多が強かったのだ。

比較として、オツガイとして赫者となった今の伊丙入と同等かそれ以上の力を赫者とならずに手に入れている。

あの時は赫子を手に入れたばかりというのもあり、旧多も全能力をフルに使えたわけではない。

そもそも、有馬や伊丙を除けば庭の半人間の中でも頭がいくつか抜けた存在であり、捜査官としての戦闘能力でもそこらの特等を簡単に倒せる存在だ。

故に、エトは引き際を誤った。

だが、彼女としてそれがわかつている。

「知らん、のか……？最近は、立てた方が生き残るんだぞ」

あくまでも、彼女が選んだ時間稼ぎは無駄では無い。

事実、旧多の号令が多少遅れた影響でグール達は何とか逃げられている。

戦線の膠着を作り出せたおかげで、少なくとも思い通りにはさせていない。

「それと、別に私がお前を倒すわけではない」

そして、元から時間稼ぎの目的は撤退の支援だけではない。

「……うわー、やっぱり来たんだ」

24区は下に進むにつれて道が単純化していく、なのでグール達の待ち伏せは容易にできる。

だが逆説的に言うならば、地上の何処からでも地下へ目指す事ができる。

ただ距離が遠い、居場所も完璧にわかるわけでは無い。だが来ると信じていたのである。

「地下を頼むとは言いましたが、無茶をして欲しいと言った覚えてはないですよ」

「安心したまえ、旧多がいるなら君は来ると確信していたからな」

少し煤けた格好で、成遼太郎は降り立ったのである。

それに対してエトはやつとかという顔を見ると手足を再生させる。満身創痍を演じて時間も稼いでいたのだろう。

成は地上に残った理由の一つが旧多について知る為だ、そしてその本人が地下に居るのだから必ず来るといふ信頼がエトにはあっただけだ。

ただそれまで自分が生きているかは賭けの部分も多かったのだが、結果としては間に合っている。

「気をつけろ、伊丙よりは手強いぞ」

「……分かってますよ、ここは預けて下さい」

そう聞くとエトは下がる、先回りしている部隊を相手取る為に。

そして成は残る、できない事はやらない人間である彼がそこに立つという事は、黒幕を請け負うと言う事でもある。

「死ぬなよ」

そう最後に呟き、彼女はその場を後にした。

27話

成は旧多の前に立つ、しかしその雰囲気からは戦闘が起こるようには見えない。

「貴方とやる気は今の僕にはないんですがねー、やり合いたい感じですか?」

その雰囲気を感じ、旧多は赫子を仕舞う。

成はここに戦いに来たわけでもあるが、知る為に来たのである。

何度も断片的な情報や条件から、考えを重ねてきた。

「君は、何を求めているんだ」

そして結局、答えは出なかった。

「檻は壊した、権力も手に入れた、何も君を縛る者は居ない」

全てを手に入れたのではないかと思える程、彼は上手くやっている。それだけの苦勞と計画が裏にあったのだろう、そして旧多そのものの実力の高さも相まって今に至る。

だが分からない、彼がなぜ行動に移しているのか。

CCGのトップは恐らく興味がない、色々と都合が良いからなっていると様々な情報からされる。

でなければグールの殲滅などやらないはずだ。

「全てを手に入れた男は、平穩を望むと丸手特等は言った」

だから知りたいのだ、その答えたを。

「君の望む平穩とは、なんだ?」

成とのお喋りに興が乗ってきたのか、はたまた戦闘によるアドレナリンがまだ頭に残っているのか、旧多はその質問を聞くと辺りを適当にスキップしながら答えてよいという雰囲気を出してくるが。

「僕だけ答えるのはフェアじゃないんで、こつちも聞きますよ」

相手を知りたいのは、成だけではない。

「何を求めているんですか? いや、当てますよ。奪い合わない世界、そんな感じでしょ?」

だが、旧多は先にその答えに至っている。

「……概ね、それで合ってる」

しかしそこではない、旧多が知りたいのはそこから先である。

「だからグールを殺さない世界を望むんですか、アホらしー」

嘲るように挑発する彼の目は口とは裏腹におもちゃを見ているように興味が示されているのがわかる。

だがおもちやに望んでいるのは、楽しませてもらうことだけである。

「今まで貴方が殺せるけど殺さなかったグールの数、いくつか分かりますか？」

旧多も調べた、成遼太郎という捜査官について。

14歳からCCGに入局し、0番隊として活動していくが目立った戦績はない。

19歳の時に梟との戦いで頭角を表し、有馬のパートナーとなった後は白単翼章を受賞し1等捜査官へと昇級、しかしその後はグールの討伐実績は波以下になる。

情報として役立つ物ですら時間が経っているので確証を得られない、それだけ隠してきた存在だ。

だが、別にグールと戦って来なかったわけではない。

「100以上ですよ、それが月に1人食べたとして1年で1200人死にますよね？9年以上そんな事をしてきたら世紀の大量殺人犯ですよ、現実って見えてます？」

あくまでも概算であるが、ロゼの事件だけでも成遼太郎は3人のグールの命を奪わなかった。

奪った瞬間の方が、遥かに少なかった。

「それについて見て見ぬふりをした事はない」

「背負ってるつもりみたいですけど、死んだ人間はそんな事を望んでいると思うんですか？」

そして、そんな甘えた考えに対する言葉は考えもせずに出てくる。

「グールなんて居なくなれば、遺族はそう思っていますよ。貴方が殺していれば亡くならなかった命です、その責任はどう取るつもりなんですか？貴方はただやる事に理由を付けるエゴイストじゃないんですか？」

無責任で身勝手な彼をエゴイストと称する以外に、何と称するか。成遼太郎は戦える力を持っていた、その力に対する責任は無いのか？

旧多のいう言葉は全体的を得ている、正しい行動では無いのだと、君の行動は間違いでないかと問い詰める。

「……それが？」

しかし、成はそれに対してだからどうしたと言わんばかりの反応をする。

「それがって、何か思う事は無いんですか？」

「誰かしらがやる役目だ、私じゃ無いからと言って変わるわけじゃない。だから君の言う大量殺人犯にも、私はなるし……いずれ罰は受ける」

何人もの見えない屍を成は築いているのかもしれない、だがその屍の丘を作らなければ届かない世界がある。

グールと人間、両者が手を取り合って生きる世界を創る使命は託されている。

「まっぶしいなあ、聖人気取るにしては目が気持ち悪いし。大義とか愛国心とかそんなのに縛られて、貴方は自分を持っていないんですか？」

「無ければもつと殺してる、だが後腐れなく終わらせた後は好きに生きるつもりだ」

世界を正しい形にするのではない、世界を住みやすい場所にする為に戦うのだ。

でなければ、さっさと全てを放棄している。

彼の望む世界が存在するならばと、挑む理由はそれだけだ。

有馬貴將に託された使命を、成遼太郎は全うするのはそんな利己的な意味も無ければ、背負う事は無い。

「ナリくん、貴方僕と似てる気がするんです」

旧多と成は歩んできた道はまるで違う、どちらも揺らがない自分を持っていて存在ではあるが、真逆とも言える。

「庭の家系から生まれて、早世な事も分かったのに貴方がやる事は

全で一貫性があった。人を殺したくない、命を奪いたくない、そんな平和を謳う生き方なのがよく分かります」

庭の人間同士から生まれた存在である事は最近になって判明した、成の裏切りが発覚してから見つかった事実であり、それだけ巧妙に隠されていたのだ。

しかし全ての権力を握ってしまえば、僅かな時間で到達した答えである。

そして、その生まれを知らながらも彼は世界を恨む事はなかった。むしろ、このグールの居る世界を認めていた。

「貴方が羨ましいですよ、檻から解き放たれた上に、早死にの呪縛まで解いてしまった」

欲しいものを全て手に入れている、それが旧多から見た成という人間だ。

だが、その先まで得ようとする強欲さがある。

「貴方達の作った『夙成』は素晴らしいですね、僕や貴方みたいな出来損ないが人間になれる」

何よりも、薬を作り上げてしまったことが1番の想定外であった。

Vですら何十年もかけてきっかけや可能性すら感じさせない程に難航していた代物だ、旧多の寿命が続く迄に作られるとは誰も予期できなかつた物だ。

「それをなんで今更、準備しちゃうかなあ……」

だからこそ、引けなくなってしまった。

「本当に今更です、変わらないんですよね……彼女を使い潰した後じゃ、もうやらざるを得ない」

彼女と言われて成に心当たりはない。

使い潰したと言われ何か考えが出てきそうであるが、それは出てこない。

「ナリくんの言う通り、僕は幸せを求めています。でももう全てを壊した後じゃ無いと手に入らないんです」

そして、彼はニヤリと笑うと後ろを見る。

「僕は僕の幸せの為に、全てを得ます」

瞬間、地下の壁が破壊され大量の肉と目玉の塊が現れる。

「無論その為の犠牲に、貴方にはなつて貰いますよ」

それが四方から上に昇っていく、その奔流に旧多は飲み込まれていった。

28話

地下のグール達は先回りされた捜査官によって、絶体絶命の状況に陥っていた。

現れた現最強の捜査官率いる部隊、それは駆けつけた金木が相手し非戦闘員は逃げれる筈だった。

しかし、そこすら先回りさせるのが旧多だ。

V14、全ての地下通路の中継地点となる空洞がそこにある。

そこを通じさえすれば追手を撒く程度は容易にできる、しかし逆に言えばそこさえ抑えれば封じ込める事ができる。

そして、最後の逃げ道の先に待ち伏せされ、もはやまともな戦力として数えられるグールもない状況に終わりを感じ始めたその時だ。

「やれやれ、まだこんな所にいたのか。探すのに苦労したぞ」

捜査官達の背後から現れた赫子が、彼等を蹴散らし始める。

「……ボロボロじゃない、下がってでもいいのよ」

「妊婦に言われたくはないが、まだ余裕はある」

エトだ、非戦闘員を先導するトーカはその姿にホツとするも軽口を言い、赫子を展開する。

トーカの実力はSS以上だ、しかし彼女自身身重である点や負傷がある事から相当無理をしている。

だが、エトは負傷があるとはいえSSSのグールだ。

「雑魚狩りの部隊だ、大した兵はいない」

その羽赫が一瞬にして捜査官達を吹き飛ばし、壊滅させた。

特等クラスがいらないとは言え、圧倒的な力での蹂躪ができないはずがない。

あまりに一方的に、簡単に無力化した光景にグール達は啞然としている。

「安心しろ、殺してない。不必要に殺すと機嫌が悪くなる奴が居るか
らな」

よく見ればクインケの破壊などで致命的なダメージは出さないように射出されているのだと分かる。捜査官達は武器もなく戦えなく

なるとそのまま引き上げていく、隻眼の梟の圧はそれだけあるのだ。

「……助かったわ」

「気にするな、困った時はお互い様という奴だ」

エト達がこの地下にいる間、彼等に世話になった。

食料的な点でもそうだが、この絶滅に瀕した状況というのもあり同族意識が高まっているというのもあったが、監視対象とされても仲間として扱ってもらえていた。

それなりに恩を感じていたのだ。

だが、そんな気の緩む瞬間はすぐに終わる。

「……これは想定外だな」

地響きがする、とても大きい。

震源地が近い、何かが地の中を蠢くような音が響いていく。

地下道がそんな衝撃に耐えられるわけがない、ボロボロと崩れ始めていく。

「みんな、急いでー」

トーカは地下へ行くように皆へ告げるが、それが間に合う段階ではない。

「このまま全員が生き埋めにされる、だがそうはならない。

「つ……今のうちに行け、長くは持たん」

エトは自身の赫子を四方八方へ伸ばし、崩落を防いでいく。

「おいおい、流石に維持が限界だぞ……」

エトは先程の旧多との戦いで疲弊している、心なしか赫子の量も少ない。

だが地鳴りは更に大きくなっていく、もはや耐えられる状態ではない。

そして壁の一部が剥がれた先に見えてしまったものがある。

「まさか、竜を引っ張り出すとはな」

巨大な肉の塊に目玉があった。

それがこの揺れの原因であり、氷山の一角でしかないことをエトは悟る。

このままでは全員が押しつぶされる。

しかし、それは緑色の触手によって支えられて防がれる。

草薙のギミックだ、それが使われたという事はその持ち主がここに来たという事になる。

「成、なぜこっちに来たー!」

「旧多に逃げられました、すいません」

エトは赫子を解除する。

だが気を抜いてはいない、先程竜の一部分が見えていた場所を見るがそこにはもう居ない。

移動した後であり、地響きも少しずつ遠のいている。

「なら逃げるぞ。流星に今アレはどうにもできん」

「そうですね……地下よりも地上に行きましょう、生き埋めにされま
す」

もはや地下世界は崩壊した、地上の方が幾分かマシだろう。

しかしアレが解き放たれた地上だ、平和とは言えない。

「仕方ない、食料班と合流だな。残った奴らを助けるのは後回しだ」

「ですね……ただ、このままじゃ」

そしてグール達をトーカーが連れて行く、真上やその周辺区は危険なので迂回するのだろう。地下を知る彼女に皆ついて行く、何があるかは分からないのでエトもそれについて行こうとするが。

「おい、馬鹿なことを考えてるな?」

成が上を見上げている、竜の一部が見えていたところだ。

その先は空洞があり、何を考えているのか嫌な事に師でもあるエトは察してしまう。

「……誰かが止めないと」

竜の全貌を見たわけではない、一度だけ有馬やエトに御伽噺のような実話として語られただけの存在だ、無論勝てるはずがない。

「馬鹿を言うな、私が10人いても無理だぞ」

エトどころか全てのグールや人間が立ち向かっても勝てるような存在ではない、それだけあれの存在は規格外なのだ。

勝つことを考える以前に、戦わない事を考えなければならない。

「地上に向かってます、甚大な被害が出る筈です。それにあの竜は」

「やめろと言っているのがわからんのか!!」

だが、成の意思は変わらない。

アレがどれだけの悲劇を生む存在であるかよく分かっているのだ、そしてその核として誰が使われているのかも分かっているのだ。

「今度こそ死ぬぞ」

だが成は懐から仮面を取り出す。

それがもはや意思が変わらないという決意であるのも分かる、それを止める事はエトには出来ない。

仮面は自身をグルルと偽る時に利用していた物であるが、これにはもう一つ理由がある。

人間として彼は戦ってきた、それは伊丙の時も同様である。

仮面をつけるのは覚悟を決めるためでもない、自分を隠す為でもない。

「……なぜ、お前は行く」

仮面の瞳から、赤黒い双眸が暗闇の中で煌めいた。

その眼に迷いにも後悔にも似た何か物寂しさを感じさせたが、成は一度だけエトの方を見るとまた上を見上げて呟いた。

「子供には、父親が必要でしょ」

そう言い残して、彼は上へと伸びる坑道を駆け上がって行った。

29話

煤煙が空を覆って行く、夕闇に落ちて行く世界とは対象的に赤い炎が地上を燃やしている。

「中継です、今から放送する映像は現在の東京です！」

ヘリコプターに乗ったテレビの中継者が空から世界を映している。

この瓦解した都市が東京とは誰も思うはずがない。ビルは薙ぎ倒され、阿鼻叫喚の地獄のような光景が広がっている。

「突如地下から現れた蛇のような怪物と自衛隊が戦闘をしています、あれの正体については不明ですが、新種の巨大生物であるのは確かです」

そしてその原因である存在は、巨大だ。全長が目算でも数キロあり、区を跨る程の長さがある。

全身にはヒダのように大小様々な腕がびっしりとあり、それで人を襲っている。

また、大きな口と身体中に付いた目玉がその異様さを増長させている、この世に存在していい存在ではない。

「ヘリが、ヘリが撃墜されました。危険ですので、我々も非難をしたいと思えます！」

そして自衛隊の攻撃は効いていない。

いや、効いてはいるがすぐに回復している。

そして戦車もヘリコプターも関係なく全てを破壊している、それだけの力を持った存在なのだ。

「ひっ……!?!」

そして、その腕の一つがキャスター達のヘリへ向かった。

いくら空を飛べる乗り物だからといって急な方向転換や急発進が出来る乗り物ではない、その伸ばされた腕からは逃れられない。

「……え?」

だがその腕は切断された、そのまま重力に引っ張られて地面に落ちて行く。

ヘリはそのうちに方向を転換してその場を離脱して行く、リポー

ターは命がある事に安堵しながら怪物の方へと目をやる。

彼だけが気付けた、ヘリと怪物の間を何かが通ったのだ。そしてその後、怪物の腕は落ちた、鋭利な断面図を見ればそれが自然に起こったわけがない。

「な、何でしょう……何かが我々を庇ったようです」

そして、それはリポーターの眼にも、カメラにもしつかりと映り込む。闇に落ちて行く都市の中に白い影が動いているのを、人間とは違う何かの影を。

「まるで巨大な虎のような……」

ヘリはその場を離れて行った。

☆

大き過ぎるうねりの先に、1匹の獣が居る。

質量の差で見れば圧倒的であり蛇から逃げるひよこの様にも見える、だがその蛇の大きさが規格外なだけであり、獣の大きさは5mを超えている。

四つ足と尻尾でビルや道路を高速で駆け回り、その注意を一手に引き受けている。

「(……まだ避難は終わってないか)」

成遼太郎の赫者となった姿がそれだ、民間人の避難が済んだ地域を中心にビル街を立体的に逃げ続けている。

その姿がカメラにも映されているのだが、そんな程度の事を気にする余裕はない。

あれだけの質量を持った存在だ、押し潰されてしまえば即死だ。

「(これなら……!)」

成は逃げ回りながら、ビルとビルの上に蜘蛛の巣のように赫子を張らせる。

即席の捕獲網だ、無論この程度でどうにかなると思っていないが、ただの網ではない。

ビルと癒着するように張られたこの赫子は成の尾赫の柔軟さと甲赫の強靭さが練り込まれた特殊性である。

伸び過ぎることも千切れることもない、それに突っ込んでくる竜の

動きに何かしら影響を与える筈だ。

「……嘘だろ」

ただ、甘くない。

赫子は切れなかつたが、ビルを根元から引き抜きながら猛進を続けてきたのだ。

だが僅かに速度は落ちた、その瞬間に何度か尻尾の赫子で叩き付けてもみるが、僅かな硬直を生むだけで効いているようには見えない。

成の尾赫は棍棒のような大きさでしなりが最もある武器だ、その破壊力は鉄骨ですら束になつても叩き折る。

しかしこの生物、竜は成を餌としか認識していないようでひたすら直進を続ける。

「正直もう手詰まりなんだが……」

かれこれ10分程度であるが、成は追いかけてつこを始めてから色々と分かつた事がある。

竜は肉を求めている、それは代謝の為か自身の成長の為かは定かではないが人の多いところを狙って動き続けている。

事実、竜は地下で大量の捜査官とオツガイを食べ尽くしている。

その旺盛な食欲がある限りは止まらないだろう。

次にその耐久性だ。

分厚い肉、赫子が何層も積み重なって膨張しているのでダメージは入るが大きさゆえに軽微に済んでおり、ヒダのような腕を切り落とすぐらいしかできない。

特に打撃は効果が薄く、層を突破することが出来ない。

そして自衛隊の攻撃を受けた時に気づいてしまったこととして、大砲程度の攻撃は即座に回復してしまう事がある。

これではまともな攻撃策はやる事すら無意味であることが分かる。

そして視野の広さが更に成の行動に制限をかけている。

全身にある目玉の全てに視覚があり、死角に回り込むことがその大きさと相まって難しくしている。

ゆえに逃げ遅れた人間は漏れなく竜の腹の中である、そして全ての体の体へ吸収されている。

「最強の化け物だな、金木」

核となった存在へ届くはずも無い言葉を漏らし、また動き続ける。もはや逃げるために使えるビルも少なくなってきた、瓦礫の丘の上で踊り続けていけばそうもなる。

稼げる時間は限界に近づいてきている、打つ手がまるで見当たらない。

だがやる事は変わらない、そして固定砲台のように虎の口から火球が放たれる。

「(大和も効果なし、回復が速過ぎる)」

成に羽赫はない、クインケを赫者の中に仕込んで発動させたのだが注意を引く以外の効果は無さそうだ。

桁違いの回復力と大きさ、この二つが最もこの竜を止める事を困難なものとしている。

「(竜退治なら聖剣ぐらいあれば良いんだが……)」

あいにくと、そんなファンタジーのような力は存在しない。だが竜はそのファンタジーの世界の怪物だ、ただのグールが、それも一個人でどうこうできる存在ではない。

東京の崩壊はその思考の間にも続いて行く、災害と戦っているのだと分からせている。

人間の届かない領域が、そこにあるのだ。

「(……いや、いけるか。金木の場所さえ分かれば)」

しかし、それが諦める理由にはならない。

「行け、金木を見つけて来い」

成は尾赫を分離させる、するとそれは意思を持ったように竜の懐へ入り込んでいく。

意思を持たせた赫子、と言うと万能感はあるが実際は簡単な伝達能力と単純な目標設定をする事で自律稼働する成の技だ。

今のそれには金木の発見という簡単なミッションが設定されている、竜は凄まじい回復力はあるが装甲はそこまで高いわけではない、ミミズのようにその腹の中を這っていけばいずれは金木にたどり着く。

だが、地道にあの巨体の中から特定の個人を探すのは困難だ。

「……っ、居た！あそこか」

しかし臭いが分かれば辿れる、その赫子の持つ知覚機能は嗅覚だ。その能力は成本体と変わらない、金木という個人そのものを発見するだけならば不可能ではない。

問題は、救出が難しい事だ。

「（赫子が死んだ、防衛機能があるのか……それだけ大事って事だろうが）」

入り込ませた赫子は金木へ近づいた途端に押し潰された、大体の場所は分かったので成り本人が掘り返せば救出は可能かもしれないが。

「……あの動きをしてたら、無理だな」

竜が動き続ける限り、成は救助の余裕ができない。

それは仮に失敗したとしても、後続の部隊でも同様だろう。

あの災害が蠢く限り、金木を助ける事はできない。

30話

動き続ける限り、金木の救出はできない。

「……無茶するか」

だが、逆に言うならば動きさえ止まれば金木は助けることができる。

問題はそこなのだが、金木の場所がわかった今なら止める手筈はある。

「(あいつにとって、私は極上の餌なら……着いてくる)」

成は残ったビルを回りながら、一度竜の視界から消える。

一瞬で上空まで跳躍をしてだ、しかし直ぐ見つかる。

そして巨大な口が成を飲み込もうと開けられる。

空中には逃げ場がない、ただ重力に引つ張られて自由落下をするだけである。

ただそれは想定内だ、むしろこれが目的とも言える。

今まで竜が成に注意を引けていたのは鬱陶しく攻撃をしていたというのも勿論あるが、捕食対象として見ているからだ。

成のような体質の存在はこの世界に2人といない、それを感じ取っているのかもしれない。

「金木を返してもうぞ」

この怪物には大量に眼があるなど色々の特筆できる情報はあるが、これから成の行う作戦で壁となっているのは大きさと回復力だ。

金木の位置はわかってているが救助は考えない、それを出来る余裕はない。なので動きを止めるのが目標だ、それだけに全てを注ぎ込む。

次の瞬間、成の右肩に人程大きな甲赫が現れ始める。

それは少しずつ大きくなっていき、赫者本体すら超えてくる。

だが竜からすればまだまだ小さい、これで切りつけたとしてもカッターで指を切った程度のダメージしか出ないだろう。

だから、まだ大きくする。

「(足りない、もつと大きさを……絞り出せ)」

そして赫者を解き、体にある全ての力を右肩に集約させていく。そ

「ナリくん、貴方が立ち向かうのは何となく分かってました」

無防備な成の腹を、旧多は蹴飛ばした。

成の口からは血が吐き出され、そのまま数メートル転がって行く。「人の死を受け止められても、失うのを分かかって動かない人ではありません。だったら止めに来ますよね？」

串刺しにされた竜を見上げながら、旧多は近づいてくる。

「不思議に思ってたんです、伊丙上等との戦闘が。激しい戦闘だったんでしょう、頑丈なラボの地下室は傷だらけでした」

覗き込んでくる旧多にやはり眼のピントは合わない、だがその顔がどんなものかは想像に難くない。

「赫子の跡が気になってたんです、未認証のクインケを使うならあり得ますけど、それを最初からオツガイにも使わなかったのも……なんか納得いかなかったんです」

旧多は成について誰よりも考えていた、隻眼の王である金木と同等か、それ以上の存在として。

悉く思い通りにさせなかった成遼太郎という男がどのような人間であり、データは信用ならないと考えての行動をとってきた。

「もう1人グールが居るとも考えましたが、貴方がかなり鼻に気に入られてるのも気掛かりでした。だから貴方がどんな偶然や手を使つたかは分かりませんが、グールである隻眼の白虎として考えたんです」

成は庭の子達と同じ半人間、その考えは間違っただけではいかなかった。しかしそれだけで説明できないことがいくつももある、それら細かい疑念が重なっていき、辿り着いた旧多の結論だ。

「(まずい、意識が……)」

成はグールとしての自分を徹底的に隠してきた、それを隠す事で有力な切り札になると分かっていたからだ。

そして明かす事によるメリットより、デメリットの方が大きいとも。

どれだけピンチに陥ろうと、命の危機が訪れなければ使う事はなかった。

伊丙の時は準備に準備を重ねたからこそ、使った。

逆に言えば、出し惜しんでも死にはしないだけの捜査官としての実力があつたのだ。

突発的に使ったのは、今回のような規格外の存在が現れてしまったからだ。

「そしたら想像以上でしたねー、まさかここまでやるとは思いませんでした。どうりで僕の想像を超えてくるわけですよ」

そして、それを見抜き旧多は成に勝つたのだ。

お膳立てをし、三思後攻した結果が今の惨状である。

竜は目的の為に必要であつた、その過程で必ず障害となる彼を消しておけるなら、しないはずがなかった。

「まあ、もう上手くいったんでいいですけど」

瞬間、成の体を赫子が貫いた。

力の入らない体では抵抗する事は出来ない、ただ力なく貫かれ持ち上げられていく。

口や傷口からは大量の血が流れ出しており、もはや呻き声すら聞こえてこない。

苦痛に顔を歪める余裕も、存在しない。

「竜を止められなくても色々する貴方なら、その後にコロツと殺せると思いましたよ。こんな風に」

そして、投げ捨てる。

腹に風穴が空けられ、致命傷であるのは確かだ。

Rc細胞の効力がまだ残っていれば助かる事も出来たかもしれないが、今のガス欠状態の成では何もしなくても勝手に死ぬだろう。

「やよなら〜」

だが、旧多は確実な死を手に入れに行く。

手に持つ日本刀型のクインケがその首に向けられ、大きく振りかぶられた。

抵抗どころか生きる力すらもはや無い彼に、それを止める術はない。

「勝手な事するなよ、二福」

どこからか、声が聞こえた。

同時に、トドメを刺そうとしていた旧多へ赫子が襲い掛かる。

不意打ちではあったが、それを見た旧多はクインケでいなしながら後退する。

「……うっわ、やっぱ生きてた」

そう言葉を零した彼の目先には、ここに居るはずがない人間がいる。

「ここいつにはまだ、借りがあるのよ」

伊丙入、彼女は赫子を構え旧多の前に立っていた。

31話

地下の戦闘は混沌を極めていた。

大量のオツガイと捜査官、そして突然現れた謎の怪物。

それにより宇井と戦っていた0番隊は散り散りになっていたのだが、気付けば皆、背中合わせで戦っていた。

「一応聞きますけど、これもそつちのですか？」

「知るか、あんな化け物」

2人は地面へへたり込みながら、周りの惨状を見回した。

荒れ果てている。一言で表すなら巨大な赫子の生物、それがあたりを抉り破壊し食い散らかしていった。

元からいた捜査官達も殆どが食われているだろう、無論そんな存在が作戦の中に組み込まれているはずがない。

だがそれは過ぎ去っていき、今の地下には何もいない。

故に一息をつけている、先程の戦いの後とは思えない程落ち着いている。

「……ハイル、お前がそつちにいるのは成の意思か」

ふと、宇井は聞いた。彼自身、彼女をよく知っているつもりだ。だからこそ彼女がグール側にいる事は自発的にはありえないと分かっている、その原因となる人物についても、それしかないと言う確信がある。

「半分くらいはそうですけど、半分くらいは違いますよ」

地下に来たのは伊丙が敗北したからだ、半ば強引に地下へ連れこられたからに過ぎない。

しかし、逃げようと思えば逃げられるタイミングはいくらでもあった。

「郡さん、私はグールになっちゃいました」

その言葉を聞いて、宇井は何を意味して言っているのか察する。赫子が使える存在になったなんて言う事ではない、人を食べて生きているというのを言っているのだ。

無論、それは宇井も元からわかっている。オツガイという存在がク

インクスとは違うという事を分かっていた、そして見て見ぬ振りをしていた。

「色々と心配もかけたし、色々とやっちゃいました」

「ひとえに、彼女を救う為に」

「有馬さんを殺した成達は許せませんが、とりあえず殴ってから話し合おうと思って。グールが人間と変わらないとか色々勝手に教えられましたし」

片腕と内臓機能を失い、有馬すら失った彼女を救う為に悪魔に頼った。だから全てを見限ったのだが、その結果がこれならば彼の手助けは救いではなかったのだろう。

実際に救ったのは、宇井ではない。

「……だから、アイツには生きて責任取ってもらわないと」

そう言うと、伊丙は上を見上げた。あの化け物が通った後のところだ、そしてそれを見て呆れたように呟く。

「たぶんですけど、アレを追ってます」

それを聞いたのは「馬鹿を言うな」と少し疲れたように呟く。

「あり得ん、人間がどうこうできるやつじゃないぞ」

大きさと言うのは次元の違いを見せつける、アフリカで一番強力な生物がライオンではなく象であるように、海で一番強力な生物が並のサメではなく鯨であるように、大きさはそれだけの差を作る要因なのだ。

しかし、それに対して伊丙は座り込みながら、言葉を重く響かせながら呟く。

「成は半グールです、人は食べてないみたいですけど」

その言葉に宇井は目を見開く。

自身の中で最も慕ってくれた部下が半分とは言えグールであったと言われて驚かないわけがない。

確かに捜査官としてのポテンシャルは感じていた、だが人間の動きの範疇にあった。

グールとしての力の片鱗すら感じた事はなかった、言われた今でも信じられない。

しかし、それが事実ならばあの圧倒的な力を持った伊丙を倒せた事にも納得できる。

「アイツのこと、何でかわかっちゃうんですよね。弱いフリしてたのがイライラするぐらい気に障ってきましたけど……ああ見えて色々馬鹿なんですよ」

だが理屈は覆ってはいない、あの大きさの敵と戦っても勝ち目はない。そんな事は成自身も分かっているだろう、だから伊丙には分かっ
てしまう。

「命なんて崇拜するから、馬鹿なんです」

そして伊丙、地上へと駆けて行った。

☆

伊丙が成を見つけるのは然程難しい事ではなかった。

竜の鼻先を走り回る影を視界に捉えたのは、巨大な剣によって竜が貫かれる寸前である。

その目印に居るに違いないと、彼女は駆けつけたのだ。

「怖い目しないでくださいよ、目の色変わり過ぎですって」

「そっちこそ、目をちゃんと赤くしてるじゃない。最初からそうだったわけね」

そして、辿り着いた。トドメを刺される寸前であったが、彼女は旧多の前に立てた。

想定外であったのは、彼が半グールの施術を受けている事だろう。今の彼女には夙成の影響で多少ではあるが身体能力が落ちている、旧多も庭出身の半人間であり、その力は未知数である。

どうしたものかと身構えていると。

「じゃあ僕帰るんで」

赫子をしまいながら、彼は背を向けて走り出そうとする。

「逃すと思ってるの?」

だが、その逃走経路を赫子で塞ぐ。

「いやいや、コロッと殺せるから来ただけですし……流石に伊丙上等とやりあっちゃうと僕も無事じゃ済みませんから」

旧多はあくまでも、おまけで殺せるから成を殺しに来ただけだ。成

を殺す事が目的の一つであっても、最優先事項ではない。

それに伊丙の実力は十分に有馬に迫るものがある、まともに戦いたい存在ではない。

「それに今際の際の言葉くらい、聞いてあげたらどうです？」

伊丙の後ろで、少しだけ液体を含んだ咳の音がした。

庇う事を最優先にしていたが、伊丙はそれを見て大きく舌打ちをする。

伊丙は旧多を殺しに上に来たわけではない、成を回収しに上に来たのだ。

だがその回収は、死体の状況では断じてない。

「僕を相手する時間なんてないんですから、空気を読んでさよならしますね〜」

そのまま駆け出した旧多をみると同時に、後ろへ振り返る。

逃してはいけない存在であったと頭の中で考えていても、叶わない事に伊丙は苛立ちを隠せずにいた。

☆

遠くから声が聞こえてくる。

いや、声の発信源は近いのだが遠くに感じるほど小さく聞こえる。

ピントの合わない目を開けると、そこには地上にいるはずがない伊丙がいた。

輪郭や声の雰囲気では感じられないが、彼女であるのは間違いない。

「何勝手に死のうとしてるのよ、ふざけないで」

腹の穴の止血をしているようだが、成自身でもよく分かる。手遅れだ、もう再生力のない今の彼には治せない程の致命傷だ。

身体中に寒気を感じるのは血が少ないからだろう、伊丙の声が聞こえるのですら奇跡である。

彼女が献身的に動いているのを見るに、何かしら地下で良い影響はあったのだろう。

何を見て来たのか、これからどうしたいのだとか、聞きたい事は色々ある。

だが、やる事がある。

「……頭、400……から、500」

「喋るな！そんな余裕あるなら治せ！こんな傷、グールなら……」
血を嘔き出しながら、成はボソボソと口を開く。

伊丙の声がまた遠のいた気がしながらも、成は無理矢理に口を開く。

伊丙がどう変わったのかを知りたい気持ちはある、だがそれは優先事項ではない。

もう助からない自分のやる事と、できる事は残っている。

「間……金木が……」

竜の方へ指を指す、ただ直ぐに力が抜けて腕は落ちる。喋る気力はもう湧かない、それどころか呼吸すら苦しい。

喉に血が溜まり、吐き出しては呼吸をするの繰り返しでもう後がないのが分かる。

「こんな時まで……何生きるのを諦めてんのよ、アンタが一番生きていんじゃないの？」

「……っ、あ」

「……喋るな、もう黙ってろ」

暗く沈むような伊丙の声は、初めて聞くものだ。

だがやはり、彼女はこれから変わって生きていけるのだと思うと少しだけ後悔の気持ちが減っていく。

生きたい、そして幸せになりたい。

それはエトにしか漏らした事はないのだが、伊丙は何かしら感じ取っていたようだ。

やはり時間という点において彼女以上に付き合いの長い捜査官は居ない、ただ長かったから勘付いてしまえるのだ。

こんな最期を迎えたかったわけではないが、有馬の意思を継いだ者の罰はこれなのだろう。

そう思いながら、意識は沈んでいく。

「こんな所で……死なせるわけないでしょ」

それ以降、声は聞こえない。

ただ何かが裂ける音が聞こえる、無理矢理噛みちぎったような生々しい音だ。

咀嚼音が響いた後、口に柔らかい何かが触れた。

その後甘い味が広がっていったのを最後に、意識は暗闇の底に落ちていった。

32話

グール達は皆、無事にトーカの先導により地上へと脱出を出来ていた。だが見えた世界は変わり果てている、巨大な竜とそれにより溢れる血と灰の匂いが東京を包んでいる。

そんな中ピエロの一人であるイトリが現れた、子山羊達を惑わす為に。王はグールを守る為にその姿を竜へと変えた、その事が皆を混沌の世界へと誘うのを子山羊達は分かっている。

だが月山の怒号により、その目は覚めた。

人を思う気持ちのあつた彼がこんな結果を望むはずがないと、そしてそれは皆の心に響いている。

だが、そうだとして何が出来るというのか。アレが何かすら皆分かっていないのだ、しかしこの世界でアレについて唯一と言っていいグール側の有識者がここにいる。

「奴の言っていた通り、アレは金木研の成り果てた姿だ」

エトは、竜について色々と調べていたグールだ。

と言っても参考程度に過去の隻眼の王について調べた時に現れた情報程度である、和修の人間と対して情報量は変わらない。

「ただ今はあくまでも、休眠期に入っているだけだな」

だが、あれの活動体系については予想ができる。

「私とて、アレについて詳しいわけではないが……あれはまだまだ成熟した姿ではない」

それを聞いて皆ギョツとした表情を見せる、あの災害を生み出しておいてまだ完全ではないというのだから。

「成が頭を磔にしたみたいだが、あの程度で止まるような存在ではないんだよ。今は消化した人間やグールで体積を増やす準備中だろう」
成とてアレを殺すつもりで串刺しできるとは考えていない筈だ、殺す事はできない存在であると知っているのだから。

だがアレをしたのは休眠期へ強制的に入れさせて一時的とは言え奴の動きを止める為だ、そしてその先の事を行う為に。

「どうすれば、止まるの?」

「核の破壊ないしは切除、それが唯一の方法だろう」

一応、竜の活動を止める方法はそれだ。しかしそれだけならば別に、成でも出来なかったわけではない。

それは聳え立つ巨大な赫子を見れば分かる、アレが核へ入り込めば間違いなく破壊は出来るだろう。

「まあ成は破壊を選ばなかった、故にその選択はお勧めしないがな」
「当たり前よ、あそこから金木を助ければ良いのよね?」

核が何かはもう言わなくても分かるだろう、それさえ取り除けば良い。

やる事は決まった、だが何をすれば良いかまでは分かっていない。
あんな巨大な生物の中から金木を探すというのは砂漠の中でオアシスを探す事と変わりない、非常に困難な事である。

だが、皆助けるという意思が変わるとエトは満足そうに微笑み歩き出す。

「話が早い、それでは行こうか」

「どこによ」

「CCG本局」

だが皆、今度こそ言葉が詰まった。聞き間違えかと子山羊達も戸惑っているが、エトはもう一度大きな声で「白鳩と手を組む」と宣言する。

確かにCCGも竜の対処に手をこまねているだろう、だからといって敵であるグルルからまで手を借りるとは思えない。

「人手も何もかもが足りてないんだ、ここらで貸してやろうじゃないか」

だが、エトは返事を待たずに先へ行った。

少しだけ静寂が訪れる、皆一様にどうしようかと迷っているのが分かる。

誰かの答えを待っているのだ、その答えを出してくれる者を。

「僕は行くよ、霧島さん」

「俺もだ、勝手に置いてくな」

「私の旦那よ、後ろ歩きなさい」

だが、そんな静寂を破り元『あんていく』メンバーは先へ向かう。答えなぞとうに出ているのだ、必ず金木研を助け出すという意味を持つて。

歴史が大きく動く瞬間であった。

☆

「出来るだけ人を集めろ！まずはそこからだ！」

「被害が広過ぎる、なんなんだあれは!?!」

「局長と連絡がつかないぞ、どうなってる！」

「わかんねっす！」

「あの化け物からRc反応が出たらしいぞ、アレはグールなのか!?!」

「なわけあるかあ！」

CCG本局では現れた竜に対して混乱を続けていた。

Rc細胞の反応が確認された事、自衛隊が返り討ちにあった事、局長の不在、様々な事態に收拾がつかない状況だった。

「(みんな相当テンパってんな、やっぱ頭がいねえと……)」

その中でも年長者である富良上等は少し落ち着いてはいるが、纏められる人間ではない。

特に頭、局長や指揮の取れる特等の不在により混乱が激しいのが問題である。

想定外の存在に対応しろと言われても対応ができる人、必要な手順を段階的に示してくれる存在が必要なのだ。

しかし、今のCCGにそんな人物は居ない。

「おいおい……マジかよ」

だが、意外な人物達が現れる。

当たり前の様に堂々と、玄関口から事情も何も話さずに彼等は現れた。

「陸自と警視庁に協力を要請しろ!!」

丸手特等だ、そしてその部下達が丸々やってきたのだ。

「市民の救出が最優先だ、CCGからもトラック出せ！」

檄を飛ばしながら、必要な指示を全て行なっていく。

皆幽霊を見たような顔をしているが、そんなことに驚いていられる暇はない。

今は幽霊よりも恐ろしい存在が現れているのだ、皆指示に従って動いていく。

そんな中、さらにもう一人ドアを蹴破って駆け込んでくる人影がある。

血みどろに汚れたコートを纏い、その体には生気の薄い男が背負われている。

「伊丙上等!？」

「うるさいわね。輸血、倉庫にあるだけ持つてきて」

同じく死んでいたはずの捜査官だ、そしてその背にいる人物にも驚かされている。

「か、彼はRN特別指定犯の……」

指名手配班であるグルルの協力者である成遼太郎だ、血が少ないのか顔どころか体全体が青ざめている。

全捜査官へ抹殺の許可も降りている存在でもあり、隻眼の王と並ぶ最重要討伐対象である。

その彼に輸血をされると言われたのだから、戸惑うのも無理はない。「こいつのデータぐらいあるだろー！急げ!!」

しかし、その問答の時間すらかけられない。

成が今も息をしているだけでも奇跡なのだ、腹には大きな傷もあり生死の境にいる彼を救えるかどうかすらわからない状況だ。

伊丙の怒号が発せられても仕方ない。

そんな様子に、丸手も戸惑いがある捜査官達にも聞こえるように話す。

「伊丙に……成か。勝手にいなくなりやがって、さっさと奥に運べ！輸血液も優先して送ってやれ！」

それを言われた捜査官達はやっと動き出す、成を担架に乗せると奥にある医務室へと運び込む。

CCGは職業柄傷の絶えない業界だ、輸血液やある程度の傷を治療する設備はどの局にも置いてある。

そして捜査官の血液型のデータなども無論、データベースの中に保存してある。

伊丙もこの状況ならば近くの病院よりも局での治療の方が良いと考えての行動だ、最適解と言っても良いだろう。後は天に祈るのみである。

だが、そんな手持ち不沙汰となった伊丙に丸手は言う。

「ちようどいい、今からグール共の兵隊でかさを増しに行くところだ。お前も来い」

その言葉に、元からいた捜査官達が手を止める。

丸手の部下達はそのまま作業を進めているのだが、そう出来るほど無視出来る問題ではない。

「丸手特等!?!正気ですか!?!」

「安心しろ、暇な時に理屈で説明してやる。今はさっさと手を動かさせ、黒山羊共にはもう文書を送ってる」

グールを討伐する為の組織がCCGだ、その組織がグールの手を借りるとするのは難しいなどという問題ではない。

だがその一言で黙らせると、捜査官達は渋々と作業に戻る。今の最優先が何かぐらいは分かっているのだ、1秒の遅れでもどれだけの人間に影響が出てしまうのかも分かっている。

「何だその顔は。成が手紙を書いてただろうが、情報は通じてなかったのか?」

だが、伊丙は啞然としている。

「梟のエトさんが対応してたから知りませんよ、丸手特等が生きてた事すら知りませんでしたし」

地上に残っていたのは知っていたし、何かやり残したことがあるとは言っていたが、そんなことまでしていたとは知らなかった。

エトは何度か地上へ手紙を送っていたので、もうその時には手筈を整えていたのだろう。

そして奥で治療を受けているであろう、彼の方へと目をやると少しため息を吐く。

色々と一人でやり過ぎだ、本気で世界を変えようとしている。その

癡死にそうになっているのだから、救えないタイプの馬鹿であるのが
また分かってしまう。

「まあ良い、とりあえずアレをどうにかするぞ」

丸手の声に、皆声を合わせる。

竜を倒す為の意思は同じだ、彼女もまた受け継いでしまった意思を
感じながら、彼等についていくのであった。

33話

水底から引き戻されるように、光が体を覆っていく。

眩しさに目をぼんやりと開けるとボケているが見覚えのない天井が目に入った、自分の最後の記憶もぼんやりとしている。

長い夢を見ていたようだ、あれからどれだけ時間が経っているのか。

そんな考えをしている成へ、隣から声がかかる。

「……やっと起きたか」

身体に力は入らないが、体を起こし声の方へと目を向ける。

支えている手の数から、複数人いるのが分かる。

覚醒したばかりなのかピントは合わないが、そこに居るのは長い付き合いなので輪郭だけで分かる。

「エトさんに……宇井さん？」

ただ、絶対に並んで座る事がない人物達が居るのに戸惑う。

「なんだ、上司の顔も忘れたのか」

「いや、そうではないんですが……」

あまりに自然な形で居られると、成もどう反応すれば良いか分からなくなる。

まだ夢の中と言われても信じられるのだが、腹にある傷の痕を感じれば現実であると確信できる。

「4日も目を覚さなかつたのは肝が冷えたが……よくやったよ、有馬の願いは大方果たされたと言っても良い」

4日、そう言われて成は最後を思い出し始める。

竜を一時的とは言え止め、旧多に殺されかけた時に伊丙に助けに来てもらった事だ。

「私は皆を呼んでこよう、心待ちにしていた者も多かつたからな」

そう言つてエトは部屋を出ていく、そして残っている宇井はホツとしたような表情で、成の頭に手を当てる。

小突いているつもりなのかもしれないが、生憎と払い除ける力はまない。

「先輩から全て聞いた、馬鹿な事をしてたものだ」
どうやら、全てわかっているらしい。

平子も当初の目的を完遂したからこそ、宇井に全てを打ち明けたのだろう。

「半グールの事も、全部聞いた。気づけなかったよ」

宇井を誘わなかった理由を聞いた時は叱られるからと有馬さんは言っていたが、意外にはぐらかされたのではなく本音だったのかもしれない。

机の上で行う万年筆一騎討ちも宇井だけは有馬を叱っていたのを思い出す、だが終わった後なのか少しだけ叱るのもめんどくさそうにしている。

「ただお前のおかげか上手く共同戦線を敷けている、最初は皆戸惑っていたがハイルがかなり乗り気だな……」

「彼女が、ですか」

宇井はそのまま眠っていた間に起こっていた事を話し出した。

伊丙が成を運び、一命を取り留めたこと。半グール故に助かったとも伝えられる。

グールと捜査官が手を組んだ事、その時エトが『覚悟を見せた方が良いだろう』とグール側に捜査官とは話をつけていた事を知らせずに、真剣な雰囲気を作っていた事。

またその話し合いで矢先に立っていたのは伊丙に鈴屋、そして亜門といったどちらをも知る人達で、上手く纏まったこと。

その後、竜から金木を救出する作戦が始動する。

成が見つけた付近を重点的に金属探知機を用いて金木を搜索、道中謎の人型の怪人の邪魔が入るも無事に救出は出来たらしい。

今は脳波が確認されており生きているのだが、別の部屋で寝ているそう。

とりあえずは一息つけているらしいが、今は被災地である東京の都民を保護している状況だそうで、人手が足りないと嘆いている。

「あいつがあそこまで変わったのも、お前の影響か……私では出来なかった。上司失格だな」

「……彼女を御せる人なんて、会ったことありませんよ」

ただ、宇井的にはやはり伊丙の変化はかなり印象深い事らしい。あれだけ破天荒な存在が多少なりとも丸くなればそう感じる、そこまで変わるとは成も思わなかったのだから。

有馬の危惧していた障害には、今の彼女はならないだろう。

「無事で良かった、だが私に一言も言わなかったことが許せん。色々心配かけ過ぎなんだよ」

すいませんと言う成の頭をぐしゃぐしゃと撫でるように掻き回す、上司らしい行動なのかは分からないが、成の気も悪くなさそうだ。

今まで敵にしていた辛かったのは宇井だけでもない、平子や成も多少なりともそうだったのだから。

今の形に戻れて良かったと言う気持ちも、大きいのだろう。

だが、ふと撫でる手を止める。

そして真剣な声音で、問いたです。

「……まさかだと思うが、目が見えないのか？」

宇井は捜査官だ、それも凄腕の。

先程から成の視線に違和感を感じる事も不可能ではない、むしろ長い付き合いであれば気づいて然るだろう。

それに対し、成も笑いかけているが本気で心配をされていればその笑いも止まっていくな。

「……そうですね、ピントが合わなくて」

最初は覚醒したばかりなのでその影響かと思っていたが、治る様子がない。思えば旧多に殺されそうになった時にも目は見えていなかった、恐らく長時間を赫者化した上で限界を超えて赫子を生成したせいだろう。

有馬も言っていた、力には代償があると。

だがあの力の代償が視力の低下だけならば、軽く済んだものである。他の五感に違和感もなく、身体も重いだけでこれから治療できる範囲にある。

だが眼が見えないというのはやはり影響が大きい、ヒトの得る情報量の80%は視覚からだ。

少なくとも、今すぐには慣れそうにはない。

だが、そんな成を見かねて宇井は胸の内ポケットから何かを取り出す。

「付けてみるか？」

成には見えないが、それをぼんやりと輪郭で捉えられる。手に収まる程度の大きさの何かであり、察しはつくのだがなぜそれを持っているのか分らない。

「験担ぎに持っていたが、少しはマシになるかもしれないぞ」

眼鏡のようだ、それも有馬が生前付けていたもの。

ぼやけているせいで上手く掴めないが、宇井は顔にかけてやる。

かなり度が強い、慣れないせいか頭が酔ってくるが視界はハッキリとしている。

幸か不幸か、ピントは大体であるが合っているようだ。

有馬はそもそも付けていても殆ど見えていなかったと成は聞いていたが、一応は目が見えていた頃と遜色がない程度に見えている。

「良さそうだな、これは渡しておくよ。お前に預けた方が有馬さんも喜ぶだろう」

そう言つて、どこか満足そうに宇井は微笑んでいる。

上司らしい事を出来たからか、有馬の意思を目に見えるもので継がせられたからか分からないが、久しぶりに見せる笑顔であった。

それだけ苦しんでいたのだが、成もここまで純粋な表情を見るのも久しぶりである。

自分がやって来た事はまどろっこしくも、間違っていないかったのだと思うと救われる気持ちになってくる。

「ただ、何処か雰囲気……」

「郡さーん、来ましたよー」

宇井が何かを言いかけっていると、陽気で鈴の音のような声と共に誰かが近づいてくる音が聞こえる。

「やっと起きたんですか、こっちがどれだけ忙……し、く……」

伊丙だ、最近は戦闘をしてばかりであったので見綺麗な姿で見るのは久しぶりである。

12歳の頃とはもはや別人である、顔や身体も女性らしく成長している。ただ目付きは昔と変わらない鋭さがある、昔よりも精練されてはいるがそこは変わらない、のだが。

何故か、その目の鋭さが今は消えている。

「……伊丙？」

何故か成を見て静止しているのだ。

声をかけるも、反応はない。

ただ顔は少しずつ赤く染まっている、視線はなぜか右往左往しており普段とはかなり様子が異なる。

「わ、わわ」

「わ？」

「わ……私！ちよつと、やり残した仕事があつた気がするので！」
すると、何処かへ走り去って行った。

途中、転んだ音も聞こえておりそれを心配する声まで聞こえてくる。

「……どうしたんでしようか」

成は伊丙が居なければ死んでいた存在だ、その礼も言えなかったのだが仕事ならば仕方ない。

ただ顔色や動悸の様子がおかしかったので、疲れているのかもしれない。

彼女は優秀な捜査官だ、色々な所で仕事を任せられているのかもしれないが、少しぐらい休ませても良いのではないか。

そう進言しようと成は宇井を見上げるのだが。

「あの、宇井さん？どうしたんですか」

「何、少し空を眺めたい気分だな……」

「……窓一つない密室ですけど」

何故か虚空を見つめ続ける宇井に、皆疲れているのかと察し、自分も早く復帰せねばと心を引き締めるのであった。

34話

最初に起きた時、何から話しかけようか。

成が眠っている間、暇な時間に伊丙は考えていた。

勝手に死のうとしていた事を責めても良い、無茶をすればかりと罵れば恐らく気分が良くなる。責任を逃れて皆が助かれば良いなんて馬鹿な考えをしているのを理解させれば、多少なりとも彼のまた弱気な姿が見られそうだ。

彼女自身を食べさせたのを伝えても良い、彼が生きていけているのは人肉を食べたからに他ならない。生かされた事と生かした事で貸し借りをチャラに出来るし、人間側である彼がグール側の存在であるとも本質的に理解をさせられる。

何をしても良い、借りを返したというのは間違いない事実だ。

有馬についてや成のこれまでの行動については平子やエトから聞いている、その上で馬鹿と罵るのも悪くないだろう。

そんな事に振り回された人間の1人なのだから、大きな貸しを作る事も出来る。

成と起きた時に話をする、一度殴ってから。その為に彼女は成を助けたのだ、ただ一応病み上がりなので言葉で殴るだけである。

「やつと起きたんですか、こつちがどれだけ忙……し、く……」

そんな考えをしながら、4日も寝ていた寝坊助野郎を拝みに行く
と。

「……有馬、さん？」

若かりし頃の有馬が目の前に現れた。

しかし、有馬は死んでいるしそもそも若い姿で現れるはずが無い。
そして、その答えはすぐにわかる。

「……伊丙？」

少しだけ、肩が震えた。

いつもの自分の思うように動かせている体が、自分の思い通りに
なっていない感覚に陥った。

ベットにいるのは成だ、そして何故か有馬の眼鏡を付けている、そ

れだけのはずだ。

なんで着けているとかどうでも良いことで、それだけなのだ。

しかし、よくよく考えてみると伊丙は成という有馬の猿真似野郎を認識していても、その顔については特に興味を持った事も無いので、深く認識をしていなかった。

知識としてはもちろんあるし、顔を見て名前を答える事はできる。ただその事について意識を持った事はなかったのである。

「(な、成があんな有馬さんみたいな男なわけないじゃない。顔がちよつと似てるからって関係ないし、私はこいつの顔をぶん殴りに……な、殴りに……)」

面影がある、どこるか瓜二つか。

多少なりとも違う所はあるが、それは身長や骨格の違いなどの影響だろう。

血が繋がっていると言われても信じられる、眼鏡をかけただけで大きく印象が異なってしまうている。

「(べ、別に私は……)」

頭では分かっているつもりであるが、体はそうでは無い。息遣いは思い通りにならないし、心臓の音も良く聞こえてくる、その上で体温も少しずつ上がっていつているのだ。

分かっている、信じられない事に気がつき始めている。

今まで成遼太郎という眼鏡を通して彼を判断していただけで、彼を見ていなかったという事実いだ。

無理はない、そもそも伊丙にとつての成という人間はただの愚鈍な部下でしかなかったのだから。

地下では情けなく胃の中の物をぶちまけ、初陣とは言え何もできていない姿を見れば年上だろうと、哀れな視線を送ってしまう。

そんな姿しか知らなかった、そして戦える存在として知ってしまったのはやはり、彼と戦った時だ。

梟と戦った時やSレートを討伐した位では、噂の誇張程度にしか耳に入ってこなかった。

そして、戦う意味を知った。

そして、彼という人間を知った。

だがこれだけならば、成という人間の認識を改めただけで大きくは変わらない。

何よりも、有馬と重なってしまった事が何よりもまずい。

「わ、わわ」

「わ？」

何を言うつもりだったのか、頭の中は空っぽになっていた。

そして、自然と彼の口元へ目がいった。

成を助ける為に、彼女は自身を噛みちぎって食べさせた。しかし飲み込む力すら感じられなかった彼に、彼女は口移しで食べさせた。

ファーストキスだとか口移しだとか、その時は全く気にしなかった、何故ならそんな事を気にするような対象ではなかったから。

ただ、今は違うようだ。

「わ……私……ちよつと、やり残した仕事があった気がするので！」

気付けば残した仕事など無いのに、その場から逃げ出した。戦略的な撤退だ、この体も頭も思い通りにならないから、体制を立て直しに行くのだ。

「(無理、絶対無理！分かんない、こんなの知らないし……!)」

誰に対しても抱いた事はない、そんな環境でもなかったしそんな相手もいなかったから。

世界は残酷だが、彼女は今ほどその狡さを感じる事はないだろう。

有馬というのは彼女にとって尊敬する対象であって、恋慕の情を抱く存在ではない。

それは手の届かない存在であると認識している以外に、そうはならないと分かっていたからだ。

だが『貸し』やら『責任』を持ち出して手に入るかもしれない存在ならば話は変わる。

ただ、そんな事まで認識できるほど経験もない彼女はその気持ちに振り回されながら、その場を後にするのであった。

☆

「復帰が早いな」

宇井は今しがた、検査を終えた成を見る。

昨日に起きたばかりとは違い顔色は良く、眼鏡も良く似合っている。

ぱつと見れば若かりし頃の有馬にも見えるかもしれないが、よく見れば別人であるのがわかる。

自分の後輩に有馬が居たらこんな感じかと思いつながら、宇井は椅子に腰掛ける。

「検査の結果はこれから出るが、その調子なら大丈夫だろう」

「むしろ、ご飯を食べて疲れが取れました。治療前より元気ですよ」

この回復の速さはグールの部分が存在するという理由もあるのだろうが、本人も相応の力を持っているからでもあるだろう。

とても生死の境を彷徨っていた人間とは思えないが、回復したのだから良い事だろう。

「ハイルの所にも顔を出してやれ、まだちゃんと顔も合わせてないんだろ？」

ただ、今後の彼はどう扱っていくのかは審議にかけられている。

今のグールとの協力関係も、あくまでも目の前に共通の敵がいたからだ。

半グールという特大の情報と捜査官としての実力の高さ、それによつてどう扱えば良いのか上も悩んでいると宇井は聞いている。

一応扱いに悩んでいるのは、彼だけではないのだが。

今はそんな事を彼には考えて欲しくはない、それよりも今は休んで欲しいぐらいだ。

「私は別に会いたくないわけじゃないんですが、彼女忙しいみたいで……」

成は伊丙に暇さえあれば、というほどではないが数回ほど彼女へ会いに行っている。

だが何故か顔を合わせてもらえない、食事の時間が一緒に出来ないほど忙しいようで話す時間も取れていない。

今の事情を考えれば仕方ないのであると理解してはいるようだが、少し寂しそうに見える。

「なら、暇つぶしにデートでもするか？」

ふと、扉から声と共に入ってきた人がいる。

その女性はお忍びで外へ出かける有名人のようにサングラスに帽子を付けているが、その身なりと背格好で誰かはすぐに察しがつく。

「デートって、何をするんですか……エトさん」

エトだ、グール側のまとめ役を王が不在の間請け負っていると聞いている彼女が暇ではないと思うのだが、良いから良いからと手を引いてくる。

「お前は功労者の1人だぞ？ 頑張ったんだ、少しぐらい休んでも構わんさ」

デートというのは冗談にしても、散歩に付き合えという事だろう。

宇井もその意見に対して特に思う所はないように見える。

「いや、この忙しい時期に頑張らないと……特に伊丙には怒られそうですし」

「……今の彼女にそんな余裕は無いと思うがな」

「そんな暇がないくらい忙しいんですか……？」

だが、変な所で生真面目さが抜けなくなつたのは有馬のせいだろうか。この時期に自分だけのんびりしてられる程、彼の神経は凶太くない。

だが病み上がりの人間を酷使用する程逼迫もしてない。

「なら、見回りで良いさ。警邏任務という名目なら、文句を言う奴も居ない」

だから便宜上、仕事のように動かしてしまえばいい。

病み上がりの人間を酷使しても、良い顔はされない上に仕事も安心して任せられない。

一応、確認の為に成は宇井を顔を見ると。

「そうだな、部屋に籠りっぱなしというのも良くない。それに今の東京は見ておいた方が良くい」

☆

快く了承された成は、納得するお新調された捜査官の服を着ている。

と言ってもCCGの手帳は無い、その事についてはまだ準備中とは言われているが、寝ていた間に色々終わってしまった、まだ本当に終わったのかと信じられないほどだ。

「金木、目覚めて良かったですね」

ただそれでも、今の瓦解した東京を見て丸く収まったとは言えない。

「ああ、彼もこれから忙しくもなるが良かったよ」

金木が都民を虐殺した、そう捉えられてもおかしくないのが今の状況だ。

被害者の数はまだ測定出来ないが、それほど多い難民がいる。

家を失い、仕事を失い、家族を失った者達が今は大勢いるのだ。

その者たちからの不満は凄まじものだろう。

「竜も金木が取れば、妙な事にはならないだろう」

だが、あれはどうしようもない。人災によって生み出された天災なのだから、局員も皆それで納得している様子だ。

実はエトも金木ほどでは無いが理解をされ始めており、まだ不満が溜まる局員も居たが、頭を下げて謝罪している姿を成は見ている。

時間はかかるかもしれないが、グールと人間の関係は少しずつではあるが変わり始めているようだ。

しかし、そう単純な問題でもない。

「有馬さんの言っていた、全ての人が喰種になるって話ですか。竜が現れた後に起こるとは言ってましたが、彼自身もどうなるかはわかってませんでしたからね」

「このまま終わってくれば、助かるんだがな」

2人はこのまま終わるとはかけらも信じていない。

旧多は自身の幸せの為に竜を作ったというが、その幸せについてはまだ分からないでいる。

実際に竜の核となった金木に聞けば何か心当たりがあるかもしれないので、散歩後に行ってみようとは思っているのだが。

これから何をしてくるか分からないでいる、それはエトも同様だ。

しかし今の成は自分の心配が優先だ、平気に感じるだけでまだ完治しているとは言いきれない。

万丈というグールの治療もあって腹の傷は完全に塞がっていても、まだ視力の回復に兆しはないのだから。

そう思いながら、街中を徘徊していると生々しい音が聞こえて来る。

街の外れにある暗い道の奥、そこから立ち込める臭いと共に2人は足を止める。

「喰ってるな、作法も知らん奴でまだ生き残っているとは思わなかったが」

「ひいつ!」

臭いの元へ辿れば、足音に気付いたのか後ずさる影が見える。

まだ若い少年だ、中学生程度だろうか。

人を殺したわけではないようだが、まだ新しいので先の事件の影響で自殺した者の死体のようだ。

ただ食べていたのには違いなく、口周りにはベツタリと血の痕が付いている。

「…………ご、ごめんなさい!殺さないで、殺さないで!」

「私達は捜査官でも無いんだが……いや、君は捜査官か」

「どうなんですかね……君、親や知り合いの名前は言えるか?」

情緒が不安定な者を相手するのは捜査官よりもセラフィストの仕事であるのだが、まずは親や知り合いの名前を出してもらおうと声をかける。

エトは全てのグールの名前ぐらいは把握していてもおかしくない存在だ、現に黒山羊の庇護下にあるグールは全て暗記している。

生き残っていれば、その者たちへ送り届ければ良いと考えてのことなのだろうか。

成さ話している最中に、違和感が出てくる。それは隣にいるエトも同様のようだ。

「エトさん、この子の匂いグールとは違う気がします」

日常的に人を食べるグールの匂いと、少年の匂いが違うのだ。

言ってしまうえば、普通の人間と大差がない。

今は人を食べていたが、その臭いは強烈なだけで人間の匂いがするのだ。

そして、エトも着眼点こそ違うが違和感を感じている。

「……お前、人間か？」

服装の身なりの良さに違和感がある、社会的な地位がある中でグールとして生きるのは難しい。行動に制限が生まれるというものもあるが、表世界で生きていくのにリスクがある。

事実殆どのグールはオツガイに殲滅された、そして生き残りが地下に向かったのだ。

東京の地上にグールが生き残っているには、道端で直に食べているのを鑑みれば色々と作法も知らない様子に見える。

だが、問答を続けようと成が近づこうとした時だ。先程まで人つ子1人見当たらなかったこの場所に、大量の人影が現れる。

少年はそれを見て走り出してしまったが、2人は逃げてもらったほうが都合が良かったので見逃す。

「……落とし児か、概ね奴らの影響だとは思うが」

「話には聞いてますが、やらざるを得ない感じですね」

現れたのは人型の怪物だ、以前竜から金木を助ける時にも現れた奴等であり、その生態は当然不明だ。

しかし、転がっている肉に齧り付く辺り捕食が目的のようだ。

「崩壊期に入ったと聞いてるんですが」

「私も知るか、だが崩壊中なだけでまだ活動はしているという事だろう」

成は近づいて来た落とし児を徒手空拳で圧倒した後、後ろへ回り込んで首をへし折る、エトも羽赫で敵を粉碎していく。

2人からすれば大した敵ではない、赫子を使わずとも成ならばこの程度の敵は素手で十分だ。

しかし一般人からすれば脅威である、故にサンプルとして外傷を少なくした落とし児を捕縛したのだが。

「成！ 離れろ！」

エトの声が届く前に、成の締めていた怪物は爆発した。

だがそれは成も寸前で予期していたようで、直撃はしていない。

「自爆するのか、以前の個体にはなかったが距離はとった方がよさそうだな」

「そうですね、ただ威力はあまりないようです」

爆破は直撃こそしなかったが、したとしても人間でも耐えられる程の威力だ。問答は数だ、多過ぎる。今の捜査官やグールの数を合わせても、総数は恐らく遥かに多い。

現に金木救出の際は概算ではあるが、捜査官達の100倍の数がいなのだ。

他の所にも現れていないはずがない、ただでさえ人が足りないこの時に呑気に時間を過ごしてられない。

「エトさん、離れてください」

瞬間、成は赫子を展開する。甲赫と尾赫を融合させた、剃刀のような赫子だ。

それは辺りに散在する落とし児を瞬く間に粉碎していく。所詮数が多いだけで、Bレートにも満たない個体が殆どだ、成でなくてもこちらの班が一つあれば殲滅出来るだろう。

だが、成は何故かこの結果に驚いている。

「無茶するな、病み上がりなんだぞ」

「……いや、ここまで出す気は無かったです」

エトはため息を吐きながら奴らの死体を見ているが、成は今の自分に違和感を感じている。

病み上がりなのは自分で理解している、だから最低限を出す予定だったのだが。

「検査結果、まずいかな……」

明らかに、何かが変わった感覚を覚えながら2人は局へ帰還していった。

決戦編

35話

本局に戻った2人は、ある異常な光景を目にする。忙しなく働く局員達の他に、医療従事者が大量に控えている光景だ。

そしてその医者達も、非常に忙しなく動いている。

原因は言わずもがなである。

「これがグール化、ですか？」

「だろうな、ただこの数は恐ろしいが……」

患者が大量に運び込まれており、その何人かは眼が赤く染まっている。赫眼の発現だ、しかも全員人間であるのは臭いから察せられる。

そんな人間が今見えるだけでも数十人、これから増え続けていくだろう。この惨状に対してどうしたものかと、気圧されていると2人に気付いた研究員が駆け寄ってくる。

「2人共、ご無事でしたか」

「一応はな。外で落とし兇と戦った、それが原因だとは思いますが状況を教えて欲しい」

「分かりました。ただその前に検査を受けて下さい。2人も影響があるかもしれません」

2人はそのまま研究室、と言っても臨時で作られたラボに比べれば簡素な施設へと連れて来られる。

採血を行うと、研究員はそのデータを調べるようだ。

10分もかからないと言われ別室で待たされる、しかし何もせずに待つというのも2人、特にエトは耐えられそうにない。

現在進行形で仕掛けられているのだ、行動全てが10分ラグが出来ると考えればその気持ちは分からなくもない。

「すぐに結果は出ますが、その間にこちらをご覧ください」

だが2人を見かねてか、はたまた戦力として数えてか、そう言っただけで2人に端末を渡す。自動的に映像が再生される、背景はどう

やら東京らしい。

「旧多か、それに落とし児？」

そして、旧多が自衛隊と落とし児の戦闘を配信している。自衛隊が劣勢であり、無惨にも食い散らかされている。

だが驚くべきはそこではない、自爆した落とし児の解説だ。

「……想像より不味いな」

「ちなみにどこら辺が？」

「奴等が直接手を下していない」

そしてエトが本気で思案を始める、それだけ余裕がない状況という事だ。

今の捜査官が手一杯になっている現状、敵は自由に動かせる駒がVとピエロで最低二つ存在する。

この二つをどうにかできる程、今のCCGは強くない。少なくとも、同時進行で全てを解決できる余力は存在しない。

「先手を取られ過ぎている、このまま行けば……」

破滅する、とでも言うつもりだったのか。しかしそれは駆け寄って来た研究員を気遣って止める。

基本的に受け答えなどを他人に任せず自分で行うエトでも今は消耗しているのか、無言で考え続けている。

その様子に研究員は少し躊躇しているのです、成が対応する。今のエトの邪魔はしない方が良くと考えての事だろう。

「この動画、見せたって事は裏は取れてるんですね」

一応、確認の為に成は聞く。

この動画がただの混乱目的の作成では無いと感じているが、それを本職の者達へ確認を怠ってよい理由にはならない。

エトの思案に少しでも役立てば良いという問いであったが、その顔を見るに残念ながら事実のようだ。

「元局長の言っている事は恐らく正しいです、捜査官でもクインクスの米林さんが発症しました。現在CCGは病院と連携を取りつつこのグルル化と落とし児について対応中、ですが少しパンク気味です」
毒を振り撒く、自爆した際に威力は低いとは感じていたがその真意

は仲間作りであった。

東京に多数配置されている卵管、そこから生み出された怪物はまだ増え続けているだろう。

この対処は極めて難しい。毒は広範囲ではないとは思いますが、空気中にも散布されているのでその場にいるだけでグール化は進行していく。

つまり戦闘を行なったものを全員、グールにする。

クインクスの捜査官ですらこの影響を受けるのだ、グールも無影響とら考えられない。

そして、成はこの毒を浴びている。最悪隔離されるかと、成も考えていると資料を片手に別の研究員がやってくる。

「結果出ましたー！」

2人の結果が出たようだ、ただ数値上の結果を見ても分からないので資料を簡単に意識していく。

「エトさんは問題ありません。ただ成さん、貴方はROSを発症します」

やはりか、成はその結果に納得する。起きたばかりの時の検査結果と比べられるとその数値の差は明らかであり、ROS……つまりグール化が進行しているという事に他ならない。

ならない、のだが。

「……してる筈ですが、異変は無いんですか？」

成は少なくとも、自身をコントロール出来ないほどの状況に陥っていない。

担架に固定される程の影響が見られない、少なくとも大多数の患者とはまるで様子が違う。

「赫子の出が良過ぎたぐらいですかね、問題ないです」

成自身が体感じた異変はその程度だ、平時とさして変わらないように見える。

人間の肉を見ても美味しそうと感じていないので、食欲的にも問題はない。

「グールであっても許容値があると思うのですが、流石にこの数値は

……」

そう言って資料をめくっていく研究員だが、頭を抱えている様子だ。ただでさえ今の状況に混乱しているというのに、例外が現れてくるのだから。

一応まだ2人には告げられていないが金木には耐性がある、竜の核となっていたのだからその結果は不自然ではない。

だが、成は竜と戦いこそしたものの半グールでしかない。それならばクインクスもほぼ同じ条件の筈だ、影響がないわけがない。

「……ワクチンは作れそうに無いですね」

しかし、資料を読み続けた研究員の答えは、あまり良く無いものらしい。

「恐らくですが、成さんはRc値を完全に掌握しています。それでROSによる不規則なRc細胞の発現もコントロールしている……のかもしれない」

推測でしかない、Rc値のコントロールが正確に出来ているという情報ぐらしかデータからは分からない。

だが耐性があるわけではないのだ、むしろ耐性はグールよりも弱い。人間として考えれば多少は強いがそれまでだ、金木のパターンとは異なる。

「正直言ってなんでそんな事出来てるのか、どうやってるんですか？」

「……なんとなく、かな。正直意識した事があまりないから」

成自身、特別な何かをした覚えはない。

感覚的に捉えているだけなのだ、捜査官としては頭を使って技術に体叩き込んだがグールの技術に関してはそうではない。

ほぼ独学で行って来たというのもあるとは思いますが、理屈で考える前に体が順応してしまうと言ったほうが適切だろう。

「こいつはナチュラルな天才だ、あまり理屈めいた答えは事グール関係では期待しない方がいいぞ」

その言葉に「これだから意味の分からないタイプの研究が難しいのに……」と愚痴を漏らす研究員。

ただでさえ頭が絡まっていそうな彼らへ、成は心の中で謝っておく

のであった。

36話

「それで、この顔ぶれを集めたのは何か進展があつたという事か？」
「今、捜査官は手一杯というのがありますが、現状での報告をしたかったので」

元嘉納の研究者達のまとめ役、西野貴未は錚々たるメンバーに声をかけた。

旧多の配信から20時間程度経つただろうか、集まっているのは金木を筆頭とした黒山羊の幹部メンバーに丸手と共に動いて金木の親友である永近、そしてエトに成、最後に伊丙だ。

狭い部屋に呼ぶには人が多いのだが、それだけ今の情勢の最前線に立っている者達でもある。

ちなみに伊丙が呼ばれたのは暇だからだ。いやCCGは現在進行形で猫の手も借りたいのではあるが彼女特有の仕事、戦闘任務が今はないからだ。

落とし兎と戦うのも今は自衛隊が主導となっている、彼女自身がまだ手が空いているので参加しているのだ。

「現在ROSの被害者は1000人以上、既にほとんどの患者が食物を受け付けていません。点滴で凌いではいますが、夙成の改良が間に合うかどうかといったところですよ」

夙成から得られた酵素はグルルに人と同じ食事を可能に出来るかもしれないといったものだ、ROSの根本治療にはならないが時間は稼げる。

しかし、仮に完成しても量産化させるのには時間がかかる。被害者が増えていけば、対応は間に合わないだろう。

最悪の場合では、グルルとして駆逐する可能性すらある。

「少なくとも、今のペースで増え続ければどうしようもありません」

だが、そんな弱音を吐くためだけにここに集めたのではない。

「対応策は？」

エトは本題に入ると、急かすというよりは単に話しやすくしたただけだろう。ただ皆が気になっているのはそこである。

「東京にある卵管は全てで9つ、1つは崩壊期に入っていますが残り8つの中で毒持ちが生まれると推察される卵管は絞れました」

そう言つて、地図を示す。見てみれば毒持ちの出現スポットは19区の卵管を中心に広がっているのが分かり、明らかに何かがある事が分かる。

「そこは地下に確か空洞がある『厄介事』が潜むにはちようどいいな…」

「なるほど、グールである我々なら調査にいけるって事かな？」

「ええ、ですが防疫対策が万全になればの話です。いくらグールでも許容値を越えれば何かしらRc細胞に影響が出る筈です」

人よりも耐性がある彼等が調査に向かう方が合理的である、しかし現地で何があるのかは分からない。

そこらを爆撃でもすれば手っ取り早いのだが、原因が分からないまま行えば解決したかどうかとも判断が出来ない他に、毒持ちが再来した際に対応ができない。

「なので慎重に」

調査の準備を進めて行く、とでも話そうとしたのか。その声は外から聞こえてくる爆発音に遮られる。

「爆発!？」

窓から外を見てみると爆炎が立ち上っているのが分かる、そしてその奥から黒服の集団が警邏中の自衛隊員を殺害して行くのも。

「ちっ……Vか、浮いた駒を動かして来たようだな」

エトはタイミングのいやらしさに頭に手を当てる。

今はCCGがようやく毒について情報が固まって来た時だ、放置できるものでもないので人が必要になる。

奴らとの戦闘は確実に捜査官ならば半数近い被害は出る、それだけの力がある。

だが攻めて来た理由が不明だ、混乱させるだけなら金木救出時に攻撃をしていてもおかしくない。

そして頭を抱えているのは、彼女だけではない。

「もしかしたら……『何かに気づいた事に気づかれた』のかもしれない

ん、でも早すぎる……」

西野もタイミングの悪さに、むしろそれが理由だと考える。

敵の目的がそれならば、邪魔をしに来た以外に潰しに来たという理由ぐらいしか考えられない。

世界の支配者としての地位を望む彼等、Vならばタイミングとしては最良だと判断したのかもしれない。

「伊丙、クインケは？」

「鎖骨と大和がアンタの部屋にあるわ」

「僕たちも行こう」

成や伊丙、戦闘の出来るグールの面々は金木を含めて皆迎撃に向かうとする。

まずは目の前の障害を取り除くという事だろう、毒をどうにかするのはその後であると。

「ちよっと待った」

しかし、その動きに待ったをかける人物がいる。

「向こうが『来る』ってことは『来て欲しくない』ってことだったりしねえか……」

永近だ、彼は丸手の裏で色々と柵を巡らせて来た人物である。

和修はグールであるという仮説を与えた人物でもあり、その頭の回転力と洞察力は成では足元に及ばないほどだ。

実際、成がラボを襲撃した時の思惑も見透かされていたからこそ上手く合流できている。

「毒の元は、今調べるべきだ」

その永近が、今行くべきであると言う。

未知な部分が多く、何が起こっても不思議ではない卵管への調査を強行するべきであると。

Vは強敵だ、しかしCCG全てを落とせるかと言われれば難しい筈だ。今のCCGには鈴屋に伊丙がいる、金木や成が死んでいると思われていたとしてもグールの戦力もある。

それこそ潰す事に重点を置くならば本部が手薄になるタイミング、卵管の調査を待つてから数が分かれた時に攻めた方が効率は良い。

だがそうしないのは、時間稼ぎのためであると永近は読んだのである。エトもその考えに肯定の意思を込めて頷く、周りも後に続いて頷いて行く。

「調査は僕が行きます、耐性があるなら行けるはずです」

金木は毒に耐性がある、この中で最も調査に適した人間だろう。そして戦闘能力も随一だ、何かが起こったとしてもどうにかできる力がある。

「なら僕たちは護衛に」

「いえ、大勢は目立ちます。少数で向かうべきです」

しかし、黒山羊まで連れていけば逆に調査班が殲滅される可能性がある。

攻めて来たVや未だ見えていないピエロの兵隊を送り込んで潰すことはいくら金木と言えど不可能ではないはずだ。

だからと言って金木だけでは土地勘もないので無理だ、道案内役が1人は必要である。

そして、何が起こっても金木の足を引っ張らないだけの力を持つていなければならぬ。

そして、永近や西野が変わってエトが指名する。

「成、お前が行け」

病み上がりとは言え既に万全の状態にまで回復した成を、彼女は選んだ。

「毒をなんとか出来るし、土地勘もある。適任だ」

その力量は問題ないだろう、この中で3本の指には間違いなく入っている。

そして案内役としても適切だ、エトがアオギリを率いていた時は場所を選ぶ事が難しかったので、鍛錬場所は地下の何処かとなっていた。迷わないように地下には詳しくなっている。

グールとしての機動力もあるので気づかれずに素早く毒の元まで辿り着く事ができるだろう。

「……分かりました」

だが、少し不服そうだ。

頭の中ではそれが正しいと分かってはいるみたいだが、情情的にはここに残って共に戦いたいのだろう。

しかし毒に対して対応出来るグールは彼と金木しかないのだ、この2人以上に調査の適正がある者たちはいない。

「安心しろ、ここには私がいるだろう。」

「……気にしてるのはそこですよ」

宥めるようにエトは言うが、むしろ成が心配しているのは彼女である。

彼女は強い、グールとしての実利は疑うまでもなくアオギリを率いていただけの頭の強さも持っている。

しかし今のエトは満足に人を食べていないので万全の状態ではない、旧多の傷もまだ完治していない程だ。

樹海で得た食料で完治には向かってはいるが、均等に分けて半年を賄うものだ。1人だけ多くもらうわけにはいかない。

そして何よりも、無茶をする事が多くなっていく彼女をすぐに助けられる場所に居られないのが気にかかるのだ。

それを言われた彼女は耳が痛そうにはするが、純粹に心配されているので少しだけバツが悪そうだ。

だが、その次の瞬間に大きな破裂するような音が鳴る。

「い、伊丙……力込めすぎじゃないか？」

伊丙だ、2人を見兼ねてか成の背中を大きくはたいたのである。

その彼女の顔は少し不機嫌に見える、ため息もついているし成はなぜかと顔を伺うと。

「私が居るんだから心配なんてするんじゃないわよ、さっさと行ってこいー」

そう言って、また背中を叩いて来た。

今の彼女は捜査官でも鈴屋に並ぶ実力者である。成から受けた傷はとうの昔に完治し、グールとしても旧多を戦わずして引かせる程に強い。

最近はあまり成も話せていなかったのだが、今の彼女は昔とは大きく変わっている。

精神的な変化は特に大きく、その変化は姿勢に大きく出ている。そのおかげか鈴屋と並んで次の有馬として見られているほどだ。

「何よ」

その伊丙を見て、成は納得する。

「……それもそうか」

彼女が居るなら問題ないだろう、現に成も救われている。

そう言われて彼女は「……分かれればいいわ」というが、何故か成に顔を合わせない。

だがどうかしたのかと聞いてみる時間もない。

「行きましょう、成さん」

金木の方はもう色々と済ませたようだ。

続々と人が集まって来ており、その全てが金木を慮つての集まりである。

守るものがある人間として成長している彼の強さは以前とは比べものにならない、有馬を倒した時の金木より今の金木の方が強い。

そして、成に与えられた使命の一つはその命を落とさせないこともある。

父になる彼の命を守れるのは、彼自身と成だけだ。

だが守るのはそれだけではない。人とグールの命を背負い、2人は行くのだ。

「皆、生きて会いましょう」

成はそう言うと2人は部屋を出た、後ろは振り返らない。

生きて帰る事を願い、信じた者達はやるべき事をする。

歴史の分岐点が動かされる瞬間であった。

37話

「成さんって、本当に半グルルだったんですね」

金木は当たり前のように人よりも圧倒的な速さで先導する成を見て、改めて実感する。

「有馬さんには、なぜか見抜かれてたけどな」

卵管のある19区迄、車やヘリを使えば毒の解決に動いている事が察知されてしまう。

故に2人は瓦解した東京を駆け抜けている。

「後ろが心配か?」

ふと、成は聞いた。

既に走り始めて15分は経っている、本局では本格的な戦闘が始まっているだろう。

「……いえ、信じてますから」

「なら、これからの事でも考えてればいい」

しかし、今の彼等にしか出来ない任せられた仕事がある。むしろ心配すべきはそちらである。

「恐らく、今から行く場所で2人は倒さないといけない」

調査に向かう毒の卵管、そこに何が潜むかは分からない。だが誰がいるかぐらいは想像する事は出来る。

「その1人に、心当たりはあるんじゃないか」

旧多は誰かを蘇らせようとしている、そしてそれに竜が利用された。あの時、地下で旧多と話したからこそ出てきた推測だ。

だが彼が自分の幸せを手に入れると言うが、その幸せとは成には分からない。

だが、ここには竜の核となった存在がいる。

「……リゼさんです。僕や伊丙上等の赫子は、彼女の物ですから」

金木には心当たりがあると考えて聞いたが、納得のいく答えだ。

「今、毒の核になっているのは彼女で間違いありません」

金木は竜に取り込まれていた時、リゼと会っている。その時に小分けにされてから纏まったとも彼女自身からも聞いている、核というの

が間違っているとしても彼女が居るのは間違いないだろう。

それを聞いて成は「そうか」と言うと、少し頭を悩ませる。

リゼと因縁があり、毒に対応できるのではなく耐性がある金木が戦う方が色々な意味で適切だろう。

故に、もう一人の方を相手にする。

「なら、旧多は私が相手するよ」

旧多がそこにいる、成は確信を持って答える。因縁的な意味でも成は旧多とは浅からぬ関係だ。

時間を稼ぎに来ているのなら、手分けした方が都合も良い。その事に金木も賛同している様子ではある、だが少し疑問があるようだ。

「……何で、彼がいるのを分かるんですか？」

旧多がそこにいる確信を持っているのが少し分からないのだろう、CCGの方へ襲いかかっているもおかしくないし、陽動として他に何かしているもおかしくない。

確実にいると言う根拠が思い付いていないのだ。

「そこまで難しく考えなくていいが……」

だが、成はその根拠がある。

「守りたい所に、誰しも自分を置きたいからな」

成がエト達にいるCCGに残ろうとしたように、彼もそうする。成と旧多は根つこの部分ではそこまで大きな違いを持たない者達だ。

ただ、その方向性が異なるだけで考え方は似ている。

必ずそこに、奴はいると。

「ここからは地下で行くぞ、その方が早い」

☆

ピエロというグールの困難が現れた時はまさしく数の暴力であった、かき増しされた人間も躊躇いを生みやり辛い戦いだっただ。

対して、Vはその真逆である。

「(やはり個々の能力値が高い、ほぼ全員グールならSレートクラスだ。上手く捌けているのは……)」

個々の能力、平均値が高い。捜査官やグール側の方が数は多くとも質で圧倒的に劣っている。

冷静に状況を見定めている宇井とて、複数人を同時には相手できない。

Vとは成熟した0番隊である、和修の雑用係ではあるがその範囲には血生臭い物もある。

対人能力も、当然高い。

故に、そんなのを相手できるのは限られてくる。

「(黒山羊の幹部やエトは問題無さそうだが、全体的には劣勢か。何とか立て直したいが)」

また新たにVが増える、先遣隊の後続だろう。

まだ数としては余裕はあるが、長くは持たない。突発的な戦闘であったのでまだまだ捜査官やグールは足りていないからでもある。

だが、今の状況ですら余裕を作り上げている部隊が前に出る。

「シオとりは右、ユサは左に展開、8秒耐えろ」

「はっ」「はいっ!」「了解」

庭の子供達に指示を出し、真っ先に敵部隊に突っ込んでいくのは今皆の光になっている伊丙だ。複数人のVを同時に相手している。

手に持つクインケは草薙、成が所持していた物だ。

手持ちであったAUSやThuman、果てはIXAも壊れたままだったので成から現在借りパク中の武器である。

故にまともに扱ったことはない、そもそもが彼女の物ではないからだ。

それを察してか、はたまた集中して殺すべきと判断してかVの黒帽子は三人係で襲い掛かる。日本刀型のクインケだ、半グール化した彼女の皮膚でも難なく切り裂く事ができるだろう。

だが二刀流モードで全ての斬撃をいなすと、そのまま首を連続で飛ばしていく。

今の彼女の身体能力はグール並であり、庭並のVならば凌駕しているのだ、多少の数ではまるで止まる気配がない。

「伊丙、貴様裏切るのか!?!」

「裏切る?・アホらし」

死に瀕した1人が黒帽子は答えを聞くまでもなく首を飛ばされ絶

命していく、その光景はまさにCCGの死神を想起させる。

「アンタらに忠誠なんか、するわけないでしょ」

そして死神は2人いる、鈴屋も同様に複数人の黒帽子を相手し蹴散らしている。

その様子に、敵に最初の勢いはなくなってきた。

2人を主軸に、捜査官達は上手く立て直せているようだ。

「もう少し削るわよ」

捜査官として必要な事はそこまで多くはないが、有馬のような捜査官となるとその条件は多い。

圧倒的な存在感や殲滅力、不可能を可能にしてしまう実力、周りの目が必然的に集まってしまふのが有馬という伝説的な捜査官であるが、もちろん他にも条件はある。

容赦の無さ、常に周りを判断できる視野と思考力、最短での戦闘を心がけずともこなしてしまう程に染み付いた捜査官の体、どれ一つをとっても捜査官が生涯をかけても手に入るかどうか怪しい物だ。

そして、それら全てを彼女は持っているか持つ事ができる。

「捜査官としてなら、いつか成を超えるな」

成が成熟した捜査官だとしたら、彼女は未成熟な捜査官である。

そもそも捜査官においては成は努力と特別な師によって到達した力であり、俗に言う秀才タイプの捜査官だ。少なからず才能はあるが、それ以上を引き出している。

対して、伊丙という捜査官は違う。彼女は最強を見てほぼ独学で育った天才だ、成が扱うのに半年かかった草薙をたった数時間でものできているのがその証である。

「次の有馬はお前だよ、ハイル」

だが、少しだけ宇井は違和感を感じていた。

伊丙や鈴屋の実力を知る彼等が、奇襲ということ以外に無策のまま突撃して来るのは考えられないからだ。

ましてやエトといったグールもいる、数で優っている事情は覆らない。

「宇井特等、奥に何か居ます!」

ただの時間稼ぎにしては命を無用に散らしている、本気で潰しにきているとしか考える事はできない。

そして、それはすぐに分かる。

「梟に、鯨か!？」

隻眼のより一回り小さい梟に、有馬達に討伐された筈のSSレートの鯨がいる。また後ろには大量の魔猿に黒狗の面をつけたグールがいる。

どれもが生気を失っている、というより既に死んでいるように見える。

「郡さん、梟は私がつ!？」

「ハイル!」

そして、そんな化け物の軍団が現れば対処できるのはごく一部である。

そして、それを奴等とはよく分かっている。対応に向かおうとした伊丙に、大太刀による斬撃が浴びせられる。即座に受けたのでダメージは殆どないが、大きく体制を崩され飛ばされる。

「貴様の相手は私だ、入」

大振りの太刀の名は梟、その名の通りに梟から作られたSSSレートの羽赫クインケである。

そして、それを持てるのは有馬以外に1人しかいない。

「お前を殺しておかないと、腹の虫が治らんからな」

「芥子……!」

今の彼女では梟にも対応するのは不可能である、1人だけ明らかにVの中でも動きが違う存在が相手なのは見て分かる。

クインケの禍々しさも、本人の禍々しさも他を圧倒している。

むしろそれだけの存在を抑えているのだ、他で何とかしなければならぬ。だが居るのは梟に鯨、Vの援軍にグールだ、数の有利も今は怪しい。

そうこうしていると、梟が周りにその力を撒き散らしていく。

グール達によって赫子の盾が形成され、耐えてはいるが明らかに時間の問題である。

火力差があり過ぎる、そして憂慮すべきは梟だけではない。

伊丙のサポートも誰かしなければ、怪我で離脱している特等達がない事に宇井は頭抱えたくなる。

「(こつちも来たか!)」

だが、誰かが何とかしなければならぬ。

宇井は梟の羽を避けながら思索していると、前の羽が同質の羽によって撃ち落とされる。

何事かと宇井は横に目を向けると。

「私に預けてもらおうか」

エトが居る、片目を赤く光らせて羽を広げている。

「万全では無いと聞いているが?」

「私以上に梟を知る者は居ないぞ?」

そう言うのと、梟を大きく吹き飛ばす。赫者の腕部分だけを形成したのだ、元の力はエトの方が優っているので不可能ではない。

だが、態々吹き飛ばしたのには意味がある。

「取り巻きは任せる」

そう言うって吹き飛ばした梟を追って行く。

サシで蹴りをつけるつもりなのだ、自分の父親の人形と。

梟同士の戦いなどと言う考えたくも無い戦いが行われるが、咎められるものはない。

実際彼女以上に今梟を相手取れる者も居ないのだ、ならば問題はその他である。

「丸手特等、現場指揮は私が行います」

彼はこの場で最も階級が高く、最も乱戦の経験があり、誰よりも強いグルルと戦い続けてきた捜査官だ。

彼にできることは、それを除いてないだろう。司令室の長である丸手特等も、それを了承する。

「S以上のグルルには班で対応、時間稼ぎで構わん!巡回中の捜査官も集まって来る、敵を殺す事より被弾を減らす事を優先しろ!」

今の戦況は時間が経てば経つほど兵が集まる捜査官側が有利である、全てを出し切っているVには後がない。

だが、彼等には戦局を変える手駒がいる。そのうちのいくつかはエトや伊丙が足止めているが、もう一人いる。

「鈴屋特等、鯨を止める。隣りを任せたい」

有馬以外に倒せなかった怪物が、そこにいる。

鈴屋班と宇井はそれを見て騒つく、死してなお圧を放つその体躯と赫子に。

それと相対出来るのは、彼等だけだ。

「有馬貴将はここには居ない！我々だけで討つぞ！」

そして、激戦が始まる。

38話

戦闘区域から大きく外れた場所で、1人でバケモノと相対するのはエトだ。エトも間違はなくバケモノ側の存在ではあるのだが、今は少し違う。

「なるほどな、流石は私の父親と言ったところか」

部分的な赫者化はできる、だが完全体にはなれない。それだけの余裕がないからだ、自力はエトの方が遥かに上回っているのだが苦戦している。

エトの父親、不殺の梟である芳村功善はSSSを冠する最強の1人だ、むしろ全力でない状態でも相手できるエトがおかしい。

「……まだ立つか」

だが、所詮は操り人形である。あんていくを守る最恐の姿はそこにはない、感情のない機械的で単調な攻撃はエトに届かない。

雑魚を大量に倒すならば問題はない性能ではあるが、エトを相手取るとなれば色々と不足している。

だが、そんな事は向こうも分かっているだろう。

「(何をやる気だ?)」

少し遠くから汽笛のような音がすると梟が構えた、まるで固定された砲台のように。

愚直過ぎる、避けることなど雑作もないだろう。Rc細胞による爆発力を活かした砲撃というのは見るだけでわかる、しかし当たらなければ意味がない。

「まさか……っ!?!」

だからだろう、離れた戦地に確実に当たるように砲塔を向けている。レーザーの様な眩い光の奔流が、発射された。

エトは咄嗟にその光を遮る様に、庇った。今のエトはこの戦場を任せられているのもあるが、人の命を簡単に粗末に出来るほど非道になれない。

そんな事を見抜いての砲撃だった、これならば確実に彼女に当たる。

常人どころかグルルですら消し炭にする熱量は、辺りに轟音を撒き散らしていた。

☆

一部の瓦礫の表面程度とは言え溶かす程に高温な爆発は、当たりを地獄に変えている。

捜査官達の戦う戦場に放たれていけば間違いなく半数近くの被害を出しているであろう攻撃だ、その威力は凄まじい。

だが、CCGへと襲いかかる事はなかった。たった1人によって防ぎ切られたからだ。骨すら残らないだろう、だが受けてしまったのだ人形は砂塵の舞う瓦礫の中に、黒炭になっているであろう死体を探し始める。

操縦者の意思だろう、この玩具よりも間違いなくその方が使い勝手もいい。

だが、唐突にその人形の動きは止まる。

「笛の音……なるほど、操っているのはクラウンか？」

彼女が頭上から丸ごと梟を貫いたのだ、ブレードの様に尖らせた赫子で。

「まあ、どうでも良い。父親の引導が渡せるんだ、後草れなく終わらせられる」

燃料切れを起こしていたのだろう、動きにぎこちなさが出ていた時にエトは刺し穿った。

そもそもエトにこの攻撃をなぜ耐えれたかというのもあるが、彼女は部分的に赫者化し盾を張っていたからだ。

砲撃の威力が分散するように馬鹿正直に受けるのではなく、撒き散らす様な盾を張った。

ただ彼女もただでさえ少ない体力を大幅に削った技でもある、それだけの威力があった。

「……呆気ないな」

だが、既に事切れている人形は破壊した。もう動く事はない。

「聞きたい事は今になって色々出て来る、歳をとったせいかもしれないが……まあなんだ、親不孝な娘であったがお互い様か」

そもそもが喋ることすらできなかつた状態にしていたのはエト自身だ、父親として意識したことなぞ一度としてない。自身を地下へ放つて喫茶店をしていた男を父親と感じろという方が難しい。

だが、骸に話しかけるエトの表情は少し暗い。

「聞けなくなつたが私は私で、自分なりに考えてみるよ」

そこから漏れる独白は、悲壮感もあれば前を向くという意思も感じる。

この歪んだ世界の形を破壊する、それを成し遂げだ後に何を探していくのかを考えなければならぬ。

その後の世界で、生きる事を頼まれてしまったのだから。

「こんな歳になつても、色々知りたいからね」

ただどう生きていくかを、考える時間は今はない。

そのまま彼女は轟音の鳴り止まない戦場へかけて行つた。

☆

地下を走り出して時間も経つてきた、19区には既に侵入し順調に目的地へと向かえている。

「嫌な空気がしてきましたね、大丈夫ですか？」

「臭いが問題ない。行こう」

そして、もうそれが近いのを2人は察してきている。

明らかに雰囲気が変わっているのだ、空気の澱みは特に顕著でその臭いの元はすぐそこに感じる。

「……かなり地下まで伸びてるな」

そして、目の前に現れたのは巨大な肉の柱とそれにアブラムシのように大量に付いた卵だ。無論、その中には毒持ちの落とし子が見える。

目的の卵管、それは下に向かっているのがわかる。

「旧多は見当たりませぬね」

だが、旧多が居る気配はない。

それどころかVやピエロの者もだ、多少はいてもおかしくないと身構えていた2人からすれば警戒のし過ぎであったのかもしれないが、それだけ戦場に人を送り込んでいるとも言える。

「居るとすれば、下だろうな」

2人はガスマスクを装着する、ここから先は毒の影響も出て来るだろう。いくらこの2人でも何があってもおかしくない、そのまま2人は肉の柱を伝って下へと降りていく。

「下に行くほど、空気も悪いな」

暗い空間であるが、地上から差し込む僅かな光と元から地下道として使われていた名残りの電灯だけが彼らの道を照らす。

真つ暗とまでは言わないが、十分に視界が通らない場所だ。しかし2人はグールの影響で視覚は人より多少優れている、この程度なら問題は無いだろう。

むしろ不気味な肉の柱を見て見ぬふりをしやすい。

だが、空気はそうではない。

「大丈夫ですか？」

「安心しろ、苦手な野菜を食べた程度の気分の悪さだ。そのうち慣れ……ん？」

空気の悪さは酸素の薄さというよりは不気味な何かを感じるといふ事でもある、それだけ核となるものあると言うことだ。

「飛び降りろ!!」

突然、成が叫んだ。

瞬間、目の前でパキパキと音を鳴らしながら肉の卵が割れ始める。

2人はどこまで続くかもわからない底に飛び降りたが、赫子を使い何とか着地する。

「羽化したか」

そして、その2人を追って落とし子達も降ってきた。

数は具体的には数えられないが、200は軽く超えている。

そのどれもが毒持ち、竜の防衛機能として孵化したのかは分からないが憂慮すべき非常事態である。

敵が時間を稼いでいる中で、こうも時間のかかる敵が現れてしまえば戦闘を避けるべきではあるのだが、戦うしかない。

「行け」

すると、成は走り出す金木を背にする。別に口約束をしていたわけ

ではない、ここまでの非常事態を想定していたわけでもない、だが自然と成はそこに残った。

何故という問いに答えがあるのならば、この先で戦うべきは誰かと言われたら金木であったからだろう。

「5分で追いつく」

そう呟くと、クインケと共に赫子を排除行動に移していくのであった。

☆

「鯨の動きを普通のグールと同列に考えるな、常に牽制を続けろ！」

宇井が檄を飛ばす、それは梟の次に厄介なグールに対してであり、技が死んでいようと持ち前の体の柔らかさと身体能力の高さで他を圧倒する怪物であるからだ。

「無理をするな松前！金木くんも手を焼いた相手だ！」

そして、それはグールにも当てはまる。

「盾すら破るか、バケモノめ」

月山とその執事である2人の甲赫は蹴りだけで粉碎される、それだけのパワーがあるのだ。死体になり果て、技も死んでいてなお彼らに操られているのは、そう言った理由だろう。

しかし、死体になっていいるという事は生きている時と違い都合よくその体を弄れるという事でもある。

「赫者！：そんなデータはなかったはず」

突如として、彼の背中から赫子が巻き付き始める。完全なそれではないが、速度やパワーは段違いに跳ね上がる。盾を張るグール達を赫子ごと貫き、その後ろにいる捜査官ですら薙ぎ払っていく。

飛び回る戦車だ、その体を皆捉えられていない。

「ミズロー、牽制のまま。じゃないと死にます」

死神の継承者である、鈴屋を除いて。

アラタを着る彼はその動きを目で追い、体が追いつけている。いかに前者のような破壊力はあれど、ここまでの装甲があるわけではない。

しかし、彼だけだ。鈴屋班の殆どがVの対処に追われており、鈴屋

と環水朗の2人だけで対応している。半兵衛から借り受けているアラタを彼はつけているが、その環も赫者化した鯨には追いつけていない。

このままでは、倒れるまで時間の問題であった。

「手はないのか、アレを何とかしなければ戦線の維持など不可能だ。だが倒すにしても回せる人員も……」

しかし、その状況を打破できる捜査官は余っていない。グールにはいるのかもしれないが、把握しているわけでもなく、そもそも戦えるかどうかすら怪しい。

実力者である月山やその従者を丸ごと蹴散らしているほどのことから。

だが、何かをしなければならぬ。だが、Vを相手しながらギリギリ残っている頭のリソースを使うが妙案は出てこない。

『手を焼いているようだな』

そんな彼らを見かねてか、はたまた気づいてか無線に声を通る。

「その声、エトか」

『すまないが負傷中でな、少し戻れんがアドバイスはできる』

梟を一人で相手したエトの声が聞こえてきたのだ。無線は渡していたが、この様子からして梟は無力化する事が出来たのだろう。

「どうすればいい?」

エトはアオギリを指揮してきたいわば司令塔だ、その力はある。でなければアオギリという組織は半月保たずに瓦解しているだろう、身勝手なグール達を纏めるのも扱うのも、それを運用するための頭があるからだ。

『とめるなら頭の方だ』

そして、倒すべきは何かを彼女は察している。

『ピエロがどこかで操作してる、一度耳にした。北西方向を当たればある程度絞れるはずだ』

エトはグール界限において知らないことの方が遥かに少ない。アオギリの構成員がどこで誰とお茶をしていたかのすら把握していたグールだ、無論ピエロについても相応の知識と対策が頭の中に入って

いる。

『向かいたい奴に向かわせてやれ、それで片がつく』

それだけ伝えると、エトの通信は切れる。この無線事態は指令部に伝わっているのでは今は敵の所在地を洗っている頃合いだ。

程なくして所在が明かされるとは思うが、既に誰か察しのついた者達がビルの上を走っていくのが目に入る。

「……どうりで、有馬さんしか止められないわけだ」

舞台を完全に掌握する怪物、エトという存在の大きさに宇井は初めて人間としても畏怖するのであった。

39話

地下奥深く、そこで根つこのように触手が辺りに張っている。だが別に地面から栄養を吸うわけではない、ただ卵管が巨大過ぎる影響でそれを支える為に張っているだけだ。

植物のような動物なのだ、だから酸素も必要となる。それ故に地下にも酸素は十分にある、そしてそこで1人の男が座している。

「おまつ、まだ生きてんの!?!」

「……旧多」

今までの世界における黒幕がそこにいた。そして、金木はそこに辿り着いたのである。利用され、操られ、踏み台にされてきた彼が、辿り着いたのである。

「たかだか竜の供物である貴方が、まさかこれを止めに来たなんて言いません」

「よね?とでも続けるつもりだったのか、その言葉は金木の赫子で遮られる。」

「え、ちょ!?!めっちゃ止める気じゃん!?!」

余裕がないようだ、しかしふざけた様子にも見える。だがそれで手を緩めるほど金木は非情になれない人間ではない。

「てか後ろの音、まだ居るでしょ!?!どうせ成遼太郎もなんやかんや生きてんじやないの!?!めんどくさっ!」

着実に追い詰めていき、質量で逃げ道を塞いでいく。ただ素早く走り回るので中々追い詰められない。なので少し横に広げながら、追いかけていく。

「無理無理無理無理、ちょー無理!」

そして、最後の1撃を入れようとしたときだ。

「ぐっ……!」

旧多の後ろから、特大の赫子が金木を吹き飛ばしたのだ。

りぜ、もとい竜の赫子だろう。それを罫として設置し、見事に隙を見せて振り返りにしていた。

「はーい、引っかかった〜」

旧多の態度が急変する。毘にかけた事に優越感を持つているというのもあるとは思うが、思い通りに事が運び、そのことに運ぶ相手を蔑んでいるからこそ出る嘲笑だった。

「いっつも力で解決しようとして、准特等は何も変わってませんねえ」
そして、その手には黒い刀が握られている。

本気で潰すという意思表示だろう、現に彼にはエトや成を瀕死の状態にまで追い込んだ事があるのだ。その実力は未だに底が知れていない。

「こう見えて僕、強いんですよ?」

「奇遇だな」

しかし、その相手は最初から決まっている。

「私も、こう見えて自信がある」

「なに有馬二世みたいな顔して出てきてんだよ……」

竜の遺児に囲まれていた成遼太郎が、やって来たのだ。アレだけの数を撃破するとなれば時間はかかるかと思いましたが、存外そこまで敵は強くなく、彼が圧倒したという事だろう。脅威となる毒も彼ならば問題ない。

「遅くなった、後は任せろ」

「任せます」

そして金木は奥へと駆けていく。その目的地も、標的も、旧多はよく分かっている。

「行かせるわけっ……!!」

が、その妨害をする邪魔者が1人いる。

「私が戦う理由、分からないとは言わせないぞ」

「ロリコン野郎が、そんなに梟が好きかよ」

「……そういう意味ではないけどな」

2人の半人間が、ぶつかり合った。

☆

「成が赫者化したらどうなるって?」

地下で潜伏中の時、ふとエトに伊丙は聞いていた。

「一方的に負けたんですよ、それも半端な状態のあいつに」

伊丙は自分の持てる力と可能性の全てで成に戦った、しかし結果として半赫者状態の成遼太郎には全く及ばなかった。

特性でチューニングされたアラタでも、ほぼ完璧に扱えるようになった赫子でも、届かなかつた。そして、それが何故なのか分からないのだ。

伊丙からして成は確かに強者として認めていても、全く届かない存在とまでは思えないのだ。なのに負けた、その敗因を考え続けていたのだが、これに答えられるのは地下にいる彼女だけだろう。

「言っておくが、赫者化した成はそこまで強くないぞ。いやアレはアレで人の域に居ないが、条件さえ揃えば私でも勝てる」
「じゃあ何で負けたんですか」

エトとて最高峰の存在ではあるが、伊丙は既に超えている。逆にそう言われて彼女はさらに頭はこんがらがっているようだ。

「君は赫者化を総合的なパワーアップだと思っているみたいだが、そうではないからな」

その誤解を解くように、エトは話し出す。

「そりゃ、あの時の敗因として才能の差はあるが一番は年季の差だ。君は完全な赫者になった時点で、ほぼほぼ勝ち目はなかったんだよ」

エトはあの戦いを2人の次に身近に体感していた、それ故になぜ勝てなかつたのかもよく分かっている。そしてグールとしての知識も、成や伊丙の比ではない。

「対軍を意識するなら、赫者ほど都合の良い形態はない。破壊力を押し付けるのに最高の形態だ、的にはなりやすいが装甲も遥かに厚くなる」

よく隻眼の梟として戦ってきたからこそ、エトは赫者をよく知れている。他にも自分の顔や身なりを隠せるという利点はあるが、エトの戦っていた相手は基本的に群であった。

「だが、いかにせん機動力が落ちる。それに、人間としての戦いの形を失う事になる」

パワーアップ、それだけを考えれば赫者というのは最高の形だ。赫子の出力が遥かに上がり、ただのグールでは到底できない事が出来る

様になる。

「人型に止めようとしていたが、本来のコンセプトと反するからぎこちなさが出てくる。だから成は半赫者っていう捜査官の強みとグールの強みを両立させる形態で戦ってたに過ぎん」

しかし、対個人に……理不尽な質の暴力に抗う形態ではない。赫者は数の暴力に抗う形態なのだ、ゆえに質の暴力である伊丙に成は完全な赫者化を選んでいない。

捜査官としてのクインケ操術と身のこなしにグールとしての力を持たせて動きに拡張性を与え、その上限を大きく飛び越えさせた。

「そのバランスを知り、扱えるから成は強いんだよ。ただあれでも全盛期の有馬には3割も勝てないと思うがな」

だが捜査官としての実力は最強というわけでもないので、無敵の形態というわけでもない。半赫者というのは赫者からすれば半端な赫子の火力をクインケで補う形態、そう成やエトは位置付けている。

半赫者というのは完全な存在からすればパワー不足なのだ、故にギリギリまで引き出しつつ人としての動きを阻害しない程度のバランスを調整出来なければ、弱くなる。

「……まあ、逆に言えば」

だが、エトは最後にボソボソと呟く。それが何かまでよく聞き取れないが、どこか物寂しそうなのは確かであった。

☆

芥子の攻撃の激しさは凄まじいものであった、クインケの出力差もさることながら、全盛期に近い力を何故か引き出せている彼の力は恐ろしく強い。

それは、既に夙成の影響で全盛期の力を失っている伊丙には厳しい戦いを強いていた。

「どうした、ん？ん？斬れるぞ？」

鏢迫り合いですら、何故か力負けしている。反射的に伊丙は背中から赫子を展開した、今のままでは分が悪いのは明らかであった。

「出し惜しみ出来ると思ってるのか？舐めているな？」

今の戦場は混沌としている。ただでさえ目の前には今のVのドン

である芥子に死体の人形達、その中で何体かは明らかに戦場を掻き乱している。

これら全てに対応出来る捜査官は居ない、だが伊丙ならば各個撃破は可能だ。しかし赫子を使って全てを対処するにはここ最近人を食べていない彼女には荷が重い、スタミナが保たないのだ。

故に節約しなければならぬのだが、目の前の男はそう出来そうになかった。

「……アホらし」

「何だど？」

だからか、伊丙は直ぐに赫子を纏い始めた。しかし完全にはない、関節部分や足周り、首周りには赫子は纏われていない。いわゆる半赫者の状態だ。

「まだ節約出来ると思って……っ!？」

しかし、その状態にまだ舐められていると考えていた芥子は次の瞬間には片腕が吹き飛ばされている。

「お前以前より……っ!？」

芥子は完全となった伊丙を見た事がある。アラタを身に付け、赫者となった彼女をだ。その時の彼女すら今の伊丙は動きとして超えている、出力は落ちているがその代わりに精錬されている。

「このバランス見つけるのに、わざわざ時間作ったのよ」

エトというグールとしての先人から、地下潜伏時に伊丙は学んだ。グールとしての力を人としての感覚で捉えていたが、それを理論的にも捉えて精錬させていった。

そして力を学ぶという点において成よりも圧倒的な才覚を持つ彼女は、ものの1週間でその力を掌握するようになった。

「負けるわけないでしょ」

次の瞬間には、芥子の頭が割れた。捜査官としての実力は伊丙の方が上なのだ、片腕を失った状態でグールとしての力を加えられた彼女に抗えるはずもない。

勝負はついたのだ。

「ふ、ふふふ……動きの速さは確かにあるな。だがハイル、お前……五

感の鋭さは落ちているぞ」

芥子が、ただの人間であれば。

「(頭切られて生きてる? 致命傷だろ、人間じゃないのか)」

だが、それだけならばまだ伊丙は動揺しない。別に彼女が弱くなつたわけでも、彼が強くなつたわけでもない。今の状況もあまり変わらない、そうなるはずだった。

「夙成を使つたんだろ? あんな紛い物で、貴様は人間になつていないつもりか」

割れた頭は繋がっていく、そして切り飛ばした腕も切り口から伸びた触手によつて繋がれていく。

間違いなく致命傷だ、それはグールであつてもそうだ。頭を割られても生きていられるなんて芸当は成や金木でも出来ない。

「まさか……っ!?!」

伊丙の頭に最悪のシナリオが浮かんでくる。同時にそれを答えるように彼の背中からは2種類の赫子が出現する。

「キメラ型は私が初めてらしいが……恵のおかげか、リゼと功善のものもしっかりくるなあ」

恵、そう呼んでいるのは彼らだけだ。人をグールにする毒、成遼太郎から作られた夙成とは対局に位置すると言つていい効果を持つそれは、Vの半端者達をグールに変えたのだろう。

人造グールであるにもかかわらず、その赫者の動きには淀みを感じられない。

「さて、今の動きであるべき赫者の扱いも分かった」

そして、その赫子は伊丙と同様に半赫者の状態まで纏わされていく。今の瞬間に覚えたのだろう、ほぼ完璧と言つていい仕上がりだ。だがこれは伊丙の才覚が芥子に劣っているというわけではない、単純な捜査官としての才覚もグール化した後の才覚も伊丙の方が勝っている。

ただ単純に、その形を得やすい存在に変わってしまったのだ。体を作り変えて、赫子が直ぐに馴染んでしまっているのだ。無論、芥子が実力者というのも要因ではあるがこの怪物は今ここに最強の捜

査官より、先を行っているのに違いはない。

「本当の人間を教えてあげよう、ハイル」

その怪物が力を撒き散らしていく、最も手に渡ってはいけない者が力が渡され覚醒してしまった。梟よりも厄介な存在がこの世に生を受けてしまったのだ。

「うざいんだよ、老害が……!!」

敵味方含めて5本の指に入る怪物同士の戦い、第二ラウンドの始まりである。

40話

「どこまでも邪魔をしてきますね、成二等は」

「どこまでも嫌がらせしてくるからだろ、旧多」

2人は互いのクインケをぶつけ合っていた。高い位置にいる両者の戦闘はグールの身体能力も相まって超高速で行われていく。

無論、互いにまだまだ本気ではない。旧多は既に金木とリゼの戦いには間に合わないと察している、故に確実に目の前の敵を読み取るうとしている。

対して成も、時間の制限もないので堅実に戦いをすすめているのだが、それは旧多には面白くはない。

「ここに来たって事は、貴方は失うかもしれないですよ？向こうには改造した鯨に梟、毒貰って喜んでるキチガイ共に、ピエロまで送ってるんです」

故に挑発している、互いに動きの余裕があるうちに。頭のリソースを戦闘に回さないでいられるうちに。

「貴方の大切にしてた梟も、守ってきた人達も根こそぎ剥ぎ取られるんですよ？こんな所で、もう駒としての価値もない僕を相手しても良いんですか？」

しかし、動じる様子はない。そのままクインケを振るう姿も、体捌きも、何も変化はない。

「グール達と捜査官が組んでるんだ、そこにはエトさんや鈴屋や宇井さんに、伊丙までいる。負けるはずがないだろ」

なぜならば、信頼しているからだ。グールについての信用値はよく知る捜査官よりは劣るものの、エトという存在がいる。ゆえに彼自身がここで揺らぐ事はないのだろう。

「全員、僕に負けた事がありますけどね！」

「なら、私とその人生に黒星をつけてやる」

だがそれはあくまでも、その置いてきた戦場についてだ。

「今迄の世界を見たでしょう、人とグールの歪み合う世界を！」

これから先の世界については、誰も想像がつかない。

「グールが傷つき殺戮されて喜ぶ大衆、グールに害され悲しみの連鎖がそれを増長させたんです！貴方程度個人が動いて、何も変わるわけではないでしょう!!」

旧多は知っている、人の醜さを。自分が害されないと分かればどこまでも冷酷になれるのが人間だ、だからこそその性質を利用して煽動したのだ。

グールの屍を築いたショーは一部の人間には不評でこそあれど、大多数の人間の理解を得ていた。むしろそれを狂喜している者は多くいたのだ、そしてそれは悪いこととは誰も認識していなかった。

不評だったのもモラルの問題があると考えられていただけで、その行動理念は否定されなかった。

「グールと人は分かり合えない、人もグールも壊れてしまえばいい」

だがそんな言葉では、この相手は壊れない。それは知っている、あくまでも自分の貫いている志や考えを曲げない。ゆえにやってから考えるだろう、やる前に諦める人間ではない。

だからこそ、方向性を変える。

「僕の事を気が狂っていると思いますか？ならそれは自分の事を見てから話してくださいよ」

「……何だと？」

問答にあまり反応しなかった成が反応する、それは逆に攻撃の際を与える。

「梟が食べてきた人間の中には、貴方の同僚がいる。なのに貴方は平気でその隣にいれる、狂人なのはどっちなんですか？」

グールの悲劇は最も大きく感じてきた者は、間違いなく喰種捜査官だ。人の死を最も目の当たりにし、身近に感じ、悲劇を見せられてきた。民間人が襲われた被害は大きい、一人当たりの摩耗や被害で言えば捜査官に勝る者は居ない。

そして、そんな悲劇をばら撒いてきた者が、彼の最も身近なグールだ。

「上司の妻を食われたのを知って、また普通に会えるんですか？その娘に会って平気な面を見せて、ピエロなのはどっちでしょうねー!!」

攻撃の威力が増してくる、今が好機と感じたのだろう。何も言い返せない成に向けて、力に任せてクインケを振り回していく。それを受けきれなかったのか、成は壁際まで弾き飛ばされる。

「あれれー？論破しちゃいましたか、それとも真面目な成二等は今頃、頭の中で謝ってる最中ですかねー？」

あまりの反撃の弱さに、もはや心を折ってしまったかと、呆気なさ過ぎないかと笑う旧多。

「でも良いんですよ、何もかも壊して償ってる気分にならせてあげます。天誅がくだったとおもって、諦めさせてあげますから」

そんな彼に成は憎悪の目を向けてはいない。

「旧多、お前にとって……善悪とはなんだ」

「はあ？質問に質問ですか、でもまあ答えてあげますよ」

成の出す質問にヘラヘラと笑い、余裕を崩さない旧多。圧倒的な優位に立っていると考えているからだろう、事実問答という点では彼の一方的な攻撃しか行われていない。

「僕に都合の良い存在だけが「善」です、他はーいら悪ない」
そして、いら悪ない存在を終わらせる一太刀を浴びせに行く。

「……そうか」

だが、それは一步も動かずに止められた。

「私にとって、生きる事そのものが「悪」だ」

成が旧多に挑むのは、エトを彼に害されたという意味での怒りがあるからだけではない。彼と決着をつける為だ、負けて終わる事はあれど負けたまま終わらせる人間ではない。

成遼太郎という人間は、己が意思を貫く為だけにここにいる。

「生きる為に何かを奪い続ける、だからエトさんに限らず、誰でも……奪ったものを精算しなきゃならない」

生きる事は奪う事、故に奪われる者からすればそれは悪になる。しかし与える事は利己的な意思があろうとも、それを受ける取る者からすれば、善人なのだ。善とは与える事なのだ。

「壊して終わり、死んで終わりなんて方が……無責任でしかない」

エトや伊丙を死なせなかったのは、悪人でその人生を終わらせた

なかったからだ。人生の終わりから見た総合点で、罪は精算できる。人の罪は消える事はないが、人を救う事実も消える事はない。

「何かを奪い続けるお前は必ず倒して贖罪させる、生きてこれから償い続ける」

だからこそ、殺す必要がない敵を彼は殺さない。悪人のまま死なせない。

「僕を殺さないって宣言するのー舐め過ぎでしょ」

「私を挑発する余裕があるうちは、勝てないぞ」

気付けば旧多の挑発的な表情が真顔になる、講釈を垂れていたが筋や信念を通わせた彼の答えを見せられた事でイラついているというのもあるだろう。

「僕も負けられない理由があるんですよ、そろそろ本気で勝負と行きましようか」

☆ 2人の戦いは更に激化していった。

絶望的な戦いが展開されている。それは圧倒的な存在、赫者となった鯨がいたからだ。技が命を失おうとも、鋼の肉体と赫子は大きな脅威であり、大多数の捜査官が鯨に倒されている。

「化け物め……！」

鯨というグルは本来赫者にはなれない、それは共食いをしないからだ。SSレートでそこまでの被害を出さずに大食いでもなく、共食いによるRC細胞の増加がない者がここまで強くなるというのは異常ではある。それだけ規格外の存在だったのだ、それが共食いをしたような形に、RC細胞が増幅されて解き放たれたとすれば、強大すぎる敵となるのは必然だった。

「時間稼ぎに徹しろ、鈴屋班の支援以外で出しゃばるな！」

ゆえに現場指揮を取る宇井が取った策は、倒す策ではなかった。いや倒すつもりではある、倒さなければこれはCCGにとってとてつもない脅威として君臨し続けるだろう。

しかし、宇井は倒す事を見限った。限界ギリギリまでアラタを使用し皆を庇う鈴屋を見て、勝ち目があると信じて動く彼を見て、時間稼

ぎに徹した。

「っ！宇井特等、鯨の様子が……！」

そして、徹底した時間稼ぎを行っていた時に好機は訪れた。

「鯨が止まった!?!」

機械的に動き続ける鯨の動きにノイズが生まれたと思えば、急に錆び付いたように動きが硬くなったのだ。

「今だ!!」

瞬間、宇井の合図と共に捜査官達が鯨に斬りかかった。足や腕、赫子を剥がすようにして皆斬りつけていく。だが決定打ではない、あくまでもこれはそれへの繋ぎだ。

自重を支えきれずに、鯨の膝が落ちた。

「決めろ、鈴屋くん!!」

そして、更に鈍化した動きに合わせ剥がれた赫子を縫う様に鈴屋のクインケが振り下ろされる。

☆

その報せは、すぐに全軍へ駆け巡っていく。

『鯨とピエロは撃破した。繰り返す、鯨とピエロは撃破した!』

戦いはまだ続いている、しかしその報せを聞いた者達は雄叫びを上げていく。

「「うおおおおおー!!!」」

宇井が時間稼ぎに徹したのはその方が被害が少なくなる考えたから、そして……別働隊で動いていた亜門を含めたグール達が必ず操るピエロを撃破してくれると信じていたからだ。

「よし、よし!!」

間違いなく今の勝負で戦局は大きく、傾いた。もはや残っているVもクインクス班や鈴屋班、0番隊やグールの幹部格が粗方制圧をしており、勝負はついたと言って良いだろう。

「ぐはっ!?!」

ただ一つの、懸念点を残して。

「伊丙上等!!」

半赫者化が解けかけた状態の伊丙が、瓦礫へ海へ粉塵を大きく上げ

ながら吹き飛んできたのだ。

「クソが……」

伊丙が瓦礫から這い出してくる、幸いにも命に別状は無いようだ。しかし今の彼女は捜査官やグールを引つくるめた、この戦場において1, 2を争う存在だ。それを吹き飛ばすとなれば、皆に動揺が走ってしまうのも仕方がない。

そして、それをやった者がまるで散歩でもしているような足取りで現れる。この戦場において最も異彩と威圧感を放つ存在が、そこにいた。

「どうした、ん？ん？」

芥子、Vのリーダーである彼の姿はもはや人間とは言えない。梟の羽とムカデのような赫子を纏い、赫子で作られた仮面の奥には赤黒い双眸が輝いている。

そしてその手にはクインケ、梟も握られている。

「……おっかなさそうですね」

「今の私一人じゃ無理よ……手貸しなさい」

鈴屋が伊丙の元へ寄る。先程の戦闘でもはや展開するのもギリギリであろうアラタを再展開、ジェイソンを握りしめる。伊丙もまた自身に赫子を纏い直し、草薙を構える。

「実力の差をやつと認めたか、勘もプライドも鈍いぞ」

対して、敵は余裕綽々である。これだけ戦局は圧倒的で味方が壊滅していたとしても、まるで気にかけていない。それだけ自身が圧倒的な次元に至っているという自覚があるのだろう。

有馬にクインケを教え、長くVを支配してきた男だ。その裏付けされた自信に間違いはない。

「私も忘れてもらっては困る」

だが、それに臆さない者がもう一人いる。

「エト、休んでていいのよ」

「冗談言うな、あれは私の案件だぞ」

満身創痍な2人の元へ、助っ人として満身創痍なエトがやって来たのだ。1番倒れそうなのは鈴屋ではあるが、その次に倒れそうであ

る。

しかし彼女もただの敵であれば無理を押しでは来ない。ただ相手は自身の因縁の相手の親玉であり、見る先には標的の手にある獲物と、標的から生えた翼がある。

「はっはっは、成る程な。貴様らがここの気をもたせている柱か」

殆どの捜査官達の士気を保つ鈴屋、宇井や0番隊といった者達の士気を保つ伊丙、そしてグール達の士気を保つエト、この3人はこの戦場において、絶大な信頼と力を持つ強者だ。

しかし裏を返せば、これは違う意味を持つ。

「全てへし折ったら、どうなるかな」

希望である3人を殺せば、それは絶望へと塗り変わる。このレベルの敵に数で攻めるのは屍の山を築く事にしかならない、宇井ですら足を引つ張りがねないだろう。

その3人ですら、力の差があるのだ。それを超える存在を相手出来る人間は、もうここにはいない。

化け物との戦いが、始まる。

41話

CCG防衛戦、とでも言うべき戦線は終盤に差し掛かった。Vを殲滅し、操られたグルルを殲滅し、ピエロも殲滅した。

そして残るのは、たった1人の怪物なのだ。

「クインクス、長くはもたないぞ」

それと対峙したエト、鈴屋、伊丙の3人は後ろへ下がっていた。理由は、この3人の急拵えの連携では奴には勝てなかったからだ。いや連携力が不足しているというよりは、敵の個としての存在感は三人の上をいつていたのだ。

捜査官としてのクインケ術では伊丙に比肩し、グルルとしての力は他を圧倒する。その残虐的な嗜好や経験値ではこの場にいるどの捜査官より積み重なっている。

伊丙が全く同じ状態になれば勝つ事は容易とまでは言わなくても可能だとは思うが、敵は赫子で捜査官やグルルを捕食をしながら単騎で戦局を傾けている。

「しっかりしろ、後は我々に任せて後ろに……っ!!」

「一撃を入れたら離脱しろー！それ以上踏み込めば確実に死ぬぞ!!」

増援で方々に散っていた捜査官達が集まるも、全滅は時間の問題だろう。しかし、あくまで今彼らがやっているのはダメージを与えるのではない。

「(流石にまずいな……成が来ても、旧多を相手にした後にアレは厳しいだろう)」

この戦場において柱となる3人が顔を合わせる。今は宇井や丸手が指揮を取りギリギリで戦場を繋いでいる、それもこの3人に全てを賭ける為だ。

金木や成という巨大な戦力を待つという作戦も勿論エトだけでない。丸手や宇井も考えただろう、しかしそこまで持ち堪える事は当然出来ない。被害は拡大していく、しかしここで取り逃せばそれこそまた多くの犠牲者を生むことになるだろう。

今ここには戦力が集まっている、この状況で倒せなければこれ以上

の戦力を将来的に準備しなければならぬ。敵は力を蓄え、同志を集めて再起してくるのは間違いない。

したがって、今ここで倒すしかないのだ。

「2人はどの程度、全力で戦える」

作戦参謀役として、最も経験があるエトはまだ傷が回復しきっていない。先の旧多との戦いで負った傷の回復はある程度済んではいるものの、本調子とはほど遠い状況でこの戦場に立っている。その上で自身の父親を相手にしているのだ、残りの体力は2割もないだろう。

「次の一撃を出せばアラタは持ちませんね、早々にリタイアです」

そして1番傷が深く、体力の消耗もクインケの摩耗も激しいのが鈴屋だ。鈴屋は鯨との戦闘においてピエロが片付くまで常に前線で注意をひき、神経を削っていた。アラタも限界を迎えている。人間ゆえに先の金木との戦闘における傷も、まだ残っているのが彼なのだ。

「あと3割程度よ、あれ相手でも5分はいける」

そして、今の状況で最も傷が浅く戦える捜査官が伊丙だ。1人で耐えるだけならあの怪物と相対する事ができ、火力もある。倒す事が出来るのは彼女だけだろう、逆に言えば彼女に倒せなければここにいる誰でも倒す事はできない。

「なるほど……十分だ」

そしてその上で、エトは勝算を見出した。

「本気で言ってるとしたら割と頭どうかしたの？カッコつけるにもここに成は居ないけど」

「安心しろ、それと成は関係ないだろ」

「居たら良いのにつて、口から漏れてたわよ」

「……絶対にあいつには言うなよ」

チームの雰囲気は悪くない、劣勢な事には変わりはないが勝てる雰囲気がある。特にエトと伊丙は短い付き合いだとしても、地下空間でもっとも長く過ごしただけあり、互いの属性を分かっているのだから。

「御二人さんは仲が良いですね、女の友情というやつでしょうか」

☆

地下の戦闘は激しくなっている。成と旧多は互いにクインケを使うだけではなく、赫子を展開し、より人とは違う次元での戦いを繰り広げている。

だが、有利なのは成であった。

「天然型？はは、そんなの分かるわけないでしょ」

グールの力を扱える事は分かっていた事ではあったが、旧多はあまりに理不尽な現実には口数が多くなっている。

「いつも邪魔しやがって、僕の前に必ず立ち塞がりやがって、一度死にかけて癖に……ここにまでやってきた」

それだけ納得がいかないのだろう、旧多の武器はその身体能力や残忍性でもなければ、戦闘能力でもない。知能の高さだ、その策謀力は事が起きるまで誰にも悟らせずに、完遂した。そしていかに人が嫌がる事出来るかという事について考える事は誰よりも優れている。

だからこそ、想定外のイレギュラーもある程度は許容できる。しかし、それにも限界がある。

「死ぬよ、さつきと死ぬよ……お前さえ居なければ!!」

そんな中、徐々に旧多の感情の発露は大きくなっていった。

「狡いんだよ、何でも持ちやがって!!」

胸の内に溜まっていたのだろう、その全てを吐き出していた。

「寿命も関係無し、親が上手くやったおかげで自由を手に入れて、食事に制限は無いし赫子は使える！アンタみたいな生まれ持ったモノだけ得する奴が一番イラついて仕方ない!!」

旧多という存在の人生の始まりは、成とは真逆と言える。生まれた時から和修という鳥籠に縛られて生きてきた、思い人も愛する事は出来ず、早世である一族の短い人生を道具として扱われる事しか全う出来ず、ただの操り人形として歩まされてきた。

「旧多、やっぱりお前は」

そんな彼を見て成は――

「普通の幸せが欲しかったんだな」

その真意を見抜いていた。

「は、はは……！何分かった気ではいるんですか、僕の何が……っ!!」

無造作に感情を奮わせた攻撃が振るわれる。しかしそれは受け止められると、大きく弾き返される。

「私だって……普通に生きたかった」

成の人生は普通ではない。最初こそ暖かい家庭はあったかもしれない、しかしすぐに両親が入院して孤児院に入れられた。親がいない子からすれば親がいるのにそこに居たことは迫害の対象になっても仕方がなかった。救いだったのは孤児院の先生達は普通だった事かもしれない、なので相談すれば何かを解決できたかもしれない。

だが耐えた、院内での自然と感情の発露は内側に止まるようになってきていた、その方が上手く生きていけると学んだからだ。素の彼を知るものなぞ、殆どいない。孤独感に苛まれ続けていた。

「こんな血生臭い世界でもなく、ただ人として……何不自由ない世界を望んでいた」

そして、和修からは逃げられなかった。いや気づかれてはいなかったが、もはや運命だったのだろう。そこで道具として扱われ、上手く隠れていたが有馬に見出されてしまった。

最強と共に、世界を変える手伝いを強引に手伝わされたのだ。今は自分の意思を持って戦ってはいるが、当時の彼に自由意思はあったとは言えない。

「私もお前も、元の願いは同じだ。ただ方法や環境が違っただけで……立ち位置が逆になったんだ」

2人が決定的に異なったのは方法だけだ。

成は己を知り、生きる為に順応する事を選んだ。周りの流れに逆らわず、流れに乗ることを決めた。その中で自分の道も決めた。対して旧多は自分の道を決めこそすれど、流れを変える方向が有馬や成とは真逆であった。

ただ普通に生きる為に、その根本は同じであるにも関わらず、両者の結果は大きく違った。手順も何もかもが、異なっていた。

「だから……もうやめるんだ」

成は己が道を踏み外すとは言わないが、道を変えていれば旧多と似たような事をするだろうと考えている。和修は全員殺していたら

うし、グールも皆殺しにする政策を推し進め、最悪の場合は新たな支配者としての道を歩んでいたと。

「うるさいなあ、もう全部壊したんですよ。思い人も、人間もグールも、世界も、もう取り返しがつかないでしょーが。成二等も分かるでしょ、人とグールの共存した世界の為に動き続けるように……僕は世界を壊す為に動き続ける」

だが会ってきた人やグールに大きな差があり、育てられた環境が異なった。だからこそ、彼らは道が異なった。

「幼い時に思ったんです、どうせ短い人生……全部ぶっ壊してやるつて。しがらみも何もかも、そして……全部僕は壊せた」

そして、道半ばで倒れる事なく、やり遂げてしまった。それが出来る頭と能力を持ち得ていた。

「僕は勝ち続けている。和修一族を滅ぼしてCCGの歴史を終わらせたし、大勢の人間を殺した竜も解き放った！そしてここでも、僕は勝つ!!」

もう、発露するものも耳にすることも無いのだろう。旧多の体に赫子が巻き付いていく、金木とは全く異なる形状で纏われていくそれは彼とは属性が異なる事を示している。

「その後は、何をする。竜は金木が終わらせるぞ」

成もまた、赫子を纏い始めた。これが最後の問答なのだろう、その答えを聞いた時が、最後の戦いのゴングとなる。

「ならまた竜を作りますよ、准特等を核にして……勿論素材は、貴方でね！」

2人の意思が、ぶつかり合う。

42話

「さあ、歴史の闇に消えるがいい。和修のように……!!」

芥子の力は、圧倒的だった。あんていくでも指折りのグール達を赫子で圧倒し、クインクスを始めとした優秀な捜査官は梟のクインケにより粉砕している。このまま攻め続ければいつかは勝てるかもしれないが、死体から補給を続ける芥子の羽赫による制圧射撃は止む気配もない。

仮にこれに対応できるとすれば、それは只人の領域には不可能だろう。

「休憩は終わったか？こちらも良い運動が出来たぞ」

故に、人外とも言えるエト・鈴屋・伊丙の3人が戻ってきた。

「それじゃあ作戦通りだ、やるぞ」

エトの号令と共に、3人は駆け出す。

しかし、3人同時に仕掛けるかと思いきや散開する。

「避けてばかりか、つまらん。そんな雑魚の戦い方を教えた覚えはないぞっ」

芥子の制圧射撃を持ち前の身体能力やクインケ捌きによって、前線を張る伊丙は耐え忍ぶ。対して鈴屋は遮蔽を駆使して、徐々に距離を詰めている。

「……ちっ」

そしてエトはそのまま撃ち合いを始めた。羽赫使いとしての年季は彼女の方が上だ、火力は違えど芥子の行動を十分に乱していく。その隙に2人は距離を詰めていく。

恐らく2人が接近戦を仕掛けようとも、エトは誤射をしないだろう。それだけの技術を持っている、先ほどは3人を容易に蹴散らしたが、その戦闘とは違いエトがサポートに特化した動きをしている。

休憩中に策を練ったのだろう、このままの状態で戦えばいかに芥子と言えど苦戦は必死だ。

しかし裏を返せばそれは簡単に解決ができる。

「まずは貴様からだ、忌まわしき功善の子よ」

2人がジリジリと距離を詰めてくる間に、芥子は一気にエトへの距離を詰めた。当然羽赫による反撃を受けるが治癒するので甘んじて受け入れ、確実に仕留めに向かう。

更に不幸な事に、羽赫が出てこなくなる。燃料切れという事だろう、もはや彼女は芥子からすればただの人間と変わりない。

「しまっ……!?!」

咄嗟の事だったのか、伊丙と鈴屋も応援には向かえていない。そして容易に、彼の手に持つクインケが、エトの体を貫いた。

「見るがいい。貴様らの柱を一つ折った、簡単にな。次は……」

もはやガス欠状態の彼女だ、勝負は決しただろう。そう思い芥子がそれを捨て去ろうとクインケを振ると。

「……やっぱり私を狙ったな」

エトはクインケを握りしめていた。

「誰の許可を得て、その羽を使っている」

同時に地面から射出された何かが、芥子の背中、赫包を傷つける。何かと思い見てみるとエトの羽赫が射出されていたのがわかる。元から仕掛けていたのだろう、しかしピンポイント過ぎる。

サポートに徹したエトを潰す為に芥子は踏み込んだのだが、それは誘導されていたという事だろう。浮いた駒を潰す事は定石だ、ただそれに従っただけであるが、踏み込んでくるという確信はエトにはあつた。更に芥子の足を貫いて緑色の触手が展開され、固定している。後ろを見れば伊丙がクインケ「草薙」により拘束した事が分かる。

「私のものだ、腕げろ」

そしてガス欠に思われた羽が展開され、芥子の腕が切り落とされる。それも油断を誘う為にわざと見せたのだろう、愚直な突進攻撃ならば貫かれる事も最初から予期して。

仮に切り捨てに来ていたとしても、死んだふりをしてエトは抱きつく予定だったので問題ない。それはそれでトラップに嵌めれば良いだけの話でもある。

ただ、刺突を選ぶだろうとエトは予期はしていた。優越感を得る為に死体を掲げて捨てる、芥子が周りの心を折るためならば、それが最

も合理的であった。

「ちつ、芳村あああ……!!」

だが羽をもぎ取りはしても、まだリゼの赫子は残っている。それで足の触手を切りつつ、エトへと赫子を向かわせていると。

「お疲れ様です、アラタ」

いつの間にか距離を詰め切っていた鈴屋が、隣赫を破壊していた。同時に展開していたアラタも崩れ、彼も崩れ落ちていく。鈴屋はたった一撃を全力で振るうだけでも限界だったのだ、その一撃を最高のタイミングに持ってきていた。

しかし限界だったのだろう、的確に赫包を狙ったが僅かに一つだけ残っている。ただ鈴屋やエトにトドメを刺したい気持ちが芥子にはあるが、それは出来そうにない。

「ハイル、貴様——完全な人となった私に挑むというのか!!」

片腕をもがれ、殆どの赫包が破壊され、治癒途中の足には力が入らない。故に撤退は不可能、正面から伊丙と向き合った。たった一つの赫子が伊丙に迫る、対して彼女も同じように赫子を向かわせた。

しかし、その方向は芥子にはない。

「自切!?そんな事を……!!」

赫子をぶつけ合わせると、地面へ縫い付けた。同時に彼女によって残った手足が切り離され達磨にされていく。しかしこの化け物は異常な回復力を持っている、このまま放っておいても死ぬ事はないだろう。

攻め手はない。赫包の回復が行われる前に、芥子は回復を済ませるだろう。成から借りていたクインケも草薙しかない、だが彼女は突き進む、その攻め手は必ずやってくるからだ。

「終わりだ、老害」

エトは伊丙に、自身に突き刺さったクインケを投げ渡した。この世に存在する最強のクインケの火力は、容易に残り滓を消しとばすだろう。受け取った伊丙はまるで生まれた時から触れてきたかのように巧みに扱い、その真価を発揮させる。

「貴様らあああああ!!」

少しの間、激しい断末魔が響く。しかしそれも収まると辺りを静寂が包み、その後に歓声が湧き出してくる。

CCG防衛戦、Vやピエロの混成部隊との戦いはここに終着した。

☆

赫者同士の戦いというのは、もはや人の領域どころかグルールの領域すら飛び越えた異次元の戦いになる。成は鎖骨と砂塵を両手に持ち、攻撃を行う一方で、旧多は完全な赫者として赫子を解き放っている。「ちっ!!」

両者の戦況はまだどちらと決定打を与えられていない。攻撃の被弾数で言えば旧多の方が圧倒的に多くはあるが、分厚く纏った赫子により大きなダメージはない。一方で成は尾赫を叩きつける事で高速に移動し続け、回避や受け流しにより被弾が圧倒的に少なくはあるが、それに対応している旧多の攻撃も着実に当たっている。

高機動の成と高火力の旧多、戦況は拮抗しているように見える。

だが、当の本人は拮抗しているのは今だけであると考えている。

「(竜の罫を仕掛けてる分、僕は有利。地の利は得てる)」

この部屋は元々、迎撃の為に多少なりとも細工をしている。金木の時にそれは見せたものの、まだ彼には見せていない。手札というのは隠すから強いのである、そしてそれを切るタイミングが重要なのだ。「尾赫で加速は驚きですけど、その加速じゃ止まるのは難しいです(しょ)」

ゆえに、罫にかける事は容易い。一見して互いの力比べをしているように見えるが、その実力比べとは違った所で旧多は戦いを挑んでいる。そしてごく自然に、竜が反応する位置にまで誘い込む。

「(かかった!!)」

そして、旧多のみを見つめる成の背後を巨大な赫子が飛び出してくる。凶体とは裏腹に高速で迫り来る圧倒的な質量、直撃コースだ。それに合わせて旧多も前に出る、挟み撃ちだ。どう行動を選択しようと、旧多が有利な状況である。

「ガハッ!?!」

しかし、成の攻撃は一方的に当たった。後ろからの攻撃を中途半端

に避けると予想していた旧多の意表を突き、鉄骨もへし折る棍棒のよ
うな尾赫の一撃は、容易に旧多を壁にめり込ませた。

「(当たり前のように僕を狙ってきたか、でも……終わりでしょ!)」
だがそれでも良いと旧多は考えている、何故ならばそれ以上の攻撃
が背後から迫っていたのだ。半赫者として装甲が薄い成ならば一溜
まりもない。

はずだった。

「(な、何で……軌道が変わった? いやあり得ない、そんな事は……)」
結論から言えば、当たらなかつた。しかし回避したわけではない。
勝手に意思を持ったように竜の赫子が成を避けたのだ。

しかし、旧多の戸惑いは続いていく。

「はっ…え、ちょ……はっ?」

あちこちに仕掛けた罠がひとりで動き始めたのだ。それも全て
意思を持ったように、まるで誰かに操られているようだ。旧多はすぐ
にリゼの事が頭に浮かんだ、しかし金木と戦っている影響で起きたと
は考えにくい。自分の意思で動かしているとしても、その赫子の意思
はこの場で見ているような統一感がある。

ゆえに、何かをしたとするならば。

「罠はお前なら張ると思っていた、それが赫子由来のものを使うとも。
爆弾を仕掛けるなんて事は態々卵管を壊しかねないから出来ないし
な」

あつさりとして、その種を明かしていく。彼の尾赫が切り離されると少
し動きがぎこちない赫子の中に入り込んでいった。すると間もなく
他の赫子のように機械のような統一感を表していく。

「赫子だって、手足を動かすように電気信号で動く。だから奪い取れ
る」

成遼太郎はグールにおいては天才だ、その代表となる能力が他者の
赫子に乗っ取ることである。竜の時はあまりに巨大過ぎたのでその
手は使えなかつたが、正真正銘、彼の切り札である。

自切し意思を持ったかのように動かす事ができるグールは一握り、
そしてそれを更に超えた能力が彼にはある。ゆえに旧多は自身の異

変をすぐに気づく。

「僕の技を喰らったのは、わざとかよ……！」

自分の赫子の制御が滞り始めたのだ。恐らく攻撃の際に微量ながらも成の赫子が付着したからだろう、それが彼の電気信号を邪魔している。

「終わりだ旧多」

そして、そんな旧多に向けて成は突進していく。竜は使わない、それはあくまで出来ることを見せて心にダメージを負わせる為だからだろう。これはただの戦いではない、旧多の心を折る戦いでもあるのだ。

「僕はまだ、足りていな……っ!!」

全ての赫子が、成に襲いかかる。上下左右から乱雑に放たれる赫子の奔流は指揮系統の麻痺で狙い通りには通らない。そんな攻撃に当たる、相手でもない。

「私も、これでお役御免だ」

そんな彼の顔に、深々と拳がめり込んでいく。

赫子に覆われていようが関係なく粉碎し、壁へめり込むほどの威力で殴り飛ばした。赫子の操作もおぼつかず、脳を激しく揺らされたのもあり、旧多は活動を停止させている。

そしてほぼ同時に、地下世界全体が震え始める。

「……金木も終わったか」

人とグール、グールとグール、人と人との戦いが大きく乱れた時代だった。支配された世界は解放された、支配者はいなくなった。鳥籠の外にはまだ見ぬ景色が広がっている。それが蒼穹なのか、暗闇なのかは誰にも分からない。

「さて……どうするかな、これからの人生」

ただ一つだけ言える事は、それでも鳥は外に羽ばたくという事だろう。

エピソード

√A

竜の事件から6年、東京は変わった。

ただ復興も進み今では街は6年前の形に戻ろうとしている、変わったのは卵管がある事と巨大な赫子の柱があることだけだ。

そんな中でCCGは解体された。グルルが敵ではなく仲間となった今、それは必要とまではいかなかったからだ。現在グルルは人を食べない、いや人の食事が取れるようにもなった。開発が進んだ夙成の投与を受けたものはグルル専用の合成食品を食さずとも、人の食事を受け付けるようになったのだ。しかし副作用などの問題もあり、まだまだ試験途中でもある。だが近い将来、人とグルルという区別は無くなるのかもしれない。

一方捜査官はどうなったかというと、地方のCCGに移籍する者も多くなったが、TSCという組織が立ち上がり、そこに所属する運びになった。そして捜査官は保安官と呼ばれるようになった。ただこれはグルルも勿論対応する組織ではあるのだが、敵は基本的に竜の遺児である。

毒を持つ卵管は金木研らによって止められた、しかし他の卵管は依然として人を襲い続けていた。それに対応するのが新組織であり、その本部をとある若者が走り回っていた。

「竜将どこ行ったんだ……」

竜将とは新たなTSCに設けられた最高位の役職だ。このTSCにおいても設立からたったの2人しか選ばれていない、選ばれた存在だ。そんな上司を探し回っているようだが、そのような人影は見当たらない。

しかしふと、視界に見慣れた女性がはいったようだ。

「あ、真戸准特等！竜将知りませんか？」

真戸暁、准特等保安官としてTSCに所属しており、新設S1班の班長を務める凄腕の女性だ。若々しく、現在は一児の母でもある。

近々引退をすると本人は言っているが、その気配を感じさせない程に若々しい保安官である。

「鈴屋竜将なら先ほど見かけたが、君の探す方は知らんぞ」

鈴屋什造、現在竜将を務める1人である。6年前の戦いにおいて多大な功績を残し初代竜将の1人として就任、元鈴屋班は現在彼の元で多くの部下を抱えた新生鈴屋班として活躍している。

「すまんな、人を待たせている。あまり迷惑をかけるんじゃないぞ」

そう言う真戸の視線の先には巨漢がある、遠くからでもその筋肉質で威風堂々した姿に誰かがわかる。

「あ、亜門上等とですか……失礼しました！」

亜門鋼太郎、TSCにて上等保安官として真戸暁の右腕として活躍している。一時期は世界を見極める為に旅に出ていたが舞い戻り、今では准特等になるのも時間の問題と言われている。また籍入れていないだけで、真戸暁との間に子を儲けており、暇な時間に託児所に訪れては何人かの子供達に泣かれてしまうのが最近の悩みらしい。

「竜将の知り合いとか、誰か……」

仕方ないので新しい人を探してみる、知人であればすぐに見つかるかもしれないが、有名人であるので誰に聞いても答えてくれそうではある。

「瓜江准特等！竜将見てませんか？」

「すまんな、見かけてもいない」

瓜江久生、TSCの准特等として活躍中の期待の星であり、次期竜将の呼び声も高い。またクインクス班も大幅に増員し、それを纏めてもいる。最近では米林一等と良い雰囲気らしく、周りからはいつくつ付くのかと裏で賭けが行われている。

「あ、僧頭一等。竜将見てませんか？」

「見てないな、シオか副竜将探した方が早いかもしれないよ」

元0番隊、庭出身者でもあり生還した彼らは夙成を授与された事で寿命の問題がクリアされ、保安官として活動をしている。普通の生活という選択肢もあったが、すでに社会に出て働いている彼らはそのままTSCに望んで入る運びになった。

「あ、月山さん所のえつと……従者さん、竜将見てませんか？」
「(見ていない)」

「あ、すみません……まだ手話は覚えられてなくて」
「(問題ない)」

月山家の従者達はその多くがそのまま月山習に仕えた。ユウマとアリザは結ばれると子と共にその一生を捧げ、松前もまたその一生を月山習の隣で支え続けた。

そして月山習はTSCに協力する喰種団体『共同戦線』の代表者となり、良き理解者として人とグールの世界を作っている。元あんていくのメンバーも、多くがそこに在籍また協力関係を結ぶ立場にいる。「休憩室……にもいないか、てか誰かテレビ付けっぱなしにしてるし」『ではここで【王のブレイグ】の上映会に現れた高槻先生のインタビューを……』

「うわあ、見たいけどまた今度だなあ……」

芳村愛支、グール作家『高槻泉』として話題を呼んだ影響が現在では最も著名な小説家の一人として活動中。王のブレイグの続編も刊行されており、ここ最近で最も売れた話題作として注目されている。

共同戦線においてはグールの孤児院の管理を行っており、良き理解者であり保護者として彼らを導く傍らで、共同戦線の指揮を取る事もあり、多忙な毎日を送っている。休日は唯一の安らぎの時間らしく、邪魔される事を嫌っているらしい。

「すみません、竜将見てませんか？」

「……ん？呼んだかい」

「あ、はい。えつとキジマさんですよ？起きてるんですよ？」
「起きてるよ、それに竜将は見えないね」

キジマ式、現在はTSCの研究員として前線を退いている。失った手足の再生医療などに着手しており、少しずつ実用化に向けて日々邁進している。得意な事は竜遺児の解体だそうだ。

「これ本部に居なさそうだなあ……ご飯でも行ってるのかなあ？」

仕方ないので外に出てみようかと考えていると、後ろから目を隠される。

「誰でしょーか？」

「旧多監視対象官……また竜将達に怒られますよ？てか自由に歩き回ってますけど、いいんでしたっけ？」

「大丈夫大丈夫、だつてウチの娘にメモメモだし」

「良くないですよ。本当にこの人6年前にやらかした人なのか……？」

旧多二福、以前は和修を名乗るも和修は消えた家名であるので元の名前に戻っている。半グループであり、6年前の事件の主犯として300年の保安官としての実務が義務付けられており、体の中にはICチップも埋め込まれて管理されている。だがその刑も功績によって減刑されてきておりSSSグループとして脅威となっていた『死堪』の討伐や卵管の停止などにより既に70年減刑されている。

竜戦後は独房でただ死を待つ廃人となっていたが、それはある事態をきっかけに人が変わったように生き生きとし、今では誰よりも率先して敵を屠る『TSCの死神』と呼ばれている。

なおその要因は竜の核より金木によってある胎児が回収されたからだ。詳しいことを調べてみると旧多トリゼの血が混じった存在、つまり子供である事が分かった。それにより自身はまだ生きる意味があると考え、旧多は死刑囚ではなく監視対象官として活動を始める。現在は娘も監視対象ではあるもののTSCの託児所に預けられている。かなり親バカとしてある意味有名人でもある。

「あ、もしもし。宇井教頭ですか？竜将そっちに行つてたりしません？」

『また居なくなつたのか？』

「は、はい……教頭は付き合いが長いと聞いてますし、どこか心当たりとかありますか？」

『まあ、多分あそこに居るが……』

宇井郡、現在はTSCの保安官アカデミーの教頭を務めている。現役時代の経験を生かし、実践的な演習に多くの候補生が教えを請いに来るも殆どそのスパルタ特訓に涙目になっているそうだ。

「……………かあ」

そして本部から少し離れた所にある喫茶店を見つける。喫茶店の名は『あんていく』現在は金木研の妻であるトーカとその叔父にあたる四方蓮次が経営している。

「あ、いましたよー」

中は平日という事もあり人は少ない。渋く寡黙なマスターと愛想の良い店員の2人で成り立つこの店の評判は良く、金木達の愛娘であり看板娘でもある一花へ会いによく元あんていくメンバーやクインクスのメンバーも集まる。

「あら二等、相変わらず忙しそうね」

そんな場所に、ようやくお目当ての人物を見つけた。幸せそうにパンケーキを頬張り、優雅に珈琲を飲む上官を、見つけた。

「忙しい理由、大体は伊丙竜将のせいですからね？とりあえずハンコ押してくださいよ！何仕事ほっぽり出して珈琲飲んでるんですか!!」

伊丙入、2人しか居ない竜将としての位を持ち名実共に現TSC最強の保安官との呼び声も高い。旧多や亜門、滝澤といった元半グールの人間たちを束ねた超精鋭部隊を新設する話が上がっているものめんどくさいからと断っている。

部下からの信頼は戦闘面においては圧倒的過ぎる戦闘力を発揮する事で神格化される程にあり、戦域の女神とも呼ばれている。一方で事務作業などをめんどくさがり、殆どを副竜将に渡しているのでその点においては副竜将の方に信頼が寄っている。

旧多の管理者兼有事の際における処理者としての肩書きもあるが、その実際の仕事のほとんども副竜将が行っている。

なお本人曰く働かないのは「責任取ってくれるから」と意味のわからない理由ではぐらかしている。

「あれ、やってなかった？」

「副竜将も見つかんなくて困ってたんですよ、今どこですか？」

「あいつなら……」

そして中々見つからなかった事で仕事が滞った原因の1人でもある、副竜将の方へと彼女は目を向ける。

「今そこで皿拭きしてるわ」

「なんでですか!?!」

そこにはなぜか、見慣れた眼鏡をかけ見慣れないエプロンを付けて皿を片付ける保安官がいる。

「成副竜将?・何してるんですか!?!仕事に戻ってくださいよ、貴方が不真面目だと竜将はどうなっちゃうんですか!!」

成遼太郎、伊丙入の右腕でありTSCの副竜将として保安官を務めている。6年前の戦いの後に捜査官を引退しようとも考えていたようだが、転職先も特になかったのでそのまま保安官へ移行している。殆どの者に知られていないが、当初は竜将になる話もあった。ただ『今迄二等の人間が最高位は不味い』との理由で固辞しており、代わりに伊丙を支えている。

現在は旧多の監視役、竜将の書類対応、竜将のスケジュール管理、竜将の代わりに会議へ出席したりと、殆どの仕事をこなし実戦でも彼女と共に一番槍を務め、部下からの信頼も厚く、竜将の世話係として認識されており、女神と死神に挟まれる姿がよく見られ過労で倒れないか心配されている。

現にデスクに突っ伏して寝ている時もあるが、その時は大抵竜将に悪戯を受けたり写真を撮られたりしている。

また捜査官として高過ぎる戦闘力を持つ事から竜将や監視対象官と同じく半グループという噂もあるが、赫子を使う姿を見た者がいないので真偽は不明。

最近の趣味は読書と喫茶店巡りであり、休日は毎週のようにお勧めの店があると芳村エトに連れ回されている。

「いや、財布を忘れてな。流石に伊「ハイル」:ハイルに奢ってもらわねにもいかないし、ツケにも出来ないからな。それと今日の仕事は終わらしてと思うが」

「いや副竜将は終わってますけど、あんなじやじや馬な竜将御せるの副竜将だけなんですよ!?!気づいたら居なくなるんです、ハンコ押すだけの書類が殆どなんで戻ってきてください!!」

「……ハイル、やっぱりお金貸して。仕事に戻ろう」

「リョウが私の好きなところ五個言えたら良いわよ」

「可愛い、美人、強い、かつこいい、イケメン」

「それは前も聞いたから別のじやなきやダメよ、もっと具体的に言えばたら奢りにしてあげる」

「……すまない二等、後で返すから借りても良いか？」

「あるわよね？え、あるわよね？二等、絶対に貸すんじゃないわよ。これ竜将命令だから」

「ええー……仕事が……」

保安官としての仕事は基本的には遺児の対処であるのが、やはり書類仕事も多い。クインケは補給がもう出来なくなったので管理体制が厳しくなった影響でそれに関する手続きが増えたり、グールとの協力という関係があるのでそれに合わせた作戦を新しく考えたりと、上に立つ者程以前より忙しくなった。

竜将の仕事も任せられている私の仕事量は副竜将なのに鈴屋くんの倍近くあり、就任して直ぐは寝る間も惜しむ程にめちゃくちゃに忙しかった。だがどんどん効率化してきたので今では定時を少し過ぎる程度に収まっている。

そして、逆にー

「高槻先生の新作読んだか？」

「見たぞ『ビレイグの腹心』続編っていうかサイドストーリーみたいだったけどな」

「ああ、でもまさか黒幕まで最後は口説き落とすとは思わなかったわ」
普通の保安官の仕事量は、多くはない。何故なら管理や運営は上官の仕事だからだ、その代わりに彼らには現場で頑張ってもらっている。少し程度の雑談は気にならない、むしろそれを許さない空気で仕事をする方が疲れそうだ。

「あ、成さんも知ってます？グール作家の高槻泉って人」

ただ珍しく、私にも話が振られてきた。

「知らないわけあるか【隻眼の梟】は有名人だしな」

高槻泉、彼女はTSCでもっとも知られているグールだ。それは小説家としてもだが、最恐のグール隻眼の梟という事が公言されているのも理由だ。SSSレートのグールはもはや伝説の存在なのだ、その中身が聡明な美人作家となればギャップもある。

「隻眼の梟としてグールの自由を勝ち取る為に戦ってきた、それは賛否両論ですけど……彼女が居るから今の時代があるのは事実ですもんね」

ただ彼女の存在は完全に許されたわけではない。恨みを持つ保安

官や捜査官は多くいる、しかしグールに憎悪を抱かない人間そのものが少なかつたのだから仕方のない事だ。

今はグールと人の間を取り持とうと活動を率先して行っている、たまにクインケを片手に突貫してくる相手も居るそうだが、それ受け止めて話し合つて、わかり合う事を努力している。居合わせた場合は基本的に私がぶっ飛ばしてしまうが。

昔から彼女を知る者としては、世界を悲観せずに笑顔を見せるようになったのは良い事だと思う。

「隻眼の梟、副竜将も戦った事あります？ やっぱり強かつたんですか？」

「昔の私にそんな仕事が割り振られてたまるか、それと定時に帰りたいたらそろそろ手を動かせ」

当時はほぼ二等捜査官だったし、でもこの世で一番殴り合つてはい。今でもたまに殴られるぐらいだ、昔から尻に敷かれ続けているがこの立場もう死んでも変わらなさそうだ。

「う、すいません。がんばります」と言つて皆手を動かし始める。しかし手を動かせと言っただけで口は閉じろとは言つていないので雑談は続いていく。

私としても仕事さえして貰えば飲み食いしようがどうでもいい、ただそろそろ話を切つておかないと嫌な予感がしたのだ。

「でも本当に美人だよな、あれで30代なんだろう？ 子供も可愛いし、羨ましいよなあ……」

「前世でどんな徳積んだんだろうな……」

部下の2人が談笑する、話題もそろそろ切り替わりそうでホツとしていると、一つ気配が増える。

「ですよー、高槻先生を奥さんにするなんて羨ましいですよー？」
嫌な予感が現れた。

部下達が談笑していたら、いつの間にかその背後に死神がいた。

「げ、旧多監視対象官……どうしたんですか？」

部下達は旧多の事を基本的に不気味に思っている。昔にやらかした主犯格でTSCの死神であり親バカなのが今の彼だ、属性があり過

ぎて戸惑うに決まっている。

「何、面白い話が聞こえてきたので。高槻先生の作品は僕も目を通してますよ？何度も赫子を交えましたし、久しぶりに会ってみるのも良いですね」

「そんな血生臭い関係は嫌なんですけど……」

困った顔で部下達が私を見る、なんとかしてくれと言うのだろう。ただそれがトリガーとなったようで旧多の矛先が私に向けられる。

「あ、成副竜将。高槻先生は元気ですか？」

「……元気だよ」

むしろ元氣過ぎて息子に赫子の指南をしてるほどだ、もう良い年をしていると思うのだが。

「副竜将のお知り合いなんですか？」

別に隠してはいないのだが、もうこの後の結果が目に見えてくる。皆の仕事量が絶対に落ちるに違いないだろう。

「知り合いも何も、奥さんだから家族ですよ」

「え？は……ええええー！！！」

高槻泉、本名：芳村愛支^{エト}は私の妻だ。なんでこうなったのか、正直私も分からない。ちなみに苗字はちゃんと成である、本当に何故結婚したのかと言われたら分からない。

そもそも彼女が私に対してそういう感情を抱いていたのがいつからかも分からないし教えてくれない。ただ思い返してみれば勝手に命を助けた辺りから様子は変わっていた気もする。

「副竜将、高槻先生が奥さんなんですか!？」

「……そうだな」

「確かに高槻先生も結婚相手は保安官って言ってたような……」

ちなみに結婚したのは竜の事件があつて数ヶ月後、一緒に食事をし気づいたら朝になり隣に生まれた姿のエトがいた。酒の勢いで私が襲ったらしい、なので責任を取って今に至る。

ちなみに後で知ったが襲われたのは私の方だったらしい、ただ籍を入れた後で言われた。計画的犯行だった。

『こうでもしないと、君は踏ん切りがつかないだろ？それにー、子供に

は父親が必要だもんなー?』と彼女にお腹を押さえながら言われたのが今でも鮮明に思い出せる。とんでもない意趣返しだった。

そんな事が色々あつて結婚した、ただ式はグループ式でグループと一部の知り合いだけを呼んだ形にしたので実は私が結婚している事を知らない人もたまにいます。

「ど、どういうきつかけで?」

「……古い知人だよ」

昔は彼女を女性として意識したことはなかったのだが、今ではこの世で一番愛している。私はちよろいのかも知れない。

「いやー、困り顔の副竜将は面白いですね。じゃあ僕はこれで!」

そして旧多は去っていった、いつもあいつはこんな感じに悪戯をしてくる。後でめんどくさい仕事を絶対に押し付けてやろう。

☆

「はっはっは、相変わらずだ。あいつは君を困らせて楽しんでるみたいだねー」

エトにこの事を話すととても笑われた。仕事のこともよく話すが、やはり旧多や竜将について話す時が一番多い。というかそれが一番悩みの種を産んでくれる。

「エトさんも似たようなものでしょ」

ただ属性的には、彼女も似たようなものだ。

「ブレイグの腹心、あれ知る人が見れば私って直ぐ気付きますよ。側から見るとあんな感じとは思わなかったですけど……」

本気でビビった、彼女の新作というのでワクワクして読んだがこれ元は実話を題材にしている事を忘れていた。そしてエトさん視点の私がつんでもないぐらい無茶をしていたのを見て「こんな人間いないだろ……」とか思っていた。

今思い返すだけで頭を抱えなくなる。

「ほら、着いたぞ。不甲斐ない顔はもうやめたまえ」

「いつもそうするのは貴方ですけどね」

「私はどんな君の表情かおでも好きだからね」

そして頭抱えながら移動していれば、目的地はあっさり到着した。

今は彼女と散歩をしているというわけではない、2人で仕事を終えたので我が子を迎えに行っているのだ。

「ほら貴生、お父さんも珍しくお迎えにきたぞー」

場所は幼稚園、そこに私の面影を持ちながらエトさんの髪色をした子供がいる。私達の子だ、名は成貴生で有馬さんの名前を少し借りている。たまに片目が赤黒くなる半グループであり、もう赫子も出ている。少し気が弱いのは特徴的ではあるが本当にエトさんの息子かと思うほどに純粋な優しさに溢れている。

「ありや、今日も引っ付かれていますな」

その息子なのだが、様子がおかしい。いつもならすぐに駆け寄ってくるのだが、背中に誰かが抱きついている。

「夫婦揃っては珍しいですね」

仲の良い友達かな？とも考えていると、後ろから声がかかる。よく仕事場で聞いているのもあり、それが誰かはすぐに分かる。

「おやハイルか、相変わらず凄まじい気配だね。こりや今の遼太郎でも手を焼きそうだ」

伊丙入、私の上司であり最強の保安官だ。ちなみにその実力は6年前よりも赫子やクインケ操術を高めている事もあり、今ではアラタも使えば旧多以上の力を持っている。

彼女が戦場に出れば殆ど見てるだけで済むぐらいに助かっている。

「ハイルは別の意味で手を焼いてるんですけどね……」

一方で彼女は書類仕事なんかを全然しないのだ、宇井さんに任されている手前無碍にも出来ず、なんやかんや私の方で処理している。こんな形で真戸さんや黒磐特等、宇井さんの元で雑用をしていた経験が生きてとは思わなかった。

「大丈夫よ、遼太郎はあれだけやっても平然としてるし。これからも頼むわ」

ちなみに彼女がここに来ている理由だが、簡単だ。彼女も子供を迎えに来たのだ、ちなみに相手は宇井さんで今は保安官アカデミーの教頭をしている。普段は宇井さんの方がお迎えに来ているのでエトさんはそつちとも私関係の話で花を咲かせているらしい。

ただその子供についてはまだ会ったこともない。

「灯、^{あかり}帰るわよ」

名前だけは知っている。ちなみに彼女の苗字は宇井になっており宇井竜将とよく呼ばれており、私は宇井さんと混同するので今は彼女を下の名前で呼んでいる。

「……あ、ママー」

すると、私達の息子の背後から元気な声が聞こえてきた。どうやら抱きついているのが彼女の娘らしい。そして貴生の手を引いてやってくる、仲が良いのは良い事だなあと思いながら見ていると、ハイルの前までやってきた灯ちゃんは息子を抱き寄せる。

「ママ、これ欲しいー」

そして、息子が奪われそうになっていた。最近の幼稚園児は進み過ぎていいのか、もう彼女を作ったのかと息子を見てみればすごく困惑している。どうやら本意でないらしいし、グイグイ来られているようだ。

ただハイルに聞いているあたりまだ良し悪しの区別をする途中のようだ、ここは母親としての彼女を見てみようと言っていると。

「良いですよ」

「いや良くないが」

思わず突っ込んだ。流石に息子が不憫過ぎる、何となくではあるが彼女の娘からは昔の彼女の雰囲気を感じるのだ、息子の受難が容易に想像出来てしまう。宇井さんの要素が今のところ髪色しかない。

「欲しいものは早めに目印をつけときなさいさ。じやないと泥棒に横取りされるかもしれないのよ」

「おやおや、早い者勝ちだろうか?」

「約束したその日にあんな形で仕掛けてくるとは思いませんでしたけどね」

そう言ってエトの方を見る、なんだろう。この2人の間でそんな事があったのだろうか、まあ私には関係ないだろう。

「わかった、しるしつけるとく」

そう灯ちゃんは言うと言息子の首に吸い付いた。え、この歳で印付け

るって名前を書くとかじゃないのか。キスマーク付けるのは初めて見たんだけど、こういう大人がやりそうなマーキングを幼稚園児がするの……？これが普通なのかとエトさんの方を見る。

「ハイル、孫ができた時の初宮参りだが」

「そうですね、個人的には大きい所が良いです」

全然こつちを見ていなかった、というか何を話しているのかも分からない。ただ何となくではあるのだが、息子とこの子は長い付き合いになりそうだなと思ってしまう。

「……貴生、強く生きような」

涙目で抱きつかれている息子、ただ残念ながらその子が息子を手放す事はないだろう。ハイルの血を引いているなら、その執念強さは間違いない。

私は心の中で息子の肩を叩く事しか出来なかった。

ただこの時の私は2人が保安官となり結婚するとは、知る由もなかったのである。